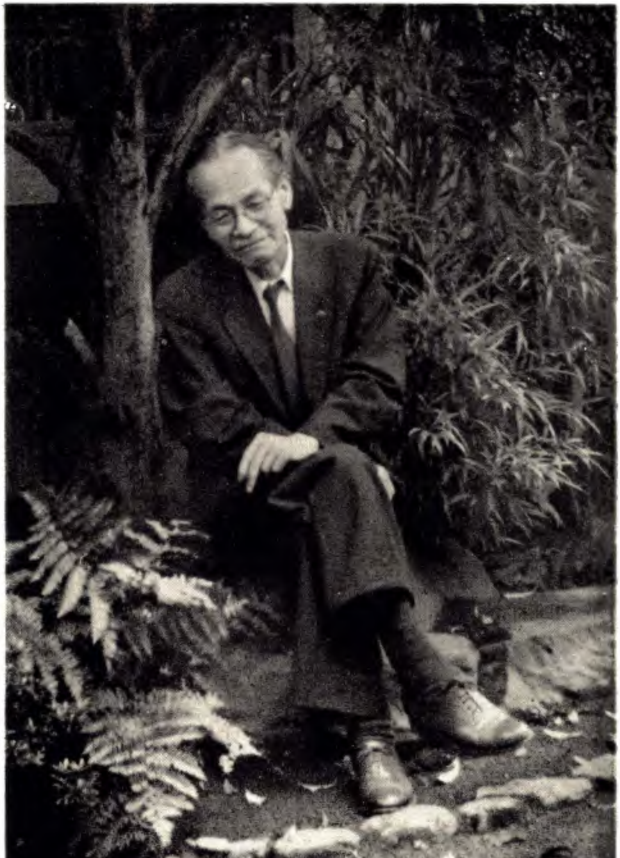
川 雑 叢 書

Shin senryu kansho

麻生路郎著

新川柳鑑賞

川柳雑誌社版



著　者

著者の言葉

私が川柳に手を染めたのは明治三十七年だった。その頃の作家は宝暦明和の作品を凌ぐというにあった。しかし、明治三十九年頃から、そうした目標に満足出来なくなったので自ら天才と称した小島六厘坊が川柳革新の口火を切ったが、同四十二年の初夏の頃、六厘坊は二十一歳の若さで肺患のため世を去った。

六厘坊歿後、革新傾向は東西呼応して稍表面化したがそれが伸びるためには幾歳月を要した。しかも既成、革新が兄弟墻にせめぐに過ぎなくて川柳そのものは社会から遊離していた。それを遺憾とした私は川柳の社会化を提唱し、川柳を弘く社会に認識させるためと作家養成機関として大正十三年に柳誌「川柳雑誌」を創刊した。昭和十一年には専門家なき世界発達せずと主張したが誰も荊棘の道に踏入ろうとはしなかった。私は多くの非難や忠告を押し切って、先ず隗より始めることになり、昭和十一年七月に職業川柳人宣言となったのである。その後、日支事変、太平洋戦争となり、悪戦苦闘は筆紙に尽せないものがあったが、戦い抜いて漸く今日に到ったのである。島田という男は「我れ世に勝てり」と云ったが、私のような鈍才にはそうはいかない。まだまだこれからである。この小冊子を刊行するのも、我が愛する川柳を弘く世に知ってもらうための一片に過ぎない。

一九五九年六月

川柳雑誌社編集局にて

麻生路郎識

凡例

☆「新川柳鑑賞」は麻生路郎主宰の月刊「川柳雑誌」に昭和二十八年十月号から昭和三十四年の五月号まで連載したものから、嚢に東京至文堂から刊行した「川柳とは何か」の後半に「川柳の味い方」として発表した二百十九句の鑑賞を省ぶき、更に未発表の鑑賞原稿を追加したものである。

☆従って、どんな句の鑑賞が「川柳とは何か」の方へ割愛されているかを知る便宜上、本書の巻末に、附録「真珠句抄」として二百十九句を掲載しておいた。

☆「新川柳鑑賞」は一般の読者を目標に執筆したので、句の鑑賞を多少解説的に、興味的にしたことをことわっておく。

☆本書の鑑賞句は主として月刊「川柳雑誌」から拾ったが、他の柳誌や句集からの名吟も

鑑賞したので五百六十三句の多きに及んでいる。本稿は日々多忙の中で、鑑賞執筆したので原句をすくなからず傷つけたことと思う、その点を句主に深くおわびする。

★句主の雅号を左に録して敬意を表する。

湧三、一善、豆秋、梅志、味平、方大、緑之助、千石、伍健、千容、閑生、水車、葭乃、不二、夜潮、幽王、灯竿、賀峰、明珠、香林、一瓢、法泉子、美喜、花村、万古人、狂二、ひか平、保美、太郎丸、晃、芳仙、七面山、潮花、素身郎、甲吉、麦太楼、芙路、友子、高志、散歩、生々庵、涼月女、俊江、文庫、多久志、玲人、良子、五茶、万古、鳩花、方正、湖山、没食子、しげ女、望峰、文秋、史葉、春日、す頭女、東岸子、武、黙平、鈴馬、どんたく、雨吉、旭童、吟女、万楽、白水、柳川亭、孤浪、日満、おさむ、不水、喜由、春巣、知恵美、矢寸志、満秋、初甫、蘭、妄夢、好郎、文平、谷木、水客、満年、清生、水堂、日本村、薫風子、淡舟、清潮、参無子、山茶花、茶仏、東洋樹、阿茶、珊枝郎、鉄児、豊年、不二子、千代美、白香、恒雄、藤波、圭水、六花、北海、

凡九郎、草右、牛歩、半休、光郎、形水、猫三、宗太郎、夏六、草一郎、素生、幸男、八ッ茶、古方、迷窓、牧人、千里、いわを、一浪、小松園、柳葉、薩城、静観堂、一哲、遠二、一伸、鉄洲、季賛、博也、十悟、左文字、若菜、挽郎、栞、梨花、娯句楽、美笑、むじな、一貫、春雄、ひさみ、圭井堂、千永、弘道、丁路、蜂呂、自由朗、十九平、鬫骨、久米雄、蛙眠子、奇童、伊知呂、摩天郎、省三、幽谷、明林、薺花、ゆづる、杜的、白星、愁夢、修三、一念、鬼美、山川児、一ン十、アート、水堂、井蛙、無鬼、扇子仙、静馬、回天子、緑雨、しげお、沐天、八歩、芳泉、良坊、柳蔭亭、雅堂、一雨、旋風、一恒、夢裡、一傘、牛耕、虹要、月都、庸佑、三歩、きさ子、雄々、甦光、宏方、侃流洞、永断、珠笑、水鏡子、一也、堰子、暁明、野甫、山雨楼、義風、粗彰、三林坊、村諷子、あきら、祐助、養痴園、一鶴、萊春、竹二、〇丸、甲馬、冬二、文月、花代子。

（順序不同敬称略）

新川柳鑑賞

目次

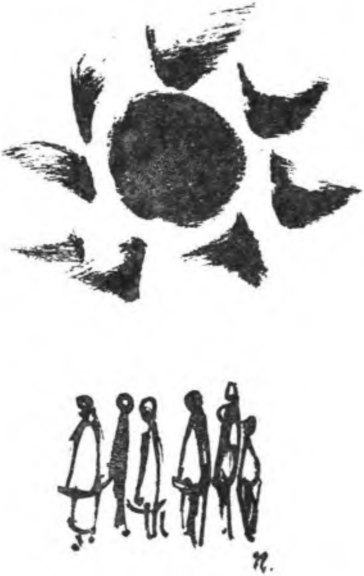
四季……（一）
恋・酒・果物……（一三）
夫婦を中心に……（三一）
女・男……（七九）
職業・職業人……（九五）
上役・下役……（一三三）
衣・食・住……（一四一）

金……………………（一五七）
趣味……………………（一六五）
旅・仏・神……………………（一七三）
動物・植物……………………（一八五）
雑……………………（一九三）
○
真珠句抄（附録）……………………（二一三）
新川柳鑑賞索引……………………（二三三）

題字　麻生路郎

表紙　野尻弘

四季



長閑さよつづけ三百六十五

（湧　三）

元日が日本晴のいい天気だ。いつもよりは暖かで何んとなく長閑である。そうだ、この調子で、ことしの三百六十五日が続いて欲しいものだという、元日の希望的所感の句である。「つづけ三百六十五」の措字はいかにもリズミカルで歯切れがよい。

一年の計吞みながら吞みながら

（一　善）

どんな一年の計であるかは、この句からは判らない。その内容はどうでもよいのである。この句は一年の計という重大なことをきめるのにも、酒を飲みながらやっていると云うところに焦点があるのである。中五、下五を畳み句としたのもそのためである。

お元日右も左もなかりけり

（湧　三）

元日ばかりは誰にとっても上々吉のご機嫌である。イヤ、ごきげんであらねばならぬ日である。一切は議論抜きで平和あるのみの日である。そこには労資の対立もない。自由・社党のいがみあいもないと云うのである。

お元日ばかりは小原の庄助さん

（豆　秋）

三百六十五日を働き抜いて迎えた元日だ。せめ

て元日ばかりは、小原の庄助さんのように、朝寝、朝酒、朝湯でと云う夢を詠んだ句であろう。句の構成が九音四音六音の十九音字でありながら少し調子が軽い。が然しその軽さがユーモラスな感じを出しているとも云えるし、作者の瓢逸な気持が、そのまま句に流れていて面白いと思う。この句を読んだ直後の感じは、小原の庄助さんのように元日を暮らしたのではなく、暮らしたいと云う一つの欲望であることが、「お元日ばかりは」の「ばかりは」からうなづくことが出来るのである。

元日のどこかで笑う声がする　（梅　志）

元日はしずかに明け、しずかに昏れてゆくものである。そしてことっとも云わぬ静粛なうちにも、どっかで笑う声がするものである。作者の鋭どい感覚がそれをとらえている。老巧。

丹前のまんま元日撮される　（味　平）

和やかな元日、朗らかな家庭。「お父さん、写真を撮ってあげよう」とこどもの云うがままに、カメラの前に立ったのである。それは丹前のままの平和な姿であった。

長女にも俺が酌いだるお元日　（方　大）

「お前も飲め」
と、お父様はご機嫌である。

「でも」
と長女が尻込みするのへ。
「今日はお元日だ。いいよ、いいよ。お父さんが酌いでやろう」
と云うところである。

退職

仕切直しに元日の土を踏む

（緑之助）

退職と云う前書がついているのを見ると、暮に勤め先を勇退したのであろう。新らしい年を迎えて捲土重来の覚悟をかためたことを詠んだもので「元日の土を踏む」は力強い表現である。仕切直しは相撲用語であるが、「土を踏む」という下五に巧くマッチしている。

元日の小言半分程で止め

（千石）

小言を云わねば飯の味がまずいと云う人でも、元日ばかりは小言を云っちゃいけないぐらいなことは心得ているので半分ほどでやめたと云うのである。この句は大して新味はないが習性のおそろしさを詠んだ面白さはある。

見なれたる山河であるが初日の出

（伍健）

山にしても河にしても、見なれた景色ではあるが、そこへ紫の雲がかかり、大きな初日が顔を出すと何んとも云えぬ厳粛な気持ちがからだ中にみなぎり、新年の心がまえを新らたにさせられるも

のである。

床飾りよして日の出の軸をかけ　（千　容）

ここへはもう客らしい客を迎えることもないので、儀式張った床飾りはやめて、日の出の軸をかけることにしたと詠んだのである。
日の丸の軸だけをかけて淡々とした正月気分を味わう主じの風格がしのばれる句である。

おとがいも浸けて初湯のちと溢れ　（閑　生）

二日の朝は早くから風呂に入るのであるが、おとがいまでも浸ける心のゆとりが、いかにも初湯らしいのどかさをあらわしている。「ちと溢れ一で、グッと湯槽に深く身を沈めた情景が眼に浮ぶのである。

まな板の白々として三ケ日　（水　車）

せめて三ヵ日だけは台所で働らきたくないと云うので、お正月のごちそうを暮のうちにつくっておくのである。そのためにまな板などはすっかり乾ききって白々として何んだか寒いような気がしたと云う感じを詠んだのである。

松の内まだ一軒を飲み残し　（霞　乃）

上戸党にとって松の内と云うものは人一倍楽しいものである。オオ、誰れそれ君やないかと常日

頃は親しくもしていない人に会ってさえ引っぱって行って飲みたがるものである。まだあそこへ寄って、おれの二上りを聞かしてやろうと思ってるうちに終電の時間が来ることを詠んだもの。

賀状書くスピード落し思うこと　（不　二）

十二月も残り少なくなった。誰れ彼へ賀状を書くことは一つの事務に外ならなかったが、ある名に突きあたって、急にスピードを落して書きながらもいろいろと思い出を辿ったというのである。それは遠い昔に別れた女であったかも知れない。そうした思いが句外ににじみ出ている。

年賀状女将の書いたものでなし　（夜　潮）

炬燵で年賀状をみていると、いきつけの料亭の女将からの年賀状が出て来る。女将自身が書いたにしては達筆すぎる。達筆な女将もいないことはないが多くは舌がまわるほど、手の動く女将は尠ないものだ。多分常連の代筆だろう。イヤそれに違いないというところを「書いたものでなし」と断定しているところに穿ちがある。

年賀状やった通りの文句で来　（幽　王）

年賀状の文句も長い間に型が出来てしまった。それでこの句が面白いのである。少しぐらい型を破って見てもいや味であったり、角ばり過ぎたりしてあまりパッとした文句は出来ない。やはり月並なようでも一般に行われているのがいいのかも

知れない。そこに「やった通りの文句で来」が生れるのである。受取ってニンマリと笑っている顔が見えるではないか。

印刷でない恋人の年賀状

（灯　竿）

誰も彼れも印刷で来るきまり文句の年賀状ではあるが、その中に混じって、印刷でない恋人の年賀状があった。恋人にとっては「あら玉の年のはじめを祝いおさめ候」や「謹賀新年」では何んとなく物足りないのである。「印刷でない」がこの句のヤマである。

葉書一枚とも云えぬ社長の年賀状

（賀　峰）

社長の年賀ハガキは一万出しても五万円はいる。そのうちの大半は宣伝であろうが、それにしてもたいしたものである。ハガキ一枚とは云えない金かさである。とは平社員のソロバンである。社員の年賀状とはケタが違うのであきれるのも最もな話だ。

正月の炬燵女にとられたり

（明　珠）

女と云うものは常に家庭のことにかまけているので、なかなか炬燵になんかあたっているひまのないものである。せめてお正月だけでもあたるひまがほしいと思うのであろう。

今日は寒いから炬燵に居ようと思ったら、もうちゃんと女があたっていたと云うのである。古川

柳にでもありそうな句である。

電停にペンキが匂うお正月　（香　林）

電停で電車の来るのを待っていたらペンキの匂いがプーンとした。

停留場の標柱が新らしく塗り替えられていて正月らしい気分がした。これだけでは何んの奇もないようであるが、この句から作者の感覚の鋭どさを見遁がすことは出来ない。

ぺんぺん草かて春じゃもの春じゃもの　（一　瓢）

ぺんぺん草なんて、生えても生えいでも、どうでもよいと思われるような存在ではあるが、春が来れば自然のめぐみに浴して小さな花もつけるのである。人情だって、そうだよと云う諷刺がこの句から強く感じられるのである。

機関車の入替え驛の日の永し　（法泉子）

ポカ〳〵と暖い春の日に、駅頭に立って、機関車の入替えを見ていると実にのどかである。切り離された機関車が一丁ほど先へ――そして又戻って来る。それから線路を替えて、ガチャーンと云う大きな音響と共に貨車に繋がれる。そんなことがいつまでも繰り返されている。いつになったら終るのか、はてしがないようで日が永いと云うのである。

朧月光源氏に逢えそうな

（美　喜）

おぼろに霞む春の夜にそぞろ歩きをしている女性の恋ごころを詠んだものであるが「光源氏に逢えそうな」と空想をほしいままにしているところにこの句のよさがある。

俄か雨銅像だけが駈け出さず

（花　村）

予想もしなかった雨が車軸を流すように降る。人間どもの慌てまいことか。僅かな木蔭を目がけて駈け出す姿は見られたザマではない。こんな時にも、銅像だけは駈け出さない。平然として濡れるがままに突っ立っている。それは降るものは降ると悟った姿であるとも云えよう。しかし、人間はと考えさされもするが一読ユーモラスな感じのする句である。

引返す勇気もほしい山登り

（万古人）

夏休みが来ると、年々山登りが旺んになるようである。そして、昨日も遭難、今日も遭難で、若者のいのちをむざむざと奪ってゆく。山に対する経験の乏しいものの無暴さをいましめた力強い句である。

未亡人仲にはさんで夕涼み

（征　二）

それほどの美人でなくても、未亡人というもの

は、とかく男性の興味をそそるらしい。夕涼みをするにも、お婆ちゃんを仲にはさんだところで、少しの色気も発散しないからである。別にどうするという気はないにしても、若い未亡人を仲にはさんで、ほのかな浮気ごころをかきたてるところに夕涼みの味といったものがあるのであろう。

ステテコの貧相な足を見せる秋

（ひか平）

太った男の、あんどんのようなステテコ姿は似つかわしいような感じがするが、痩せ細った男の貧相な足がニューッと裾短かなステテコから出ているのを見ると「ああ、秋だなア」と云う切実なものを感じさされると云うのである。いつのほどにか夏の過ぎたことを巧みに表わしている。

頂いた菊の手入れにまで来られ

（保　美）

大輪の菊をほめたばかりに「持ってお帰りなさい。差しあげます」と云われ、もらって来たのはよいが、どう手入れしていいか判らない。

それと察した菊のあるじは、我が子を余所へやったように思い、菊の手入れに出かけたのである。

やった方と貰った方の生活ぶりや人物までが想像される。

月光に人みな同じ感歎詞

（太郎丸）

月下に立って月光の美にうたれた人が、思わず心の底から発する感歎詞はみな同じだというのである。作者の自然に対する澄みきった感受性を想わされる。

読みもせぬくせに読書の秋ですな　（昇）

「二科展を御覧になりましたか」

ロクに画の判らぬくせに、こんなことをいう人がある。こどもの漫画本を横取りして読む位がせいぜいなのに、

「読書の秋ですなあ」という人がある。なかなか皮肉な句である。

接吻を奪われそうな霧流れ　（芳仙）

なんだか、ひとりで夢みているような、官能の陶酔に誘致されているような芸術味の豊かな句である。こんな句は解釈をすると詩を殺ろして仕舞う。ただ繰り返えして味読すれば、そのよさがおのずから判って来るであろう。

秋だなと金を持たない者同志　（七面山）

「秋だなあ」

「旅がおもわれてならない」

「青い空を眺めて」

「ちびりちびりと盃をなめるのも悪るくないからなア」

「ジッとしていられないじゃアないか」

「どっかへ出かけるか」

「それもいいが」
「お互いになけなしじゃア、どうにもならない」
と云ったところか。
「秋だなあ」がよく利いている。

井戸水の底の底にも秋澄めり　（灯竿）

井戸水の清澄さはまた格別である。水晶の透明さと冷たさは身のしまる思いがする。その冷たい水をたたえた底の底に秋が澄んでいるのに心をうごかされたのである。何んというすがすがしい句であろう。

にじりよる様に近づく十二月　（花村）

カレンダーが一枚一枚と薄くなってゆく。そして十二月がそこに見えて来た。社員はボーナスの皮算用をはじめるし、重役は十二月をうまく切り抜ける目算が立たず、お先真ッ暗でジリジリイライラして来る。そこを、「にじりよる様に」と表現したのである。これは例を会社の経営者に取ったが、商人にしてもサラリーマンにしても、この句にヒシヒシと胸を衝かれる人たちもあろう。表現によって生きた句である。

十二月褌をしめるのも忘れ　（方大）

俳句に「盗人もあと閉ざしゆく夜寒かな」と云うのがあるが、十二月ともなれば、その寒さは一入で、隙間風さえ音をちぢめるくらいだのに褌をしめるのも忘れると云うのであるから、いかに忙しいかがうかがえるではないか。

恋·酒·果物

柔肌に觸れさせもせず恋と云う

（七面山）

二人はよく歩いた。暗い方へ、細い道へとよく歩いた。黙って歩いた。それで充分楽しかった。男にとって、それだけでは物足らぬ日もあった。しかし、女はそれ以上には容さなかった。斯うした恋のいつまで続くことか。

ぼろくそに言われて切れる手を知らず

（潮　花）

「この月のお手当はどうしたの、いただくものをいただかなくっては生きていけないじゃないの、会社がどうだって、妾の方はチャンチャンといただかないと、お家賃まで催促されたんでは全く妾の面子問題ですよ。妾一人を囲っておくだけの甲斐性がないようでは行く末が案じられるわ。あんたがダメだったら妾いつでも身をひきますよ。一体このままで妾をひぼしにするつもりなの、何んとかおッしゃい。ホントに甲斐性がないのね。」斯んなに云われても返えす言葉が一つ出ないのも惚れた弱みであろう。上五「ぼろくそに」の措字が句を生かしている。

六段の調彼女のだからきけ

（素身郎）

彼女が琴を習っているとは聞いていた。たまたま訪ねたら琴をさらっている。さあどうぞと彼女のおッ母さんがその部屋へ招じられた。曲は六段の調であった。あまり上手ではないが彼女

のだから開けたというのである。

養老院今のおりんは恋をする

（甲　吉）

以前は姥捨山にも比されていた養老院も時代のズレで、今ではうら寂びしいとか、物のあわれとかいう響きがよほど薄れたようである。養老院で老人同士が恋愛したり、結婚したりしている。「楢山節考」のおりん婆さんは恋をするどころか、若いもののギセイになるため、みずからすすんで楢山行きを決行するので作者は時代のズレのいかに大きいかに驚いてこの句を詠んだのであろう。「今のおりんは」の中・七の用法は実に巧みでこの句に筋金を通したと云えよう。

ネクタイにとろろをつけてやに下り

（麦太楼）

とろろは老人趣味のものである。老らくの恋を動作のうちに婉曲に描写した句として秀れている。だらしない態度が眼に見えるようである。

別人のような顔して執務中

（芙　路）

一社の事務室と仮定する。昨日の日曜にゆかいにアベックした彼と彼女とが机を隔てて、別人のような顔をして執務しているというのである。彼と彼女は課長と女事務でもいいし、重役と女事務でもいい。とにかく、昨日、ふざけたり、甘えたりしたことは素振りにも出さず、澄まし込んで執務している女をかくも鮮やかに描出して見せ

た手際を推奨したい。

地味に着ていても晶子の血がさわぎ　（支　子）

非常に地味な着物は着ていても、君を思えば与謝野晶子のような熱烈な恋愛の血がさわぐという句である。

「地味に着ていても」で、うちに秘めた物静かな女性の恋ごころを充分に汲みとることが出来るし、「晶子の血が」で燃ゆる思いの熾烈さを巧みに表現しているではないか。

押しで行けと云ってた奴が失戀し　（高　志）

「恋なんて、一にも押し、二にも押し、三にも押しですよ」といかにも経験済みのようなことをいってた奴が、失恋したと云うのである。しかし、それ見たかとも云えない。「そんな時には、まア一パイ呑んで忘れるんだネ」今度はこっちが知ったかふりなことを云って慰めても、「酒で忘れられるような恋ではないのだ」と沈むであろう穿ちの句である。

失恋の痛手天理のハッピ着る　（散　歩）

天理のハッピを着た人々を車中などでよく見かけるが、その素朴さが私たちにとっては、いかにも淋しい姿として眼に映る。特に青春に燃える年頃のハッピ姿にある種の痛ましさを感じさされ

る。それ等の人たちの中にはこの句に詠まれたような失恋の痛手をハッピの奥深く包んでいる人もいるであろう。

生酔いが70円を待つて乗り

(生々庵)

生酔心理をズバリとつかんだ句である。ああ、今夜はだいぶ酔ったぞ。まだ少々は呑めぬことはないが足元は決して楽観出来る状態ではない。ネオンが眼を射る。クルマで帰ろうと思うが、サテとなると、百円のクルマは見送ってしもう。八十円が来たが手をあげようとしない。この生酔心理は盃に残った僅かな酒の一滴も余さないのと共通する点がある。

釣革を二つ握ってささきげん

(涼月女)

夜遅く郊外電車などでよく見かける図である。ハタは迷惑かは知らぬが当人はすこぶる満悦である。極く平易に詠まれているが情景をそのままに描出している手際は捨て難い。

勤評をののしる酒を追加する

(俊　江)

「要するに勤評なんて怪しからん」と云うことを、酒をのみながら、クドクドと罵しったが、いくら罵しってものののしり足らぬのに酒の方が無くなった。もっと罵しるために酒の追加をしたと云うのである。作者は先生も感情の動物であること

を発見したのである。

酒が酒のみだした頃課長去に　（文　庫）

上役がいつまでも酒席にいると、思いなしか酒がはずまない。そこで課長は潮時を見て引き揚げるのが定石なのである。その潮時を酒が酒をのみだした頃と云ったので、この句のいのちはこの表現の巧みさにある。

牧水でなくとも泌みる秋の酒　（多久志）

歌人、若山牧水に「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」という酒を詠った名高い歌がある。この歌を巧みに引用してこの句が生まれたのである。

「牧水でなくとも沁みる」と云って秋の飲酒をたたえたところにしみじみとしたものを感じさせる。

酒の祖父今日の佳き日は大君の　（玲　人）

「酒の祖父」は酒好きのじじという意である。酒好きのおじいさんが、何とか名目をつけて呑みたがることを詠んだものである。「今日の佳き日は大君の―生まれ給いし佳き日であると言って呑んだのである。おじいさんらしい雰囲気が句の上に漂うていて面白い。

酔うているのにまだついて行く

腰をあげ

（良　子）

愛飲家の心理をうまくキャッチしている。もう相当に酔うているのに、まだ二次会から三次会へとついて行くという人たちは酒が飲みたいというよりも、その雰囲気をこよなく愛しているのである。酔うとすぐ眠むくなるという人にはまだついて行くために腰をあげるという気持ちは想像出来ないかも知れないが、それこそ愛飲家の世界なのである。

酔えば出るあの小使の枯すすき

（五　茶）

「酔えば出る」という唄だ、野口雨情のおれは河原の枯れすすきであるところに、小使の過去が偲ばれる。「おっさんは失恋でもしたんやないか」と聞いても、「へへい」と言ったきりで多くを語らない淋びしい男であることを詠んだもの、この場合下五の枯すすきが非常によく利いている。

嫌いかと露骨な問も酒の席

（万　古）

「僕は君が好きなんだが、君は嫌いか」と聞く。

「いいえ、嫌いじゃないわ」

「嫌いじゃないが、好きでもないというのだろう」

酒席というものはこんな露骨な問をしても、ちっともおかしくないのである。

猪口をもって見たらやっぱり月はよし　（鳩　花）

飲めん奴は談せんよと云いもし、聞かされもするが、全く酒はいいものである。自然だってそうだ。酒がなかったら一時間と見てられるものじゃない。変哲のない月にしても猪口を手にすりゃ、一段と美しく見えるものだと感じたのである。

数の子で一杯出しておっ拂う　（方　正）

格別用がある訳でもないのに
「ついそこまで来たので…」
とやって来てあがり込む。そしてムダ話に花を咲かす。こちらの忙がしさなど更に眼中にない。と云って
「もう帰って呉れ」
とも云えない。とう〳〵あり合せの数の子で一杯出したら、飲むだけ飲んだら帰って行った。それを「一杯出しておっ払う」と詠んだところは軽妙である。別に数の子に限った訳ではないが、あり合せのものの代表として数の子をもって来たのも面白い。

自己批判酒に敗けたと思う日や　（湖　山）

酒をさかんに呑んでる時に、自己批判なんて出来るものではない。自己批判をすると云うのは既に酒に敗けているからである。と云うように作者

は観ているのである。

酔はなくちゃならぬ日もある幹部とか

（方　正）

「ごきげんだね」

「と云う訳でもないのだ」

「デモだいぶまわっているよ」

「そ、そりゃあ、いささか酔ってるかも知れん。酔ってるかも知れんが、酔わなくッちゃならない日もあるさ」

「そんな日があるのかな」

「あるともあるとも、仕事の方のお客様と来たら、幹部と云うものは弱いもんだ。呑みたくなくても呑まなくっちゃダメなんだ。酔わなくっちゃダメなんだ。先ず酔っぱらって首ッ玉へかじりついて、キッス位やってのけなくっちゃ話はまとまらないのだ。判ったかい。」

と、まあ斯う云った生活者の一面を巧みにつかんでいる句だと思う。

妻も子も酒量のふえたのを案じ

（没食子）

「幾らお好きなお酒でもね。あんなに召し上っては、からだにさわると思うわ。」

「おッ母さんが心配するのも無理はないよ。だいぶ酒量があがってるよ。血圧がどうだとか云ってるくせになァ」

「近ごろ、お仕事の方がエライからなんだろうけれど、それにしても、あんなに召し上ってはね。」

「脳溢血なんかやられてはたまらんですよ。」

「真逆、そんなことなかろうけれど、…もう少しひかえて下さらないものかな。」と妻も、子も思いは同じである。斯う云った情景が巧みにこの一句にまとめられている。作者の実感から生まれたのかも知れない。

招かざる客に飲まれた祭り酒
（しげ女）

お祭は来ても、花は活けず床の軸物も懸け替えない。せめてからだだけでも休めることにしよう。しかし、少し位の酒は準備しておこう。誰れかが来るかも知れないし、お祭だと云うのに、まさかお茶だけで帰えす訳にも行くまいと思っていると、果して「招かざる客」がドヤドヤとやって来たのである。想としては別に新しいとは云えないが、表現技巧の妙味を称えたい。

熱燗を女たもとで酌いでくれ
（望　峰）

話に実がいりすぎて熱燗になった。女がたもとで酌いで呉れたというのである。その場合、女の姿態からうける情緒的な匂いが、酌がれている者のこころを奪っているように思う。

ラッパ呑みあとで世話などさしてなや
（文　愁）

調子に乗って酒を飲むということは青年にありがちだ。「そんなに飲んで大丈夫かい」と友達が気づかっている情景である。「大丈夫だよ。ワシのおやじもよく飲んだからな。親譲りの酒や」と

グイグイとやる。この句、「さしてなや一」の下五の大阪弁が、友情の含みを持って、句を生き生きさしている。

豪快に男同志はつぎこぼし

（ひか平）

「サア、一ついこう」と男同志は豪快についだのはいいが、つぎこぼしたというのである。ごく平易に詠まれているが、酒席の情景をまざまざと見せてくれる点、スケッチの妙手である。

酒女許しお寺もアルバイト

（史　葉）

時代の変革は寺を従来の寺として存在させてくれない状態になった。要るものは要るが信徒がそれを負担しようとはしない。勢い寺の経済がアルバイトに道を求めることになり、酒も自由に山門をくぐらせる。月が出た出たの唄声も聞えるし、女もお好きなようにという訳で今日の寺の多くは常套化されて来たことをつかんだのである。

献盃献盃B29のように来る

（春　日）

いける口と見られたのであろう。追っかけ、ひっかけ盃が来る。それを本土襲来のB29号が、あとからあとからやって来て攻撃の手をゆるめなかったのに比したのである。比喩法の表現技巧で生かされた句である。「献盃献盃」と畳みかけた手法がこの句をいきいきさせたことも見逃がせない。

無理矢理に呑ませあんたもいけますな

（渕　花）

「もう一ぱいどうです」
「もういけません。全く不調法なんで」
「いけんことがありますか。あんたのお父さんはなか〳〵の呑み手だったからなァ」
「父はまァかなりやりましたが、私は全くいけませんので」
「では、もう一ぱいだけ」
「それでは、ホンの少しだけ」
こんな調子で、無理矢理に呑ませといて
「しかし、あんたも、なか〳〵いけますな。矢張りお父さんの子ですね」
におそれ入っているさまが髣髴として眼に迫って来る句である。

クダまかれるよりはと詩吟きいてやり

（す頭女）

ボーイフレンドか、愛人かであろう。ハイボールやウイスキーに酔っ払ってクダをまかれるよりは、よっぽどましだと詩吟を聞いてやったというのである。歌謡と違って、女にとっては詩吟は苦が手なのである。作者の実感なのであろう。ネライに興味が持てる。

お流れを頂戴にでる自己嫌悪

（多久志）

宴会の席と見ていいだろう。宴会がはじまると上席の偉いさんに、われもわれもとお流れを頂戴

に出るので、自分もその一人となったが、そのときの自分の心理を解剖して見ると、とにかく見知っておいて貰えば何かの時に、ムリな願いも聞きとどけてもらえるだろうという浅悧しい心にフト突き当ったので、自己嫌悪を感じたというのである。作者の実感であろうが、そうしたお流れ頂戴派の心境を心憎いまでに衝いた句である。

絶句して歌詞を音痴が言うてくれ　（賀　峰）

宴席などで、三味線に誘い出されて、唄ったものの何んかの拍子に絶句することがある。まことにバツの悪いものである。そんな時に、横から歌詞を言うてくれたので、続けて唄い終る。その言うてくれたのが自分ではロクに唄いこなせない音痴であったと言うのである。一寸面白い発見である。

所望され膳を股いだかくし芸　（春　日）

宴会にかくし芸はつきものであるが、指名されるのを今か今かと首を長くして待っている人と、ヒヤヒヤして首をすくめている人とがいるものである。

この句は舞踊か手品か、その内容は判らないが、所望されて膳をまたいで、出たところを見ると相当に自信があるのであろう。向うの方では、もう、何が出ようと、そんなことには見向きもしないで盛んに呑んでいる宴会風景を思わされる。

役員会階下はねぎを洗って居　（東岸子）

何んの役員会であるかはわからないが、「階下はねぎを洗って居」で、階下の情景も想像に難くないし、やがて、すき焼の匂いが漂うことは云うまでもあるまい。この句のネライがあくどくないのがこの句を成功させたのだと思う。

飲み足りぬ顔へさっさと飯をつぎ　（武）

「いかがです。もう少し過されては?」
「いや充分頂戴しました」
と、盃を伏せる。
「そうですか。では」
と察しの悪いことにはサッサと飯をついだのである。

飲み足りぬ顔の読めないところにユーモアが溢れている。

パトロンへ注ぎに隙見て来たマダム　（黙平）

知ってる人は知ってるので、マダムはパトロンのそばへはあまり寄りつかない。パトロンにしてもその点は百も承知だ。

しかし、パトロンの機嫌を損じたが最後、経営に響く。

隙を見ては注ぎに来るのも、マダムのこまかい心づかいなのだ。

軽い穿ちの句である。

追っぱろう気だな三つ指ついた酒

（文　庫）

「いらっしゃいませ。」と三つ指をついた丁重さ。「少しおすごしあそばせ」と云われても、その丁重さが胸にグッと来て、飲めそうもない。さては追っぱろう気だなと、三つ指をされた時に、直感したのである。皮肉な観方に興趣が深い。

酒器自慢ほどに飲めない老主人

（鈴　馬）

蒐集マニアもいろいろあるが、酒好きの老人には盃や銚子を集めてよろこんでいるのがかなり居るものだ。この盃は何んとか亭で何んとかの祝いをした時の記念だとか、それぞれに何かしらご自慢の解説がつくのである。斯う云った老人に限って、酒器自慢ほどには飲めないものだ。穿ちの句である。

この艶で腹まで腐っていたリンゴ

（どんたく）

リンゴの艶の美しさは処女の頬にも比べられる。しかし、ガブリと歯をあてた時中味が腐って、フワフワと綿を噛んだような味だつたとしたら幻滅の悲哀を感じずにはいられない。

この句はリンゴそのものを詠んだというよりも、姿かたちの美しい女だと思っていたら、腹の中まで腐っていたという女を諷刺したのである。

細い道どの無花果も手がとどき　（雨　吉）

空は碧い。空気は澄みきっている。背後には山が迫っている。家と家とを縫うて細い道が少しずつ登り坂になり、無花果が道端へ突き出ているというような情景が眼に浮んで、詩情豊かな句である。

買うて食う蜜柑じゃないが皮のかさ　（旭　童）

作者は農家の人であるから、その実感をそのままによまれたものと思う。喰べ終った時のみかんの皮のうず高いかさを見て、買うて食う蜜柑ではないが、こんなにも沢山な皮を捨てるということに、勿体ないような気がしたのである。物を作る農家の人として物の尊さをしみじみと、考えさされたのであろう。

上五音、中七音で農家の人であることを巧みに描出しているではないか。

母は来ずたのんだ梅の壺も来ず　（霞　乃）

都会へかたずいている娘から、国の母へチョイチョイ出て来るように云ってやってもなかなか腰の上らないのが国の母である。

娘には逢いたいが、さてとなると、何んとか彼とか故障が出来る。そしてのびのびになってしまう。「母は来ず」と、ポッつけに上五が、そうした事情をうなずかせるに足る表現となっている。

母が来ないために、「たのんだ梅の壺も来ず」なのである。娘にとっては母にも逢いたいが、梅干は故郷をかみしめるためのノスタルジヤなのである。

ようここでバナナを買えと
ねだったに　（吟　女）

ある街角でバナナのたたき売りをしているのが眼に這入った途端に、今は亡き子が偲ばれたのである。

女親らしい追憶でもあるし、「ねだったに」の措字が、追憶であることを確定ずけているではないか。「バナナ」も動くようで動かないことを思うと、この句は多分作者の実感なのであろう。

柿のなる家へぞろぞろ寄附のこと　（万　楽）

秋祭の寄付と見ていいだろう。「ぞろぞろ」で祭の世話役の五、六人が廻って来たのであろう。「柿のなる家へ」は秋の情景も出ているし、たわわに柿が生っている家だというと、村でも多少余裕のあることが思わされる。

下落したイチゴ家でも買うていた　（白　水）

出はじめの苺なんて、口にするのも、もったいないと思うほど値段が高い。それを、ちょいちょい横眼で睨らんで通っていると、いつのほどともなく値段が下っている。

そこで、食後にと思って買って帰ったら「家でも買うていた」というのである。苺に限って、そんな場合があるのも、色彩の魅力がそうさせるのかも知れない。

王の座にましますメロン売れ残り

（柳川亭）

果物屋の店は街さえも美しく見せる。いろいろの果物が、いろいろの色彩で、陳列されているからである。

その中で特に美しいという訳ではないが、珍らしいのと、風味が高尚なのと、姿が偉大でしかも高価な点から王座を占めているのがメロンである。そのメロンが売れ残ったのを「王の座にましますマ」と擬人法で、しかも敬語で表現しているところに、何んだかみじめさが強調されていて寧ろユーモア味を感じさせられるのである。

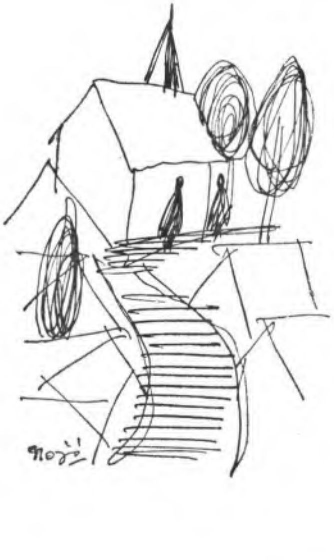
何の因果か西瓜はつらに値を書かれ

（孤　浪）

夏になると八百屋や果物屋の店先に、西瓜が山のように積みあげられて、のどのかわく人たちの味覚をそそるものである。

ところが、その西瓜のつらに、一々値段が書かれている。何の因果で西瓜のつらに値段が書かれるのか、西瓜としては甚だ迷惑な話であると、擬人法として詠んだところにこの句のヤマがある。西瓜のつらに値段が書かれているのを見てフトユーモラスに感じたのである。この句などネライの面白さである。

夫婦を中心に



一生をオイコラハイで終りたる　（夜潮）

女の一生をこんなに簡単に諷した句を知らない。女の無自覚、女性の悲劇がいつまで続くことか、測り知られぬものがある。

「オイコラハイで」と具体的な表現ですべてをうなずかせた手腕は偉とすべきである。

蚤取ってもとの寝息にはやい妻　（日満）

蚤を取る技術というと変な言葉であるが、女というものは、手探ぐりに蚤を取るワザが先天的に巧みなようである。男よりも女の方が体質的に蚤がたかるようになっているのかも知れない。この句も寝ていて、手探ぐりに蚤を取ったのであろうが、蚤を取ったとおもうと、もうスヤスヤともとの寝息になっていると閨中の情景をマザマザと写している。「もとの寝息に」の措字がこの句を生かしていると思う。

ツンとした妻の背中が岩に見え　（芳仙）

こんな句は解説したんでは味が抜けてしまう。ジッと句の内容をみつめていると、何んとなくユーモラスな感じが湧いてほおえましさを覚えさされる句なのである。「岩に見え」は誇張法であるが、弱点を持った夫には確かに岩に見えて来るものであろう。

へそくりの言譯妻は聞いていず

（おさむ）

この句を一読すると従来のへそくりと云うものの考え方では「へそくりの言訳夫聞いていず」の誤植ではないかと思えるが、決して決して誤植ではなく「……言訳妻は聞いていず」なのである。へそくりといえば一豊の妻の昔から妻のものであった。あてがわれた世帯の中から、ひそかに生み出すものであった。少々凡倉であっても一家の経済力は夫に属していて、妻は俺にお台所の小遣いがまかされる程度に過ぎなかったからである。ところが敗戦後、サラリーマンなどの家庭経済では男と女の立場が逆転した。男はサラリーのすべてを妻の前に投げ出してお小遣い生活に甘んじ一家のヤリ繰算段を妻の手にゆだねるようになった。サラリーでは到底妻子の要求のすべてに応じかねることを知った夫のズルサからの逃げ道に外ならなかった。しかし、それでは自由にビール一杯のめぬので働蜂としての夫の立つ瀬がない。そこで月給が上っても素知らぬ顔で男のへそくりがはじまったのである。この句を読むと時代は遷るの感が深い。

迷い子札妻は俺にもつけたがり

（生々庵）

今そこにいたかと思うともういない。出たらいつ帰って来るのか判らない。何処にいるとも云わないで二日も三日も泊って来る。こんな夫はザラにある。迷い子の札をつけたがるのもムリはな

い。妻の心境をズバリと詠んだ句である。

麻雀とあたしとどっちなのあんた

（方　大）

麻雀は細君にとって苦手である。負けたと云っては癇癪玉を破裂させるし、出掛けたらいつ帰って来るか判らないし、たま〳〵帰ると質ぐさを持って行くし、会社は休み通しだし、家庭は火の車である。「麻雀とあたしとどっちなの」と悲鳴をあげざるを得ないのである。話し言葉で実に巧みに雰囲気を出した句である。

惡しざまに話せば妻も敵にして

（日　満）

「あいつは実に怪しからん。賭具にコマばかりすりやァがって」

「ホントにいけすかん人ですわ、この間も斯う斯うですの」

というところか。妻も案外本気になっている。

避姙法やめて産れんのにあわて

（一　善）

結婚してもまあ当分は子どもをつくらないことにしようというのが、近ごろの若い夫婦の定石であるが、さて三年も過ぎ五年と経つと、家庭に子どものないのがどんなに淋しいことかが判って来る。避姙法をやめて見たが、急に生れそうもない。「なんで避姙なんかしたんやろ？」と今さらなげいて見てもはじまらない。こうした中年夫婦の心理をうまくつかんでいる。

女房の記憶に亭主恐れ入り　（不木）

あの時は斯うだった。この時は斯うだったと、女房と云うものは、別に覚えていなくてもいいものを事も細かに覚えているものである。殊に、つれなくされてうらめしかったことにいたっては幾年経っても忘れ得ないものである。買うてやると云って、買うてやらなかったこともハッキリと覚えているもの、まことに怖るべき記憶力と云えるだろう。甲斐性のない亭主なら恐れ入ってばかりいなければなるまい。この句はこの間の消息を巧みにつかんでいる。

子がいてもうすい化粧で迎えてや　（鳩花）

中年のサラリーマンが妻に対する心境をザックバランに詠んだ句として大変面白い。妻への愛情もよく出ている。この句、下五の「迎えてや」という口語調がいのちだと思う。

よだれ拭くにも愛妻の御手をかり　（不木）

老境に入ると他愛がない。又してもよだれが出る。それをハタに附き添うている愛妻が拭きとって呉れる。それは母親が子どもの世話をやいているのと大して変らない。私は曽てそうした老夫婦を目のあたりに見たのでこの句の軽妙な写生振りと、そのケイ眼を讃えたい。

子のカメラ俺と女房を引っつかせ　（喜由）

大人がピストルをいじると、子どももピストルを欲しがる。大人がカメラをブラ下げて歩くと、子どももカメラと云うわけで、カメラ熱は盛んになる一方。お父さんと、おッ母さんを被写体にした子ども「もっと引っついてや」と一生懸命である。ムリに引っつかせられたパパとママ、思わず顔を見合せたところをパチリ。家庭川柳の面白さを巧みにとらえた句である。

夫婦愛あんな怪我でも附添われ　（方　正）

「あんた大丈夫？」

「痛い〳〵」

「しっかり、わたしの肩につかまっていらっしゃい」

と、夫を抱きかかえるようにして、長い廊下を蝶のように歩を運ぶ。外聞も何もないところに夫婦愛が盛りあがっている。作者が医者だけに、大した怪我でもないのにと思うと、斯うした夫婦愛を目撃してはおえましく感じたのであろう。

夫婦喧嘩で買うたテレビとは云わず　（春　巣）

「テレビを買ったそうだね」

「ウン」

「なか〳〵豪勢だね。僕とこなどは、ラジオすら満足なものが買えないで、子どもにせがまれて僕の貧弱な知識で組み立てたやつさ」

「豪勢と云う訳でもないが時代が時代だから、テレビぐらい備え付けないでは文化生活とも云えん

からね」
とは云ったが、テレビを買おうと云い出したら妻君が反対して、
「あんたテレビどころですか、電気洗濯機も買って呉れないで、文化生活もないじゃァないの」
と、夫婦喧嘩までして買ったことはオクビにも出さないという男の心理をうまくつかんだ句である。

洗濯機あんたも憶えときなさい　（保　美）

お隣が洗濯機を買ったのでうちでも買ったという細君なのであろう。
「洗濯機が出来たのでホントに便利になったわ。スイッチを入れさえすれば簡単に洗濯が出来るからあんたも憶えておいて頂戴」と云われたと云うのである。
斯くして、おやじの主権がだんだん危険に瀕してゆくのではあるまいか。面白いところをとらえている。

若いのに負けずこっちも妻を撮り　（没食子）

近ごろは何処へ出かけても、若い男女が、それは夫婦であろうと、愛人同志であろうと、お互いにシャッターを切っているはゝえましい情景に接するものである。この句は既に人生の半ばを過ぎた夫婦が旅に出ての一コマで「こっちも妻を撮り」と若やいだ気分を出したと云うのである。面白いキライである。

湯の宿も鶴の間と云う老夫婦　（玲　人）

温泉宿に老夫婦が泊っている。その部屋に鶴の間という名ふだがかかっていた。それだけのことであるが、老夫婦に鶴の間とはなんとふさわしい部屋の名であろうと感じたのである。いかにも淡々とした表現で、味わいの深い句である。

麦をまく夫婦が霧にへだてられ　（知恵美）

田園風景の写生句であるが、くめども尽きぬ情緒が流れていて実に美しい句だと思う。この句はごく素直に見たままを詠んであるが、それでいて充分に情景が出ている。

子へ便り書く妻老けて老けて見え　（日　満）

妻の筆には斯うある——

「あんた近ごろ、お小遣いを少し使いすぎはしませんか。お母あさんはハタで見ている訳でないからハッキリしたことは云えないが、どうもそのように思われてならない。お父さんが達者で送れる間はいいけれど出来るだけしまつをして、少しは貯めておきなさい。近ごろはお父さんもメッキリ年をとられて、白髪が目立って殖えて来たし、それにだいぶぶしょうになられたから先が案じられるような気がする。それにつけてもお前のことが気になって気になって仕方がない……」と綿々として尽きるところを知らないのである。そ

うした妻の姿を前に父は静かに盃を手にしているのかも知れない。何んだか、しんみりとしたものを感じさせられる句である。

敷きのしの重しとなっただけで暮れ　（香　林）

市井の一凡人の平凡な生活を詠んだ句には違いないが、そこには生活への反省があって軽々には見過ごせない句である。いっきに読み下だして、何んとなくしみじみとしたものを感じさせるではないか。啄木の歌の淋びしさという言葉が云えるとしたらこの句にはそれに通じる淋びしさが漂うていると云えるだろう。

夢もなくおむつで窓を皆塞ぎ　（矢寸志）

結婚をしたら、あァもしよう、こうもしようといろんな夢を描いていたが、まもなく次ぎ次ぎにこどもが生れたのである。こうなると華やかな夢にあこがれるどころか、日々の生活に追いまくられているのである。「おむつで窓を皆塞ぎ」で現実のきびしさがよく表現されていると思う。

チャームする努力もせずに妬くばかり　（満　秋）

りんき深い妻を詠んだ句はかなり沢山にあるが、この句のように、夫を魅するだけの努力もせずに、ただ妬くばかりだと詠んだのは珍らしい。男女同権だから、特に夫をチャームする努力などは要らないではないかとは言えない。チャームする努力と言ったところで、美容院通いを要求して

いる訳ではない。夫婦がお互いにチャームするものを持ちつづけることが和合の秘訣だと言えると思う。

うちのばあさんなどと云われてるとも知らず　（初　甫）

自分の妻君のことを、しきりにうちのばあさん、うちのばあさんという人があるが、その妻君は、そんなことはいっこうにごぞんじなく、まだまだ若いつもりで三面鏡を買って、すがたかたちにうきみをやつしているものである。しかし、このうちのばあさん呼ばわりは必ずしも、妻君を老いぼれ扱いしている訳でなく、近親感がそう言わせているのであることは、君とこのばあさんと他人から言われたとしたら決していい顔はしないだろう。

デシャ焼きの女房隣りのすしを巻き　（蘭　）

この句に詠まれたような女房が、どこにもあるものだ。

「奥さん、すしというものはこうして巻くものですよ。奥さんのような巻き方をしては、箸でつまんだら、スグ形ちがこわれてしまいます。」と頼まれもせぬのに、隣りから、わざわざすしを巻きに来るのである。「いらぬおせわですわ」と言いたいところだが、新世帯にとってはなかなかに便利重宝な隣りの細君でもある。

奥さんは乍末筆だけのひと　（妄　夢）

男と男とのつきあいはかなり親しくしていても、お互いにその奥さんとは顔を知ってると言う程度、イヤ顔さえ知らないことの方が多いが、手紙の末尾には午末筆奥さんによろしくなどと書く。幾年つきあっていても、その線からは一歩も出ない。そこをとらえたのが、この句である。二人にとってはアクセサリー的存在の奥さんだとも言えよう。

子供等が待っていますと妻の文　（好　郎）

この妻、どっかに封建性の匂いがする。愛する夫に、送る手紙にも、あけすけに少しも早く帰って下さいとは書かないで、子供等が待っていますと間接的な書き方をしている。子供等よりも、もっともっと待っているのは自分なのであるが、それをそう書かないところに潜在的な愛情が感じられるのである。日本の在来の女性の真情を巧みにつかんだ句である。

パン買って喰べといてネと妻は留守　（文　平）

話し言葉によって情景を出した面白い句である。映画に誘われたのか、婦人の集りに出かけるのか、それはこの場合問題ではない。兎に角外出するのに、食事の準備もしないで出てゆく、若い妻の言いそうなことを的確につかんでいる。

妻として子として見れば詐欺ぐらい　（谷　水）

詐欺として囹圄の人となったが、妻にとっては矢張りよい夫であり、子としてはなつかしい父なのであることを、強調した句である。下五の「詐欺ぐらい」と言う措字によって、血のつながりと言うものが、罪悪を超越するほどの強さで表現されているのでこの句にいのちが生じたのだと思う。

おいしいと云わない人と妻悟る　（水　客）

「おいしい？」
と妻がきいても、
「そうだなァ」と言うだけである。世には妻の苦心の料理を、ただムシャムシャと食うだけで決してうまいと言わない夫が居る。

「そうだなァ」は「まァこんなものだなァ」にも通じる。
「うまいものが食いたければ一流の料理屋へ行くよ」と言うかも知れない。妻のまごころが通じないとなると妻としては立つ瀬がないのである。わたしの料理をほめたからって夫の沽券にかかわりもすまいにと思う。しかし決してほめてくれないことを知ってそれからは「おいしい？」を繰返さなくなった。

丸刈にしようかと妻を試してみ　（五　茶）

仕事に責任を持つ地位となると、長髪もいささか面倒になって来た中年の男なのであろう。
「あんた、一ペン散髪に行ったらどう？」と妻か

ら散髪をサイソクされる始末「そうだなァ」と言うもののなかなか動かない。「いっそ丸刈にしたらと思うが……」と妻の方へ顔を向ける。妻が容易に賛成しそうにないことを知っていながら……と言う句である。中年の夫婦の心理をうまくとらえている。

刑事より鋭い妻の御眼力　（満　年）

ワイシャツについている口紅から夫の今日の行先を判断するぐらいはヘッチャラに違いない。この句は妻の眼力におそれ入っている人を詠んだもの、同感の夫も多いであろう。

再婚しまた貞節の道をゆく　（消　生）

貞節とは何んのことですかと太陽族は言うであろう。太陽族でなくても終戦後は貞節を守ると言えば、馬鹿扱いされぬとも限らぬほど貞節が重んじられなくなったことは事実である。昔のモラルが必ずしも今のモラルでなければならぬ筈はない。貞節だった女が夫を失って再婚した。そこには再婚するだけの理由があって再婚したのであろう。彼女の新らしい第二人生に於いても亦貞節の道を歩いているというのである。一寸人の気づかない面に触れた句として興趣を覚えた。

金のない亭主と知っていても嫉け　（一　瓢）

金のない男は振り向いても呉れぬ今の世の中、金のないうちの亭主が女にもてそうなことがない

とは百も承知していながら、つい遅く帰ると、もしひょっとしたらと思うのが矢張女房なのであろう。そんな女房を持ったうちの亭主たるものむしろ感謝していいだろう。穿ちの句。

うちの女房香水なんか知らぬらし　（多久志）

世の男たちはブルの若奥さんの匂い、アクトレスの匂い、芸者の匂い、みなそれぞれの匂いを持つことを知っているが、さて自分の妻の匂いとなると、それ等の女性とは全く別種の匂いしか持っていないことを知っている。ここに「香水なんか知らぬらし」と骨抜きの妻の匂いにいささか物足りなさを感じたのである。この句のウラに一家の主婦としての家計の切り詰め方が思われるのもすぐれた叙法と言いたい。

長女ソッポを向いて後妻を悲しませ　（七面山）

まま子に同情した句は多いが、まま母に同情した句は至って尠い。この句はまま母に同情した句である。何を言っても長女がソッポを向いていることは長女にとっても決して幸福なことではない。アプレ娘にはかなりこうした娘がいるらしい。あの女は父の後妻ではあるが、私たちの母ではないというつもりなのであろう。世の後妻にとっては大きな問題である。そこをつかんだのがこの句である。

奥さんの好みで女中着せられる　（宗 [illegible]）

女中には女中の好みがあるに違いないが、女中の世界ではまだまだ封建制が強いというのか、着物の柄一つに対してでも奥さんの好みが圧倒的にのしかかってくるのである。「あんたにはコレが一等よく似合ってよ」と言われたら「左様でございますか。ではコレにいたしましょう」と言うより外に手はないのである。自分でお金を出すんでも、これだから、いただく場合は問題ではない、というのであろう。面白い句である。

尻に敷くニュース仕入れる主婦の会　（水　堂）

牛乳はもっと値下げの可能性があるとか、こんどの選挙には口約を無視した彼氏は落とすべきだとか、民主主義の立場から言っても婦権をもっと伸張させるべきだとか、主婦の会へ出かけるたびに、何んかかんかの議論に花が咲く。そしてそれ等の意見の中から、亭主を尻に敷くことの出来るようなニュースを仕入れて来るのが近ごろの主婦だと言うのである。

多少の誇張はあるとしても面白い観方の句であると言えよう。

金の奴隷の奴隷となって御寮人　（葭　乃）

金さえあれば、何んでも出来る。別荘も建てられるし二号も置ける。そこへ到達するまでは喰べたいものも喰べずに、一にも金、二にも金、三にも金で、義理も人情もあったものでないという生

き方をする人間を彼奴は金の奴隷だという。ところが、そうした男の妻として生きるためには全く個性を没却してその男の奴隷的生活に甘んじるより仕方のないことを詠んだものである。作者は御寮人の人権への反省と、その主人へ金の奴隷のいかにみじめな人生であるかを訴えたのであろう。

時代ですなアと息子を持つ同志　（日本村）

「うちの息子は僕はお父さんをよう養わんよと、ハッキリしたもんだ」
「フーン」
「では働けなくなったらどうしたら、いいんだと言ったら、養老院へ行ったらいいじゃないか。有料の養老院があるよと澄ましたものさ」
「そうかね。うちの息子も、僕は医者のあとなんかつがんよ。医者なんか莫迦々々しくってと、全然うけつけないんだ。聞いて見ると映画の監督をするつもりらしいんだ」
「時代だネ」
「全く時代だよ」

親だけが大器晩成まだ信じ　（蕉風子）

大学を出て、コネで就職はしたが、さてそれからの出世街通は遅々として進まない。いつまでたっても係長である。しかし、親というものはありがたいもので、
「うちの子は大器晩成型でなア」
と、誰にでも話し、いつかは課長になり、部長に

なり重役の椅子にもつくように信じ切っているのである。親としての愛情が巧みに描かれている。

断固許さず戒名にして拝み　（一瓢）

この句は構成上、非常に省略されていることに気付かれるであろう。「断固許さず」は何を許さないのか、それは結婚を許さないのであることは想像に難くないであろう。誰が許さないのか、それは両親と言うよりも親父が許さないのであることは、断固と言う堅い文字を使っているところから想像し得られる。その結果事件が発展し、この世で添えなければあの世でと悲劇に終ったことを「戒名にして拝み」と省略している。これほど時間的にも省略がほどこされていて内容がハッキリとつかめる句は稀である。

焦げ臭いぞとだし抜けに父帰る　（春巣）

朝出たら晩にならなければ帰らない父——それが思いがけない時に、ひょっこりと帰って来るのも父である。

それもカドから「オイ焦げくさいぞ」と言いく戻って来るのである。

父の一面を巧みに描出して余すところがない。

金盥父の叱咤のように落ち　（淡舟）

ガラガラガラと大きな音をたてて、金盥が棚から落ちただけであるが、それを父の叱咤のよ

うに落ちと比喩法で描写したところに、この句の面白さがある。ガラガラとよく叱りはするが、ケロリと忘れて朗らかな父の人柄がうかがえるではないか。

父なるが故にテレビも値を調べ　（清　湖）

テレビブームではあるが、まだまだテレビへまでは手のとどかない階級が多い。こどもたちにとってはせいぜい風呂屋や喫茶店などで楽しむぐらいのものである。「お父さん、テレビが欲しいなァ」と言う声がお父さんの耳にたびたび這入るので買えないことは百も承知だが、一体幾らぐらいで買えるものかと値を調べたというのである。父親の心理をうまくつかんでいる。

殴打されて父兄皮肉な禮を言い　（夜　潮）

「うちの子はたたき直さねばモノになりません。ようたたいて下さった。」

と父兄は言うが、腹の底では決してそうは思っていないのである。あの教師は怪しからぬ。あんな教師に可愛い子供は安心してあずけられないとフンガイしているのであることを巧みにこの一句に盛り込んでいる。

英語の質問ないかないかと父はひま　（春　巣）

インテリの父が、子供たちの勉強室へ声をかけているさまが、ホーフッとして眼に迫って来る。

さて、質問が出ると、それは一寸待てよと辞書を引いてくれる父でもある。

兄遭難父を笑わぬ人にする　（参無子）

山か。海か。それは判らないが、兄が遭難した。それからというもの、父が笑わない人になったというのである。兄の遭難が父にとってはいかに深酷なショックであったかが判る。一篇の哀詩だと言えよう。

蛇足の多さ母も老いたり　（山茶花）

女というもの、殊に母というものは口かずの多いものであるが、それが、だんだん言わないでもいいことまでくどくと言うようになったので、母も年をとったなァと思ったのである。七・七の短句で簡潔に言切ったので、その味を深めている。

角帽と歩いて母も楽しそう　（春巣）

まるで母が入学するように騒いだり、なやんだりした入試を辛うじてパスしたにしても、母のよろこびは愛児以上に大きかったのである。あこがれの角帽姿の我が子と、ただ一しょに歩くだけでも、楽しそうに見えたのである。ごく平易に詠まれているが、母の心境を巧みにつかんでいる。

背丈だけ伸びてるように母思い　（茶仏）

着物を着換えさすたんびに、足がニュッと出る。「この子は、まァ」である。

母と並んで買物に行く。母の背よりもズッとズッと高い。「この子は、まァ」である。

母にして見れば、背丈けだけが伸びてるように思っているのであろう。斯ういう母親には、うちの子はいつまでも子どもなのである。軽い穿ちの句。

女体壮厳いっしんに子を洗い　（東洋樹）

ヌードの句で、こんなに厳粛な句を知らない。そこには猥雑な感じをさしはさむ余地が少しもない。それはヌードそのものを詠んだと言うよりも母性愛の極度の表現だからである。磨きのかかったレベルの高い作品として推奨したい。

仲居して育てた母を嫌いぬき　（清　生）

仲居族とか女給族とかいう人達は特に母性愛の強いものである。別れた男の薄情をなげく前に、すべての愛情が、そのこどもへ集中するのであろう。石にかじりついても、こどもは立派に育てて見せると言うのが、斯うした階級の女の強い愛情でもあり、意地でもあるのだ。

それに反して、そのこどもは、大きくなればなるほど、教育を身につければつけるほど、こうした職業婦人とソリが合わなくなり、その母を嫌うと言う悲しい現実を巧みにつかんでいる。

母なればこそ役得を危ながり　（万　古）

社会に出て間(ま)のないうちは一寸した役得もうれしいものである。それが歳月が経つにつれて一寸した役得ぐらいでは感激しなくなる。相手方もそれに応えて、少しどぎった贈物をするようになる。しかも、欲しいものをこちらから要求するようになる。

それはもう役得の範囲を脱して、誰の目にも収賄としかうけとれぬが、役得にしびれた心には、それと気付かない。

「こんなものをいただいていいの」と真っ先に危ながるのは母である。

おぼっちゃまおぼっちゃまと生みの親哀れ　（谷　水）

社会の裏をあばいた短篇小説を読まされているような句である。それは主人か、息子かは判らないが下女に手がついて姙ませられたが、嫁にはして貰えないで、金で解決さされたのである。生んだ子は引とられたが、その子に会っても、おぼっちゃまと呼ばねばならないのである。こんな複雑な事柄を一句に纏めた手腕は大したものである。

出来すぎる息子へ母は低ういる　（阿　茶）

母にとっては血を分けた息子には違いないが、その息子が社会へ出るとなると、何々博士であ

り、幾つかの肩書さえ持つと言うのでは、何々ちゃんとか、何ボンだのという愛称で呼ぶわけにもいかず、自然他人行儀に近い隔たりが出来て、すべてに遠慮勝になるものだという、出来すぎた息子と母親との心理へメスをあてたものである。これは息子ではないが歌手の「ひばり」へその母親が、「先生、先生」と呼んでいるそうであるが、これも、「母が低ういる」の例にはなろう。

継母が敬語使えば尚こわし

（夜　潮）

以前はまま母と言えば絶対悪かのように言われていたが、今は必ずしもそうではない筈である。しかし、まだまだそうした眼で眺めねばならないようなまま母の存在することも否定出来ない。平素は呼び捨てにしているが、何かことがあると、「ひろしさん」とカン高い声で呼ばれたが最後こわいというのである。つかんでいる。

水仙の冷たさもある未亡人

（東岸子）

ツンと澄ました未亡人、スラリとした未亡人、それはいかにも清楚な感じだ。しかし、どっかに冷い感じがしないでもない。オ、そうだ、それは水仙のような冷めたさがある――と観たのである。特に新しい句とは言えないが捨て難い味を持っている。

淋しかろと尋ねてとんだ邪魔をした

（珊枝郎）

若い未亡人が出来た。一人淋しさをかこっているであろう。せめて慰めの言葉でもかけてやろうと尋ねて行った。ところがそんな心配は無用だったことが「とんだ邪魔をした」で判ると言う句である。

空巣かと見れば極道帰っとり　（鉄　児）

ガサガサ、ゴソゴソと音がする。テッキリ空巣が這入ってるらしいと、ソッと上って覗いて見ると、極道息子が戻っていた。又例によって質ぐさを探しているのである。

この句の表現で「見れば」は少し固い、むしろ「思や」とすれば感じが幾らか軟くなって救われると思う。「留守人を捕えてみれば我子なり」の古句は夜で、この句の場合は昼である。共に子どもに対する愛情を内在しているところに句としての味がある。

母娘してぼちぼちしとく大掃除　（水　客）

父親はいても、何んとかかんとか理由をつけて、大掃除には家にいない。仕方がないから母娘して、ぼちぼち掃除をするのである。こんな家庭はかなり沢山ある。「これ位にしといて早くお湯へ行きましょうよ」というのが娘の方に違いない。面白いネライの句だ。

出戻りのいっちかわいい娘なりしに　（滸　山）

「いっちかわいい娘（こ）なりしに」という父親の心情が、この中六、下五の十一音字の中に没めども尽きぬ情味となってほとばしっているし、あまりにかわいがりすぎたのでそれが出戻りの原因をつくったのではないだろうか、たしかにそれが全部でなくとも、大きく原因しているような気がしてならないという悔も、この十一音字の言葉の中にひそんでいるように思える。

パラソルを放して娘抱擁し

（七面山）

景色は美しいが二人にとって景色などはどうでもよいのである。パラソルを放り出して抱擁する若さ奔放さがうずくような恋を描出して余すところがない。

どの顔も嫁してしたごろ娘に見えず

（湖　花）

ズラリ見渡したところ、何んのくったくもない朗らかなアプレの娘達。耳にはイヤリングが揺れている。「あの子にたかったって、もう小遣を持ってないよ」と男の子にたかることを当然のように考えている娘たちなのである。これでは嫁して夫に従うなんて頭でないことは言うまでもなかろう。

娘にも盲腸があり慌てさせ

（豊　年）

娘が病気をした。診てもらったら盲腸だといわれた。

「ヘヘイ、盲腸。美しい娘に盲腸」
と、慌てたというのである。美くしい顔、美しい眼、美しい手などを外にして娘を思わなかったのである。現実は盲腸の存在をハッキリと認識させられたのである。こんなことは娘の盲腸に限ってはいない。多少の諷刺もあって面白い。

年ごろがヒップ互いに目ではかり
（不二子）

年ごろの娘同士が、それとなく相手のヒップを目ではかって、その余りに大きいのに、驚いたり、意を安んじたりしたというのである。ヒップだけに目ではかりがよく利いているし、ユーモラスな感じがよく出ていると思う。

三味弾いてあげて仲居と間違われ
（千代美）

その席に行き合わした場合、女が酌をするのは常識であった。そしらぬ顔をしていれば、気の利かぬ女とされていた。女であるがために酌をするということは宿命的であった。三味が弾ける女は三味も弾いた。それが座持のいい女とされていた。しかし、それはアプレの女性に通じる話ではないが、男女同権が叫ばれても、この句のような事実が残存することは否定出来ない。仲居と間違われてすくなからずムッとした女性心理を巧みにとらえている。

老嬢はシンネコの意を辞書でひき
（白　香）

世なれないオールドミスにとっては、何んでもないことで知らんことが多い。

温泉マークも、キッス・マークもハッキリした意味は判らない。僅に想像を逞ましくするだけである。

シンネコにいたってはサッパリ判らない。そこで辞書を引いて見たというのである。

いかにも老嬢らしいところがよく出ている。笑えないおかしさの句である。

もう二十（はたち）言うてもきかぬ娘（こ）に育ち　（多久志）

作者の実感句であろう。

「もう二十」の「もう」がよく利いている。「お父さん、わたし短大に行くわ」と言うたら行くし、「デパートへ勤めようと思ってるの」と言うたら、どんなコネをつけてでもデパートへ勤めるし、休みにはスキーに行くと云うたらスキーに行くし、イヤハヤ、アバンの親達には想像もつかぬ娘に育ったものだと言うのである。まあ、まあ、したいようにするさと親の方が匙を投げたかたちの句である。

アプレの娘（こ）カンラカンラと笑いそう　（[illegible]雄）

終戦後日本の娘は明るくなり朗らかになった。大たい、カンラカンラという笑い方は昔の豪傑の笑い方とされたものであるが、この句を読むと、なるほど「カンラカンラと笑いそう」に思える。作者の想像力が生んだ面白い句だと思う。

うち非売品やと気骨おらせる娘

（谷　水）

近ごろの娘は何んでも割切ったことをいう。その方がサバサバしていいと、古い人たちにも多少は認識されたようである。

自分のことを「うち非売品や」という娘、もう予約が出来ているのかも知れぬが、そこまではまだ親達に打ち明けぬので「もう適齢期だと言うのにどうする気なんだろう」と両親たちにとっては気骨がおれるのである。

この句の「娘」は「こ」と訓むことは言うまでもなかろう。

早よ嫁にやらにゃ柘榴の如と裂けん

（喜　由）

あの子もいい娘になったではないか。肉づきもいいし、色艶もいいし、熟れ切っていて、今にもハチ切れそうだというのを形容して「柘榴の如と裂けん」と比喩的にしかも少し大げさに表現したのである。いかにも早く嫁にやらねばという感想がうかぶにふさわしい構成である。

名士の仲人花嫁の名を忘れ

（春　雄）

名士というものは、よく仲人役をたのまれる。それも、座り仲人といって、挙式の時だけの仲人が多い。この句の仲人も、そうした仲人なのであろう。挨拶の時に、新婦はと言ったが、常に親しくしている間柄でもないので、花嫁の名がマゞマに出て来ないことを詠んだもので、一寸した穿ちの

句である。

お見合のお菓子一つも減っとらず　（藤　波）

見合の席と言うものは、何んと言うことなしに気の詰まる思いのするものである。菓子は出してあっても誰一人手を出そうとはしない。

「どうぞ」

と言われても、若い二人は手が出ない。僅にお茶に乾き切った唇を濡らすに過ぎない。

とう〳〵茶菓子は一つも減っていなかったと言うのが作者の発見だった。

交際をしろとは事前工作か　（圭　水）

近ごろは年頃になっても、なかなか結婚がしにくい。深窓で育てていては、いつ良縁があるか判らない。勢い相当の家の娘でも、会社へ勤めにやったり、適当な青年がいたら交際をさせたりしている。

この句はそれを詠んだもので、その点、娘でも息子でも心得たものである。交際はしても、あまり間違いの起らないのも時代であろう。

何一つ揃えぬ方が先に嫁き　（不　二）

年ごろの娘にとって、結婚準備は容易ではない。親の世帯が苦しければ、会社勤めをしても、ポツポツ準備をするものである。ところが何一つ揃っていない方が、先に結婚したというのは美貌

をのぞまれてこしらえどりという結婚をしたか、相思の仲で、何のこしらえもなしに結婚したことを意味するのである。あとに残ったのは二人の娘の姉か、或は友達の場合であろう。それはどちらでもいいが、何一つ揃えぬ方が先に嫁ったというのがネライである。

出世すりゃ兄が下座で酌をする　（六　花）

大学を出た弟が、警察署長を経て知事にまでなる。地方としては出世に違いない。そうなると、なんかの集りがあっても兄の方が下座で酌をするのを見かけるが、この句から兄ではあるがやむを得ないという諦らめと、この弟の兄だという幾分の誇りとが感ぜられぬでもない、複雑な感情を汲みとることが出来る。

嫁かんでもいいわに嫂ちとあわて　（満　秋）

小姑というものは、昔からうるさい存在とされているものであるが、戦後、女があまっている時代ではなおさら厄介な存在に違いない。

三十を過ぎるとますます縁遠くなり、どんなとこへでも嫁く気になっても、どんなとこさえなくなるものだ。そうなると、本人もふてくされて、「嫁かんでもいいわ」になるものだ。そうなると嫂の方が、少しあわてるというのである。人情の機微を衝いている。

ユアマザーと佗しき嫁の言葉なり　（北　海）

家庭の複雑さを巧みに表現した句である。この嫁は所謂アプレ派の嫁であろう。自分の夫の母なら、自分にとっても母である筈だが、ユアマザー即ち、あなたのお母さんでしょう、わたしの知ったことではありませんわと、家庭のもつれに際して、母即ち姑に対しての親しみを少しも持ち合さないのである。この句の場合、夫に対して、ユアマザーの語の痛烈な反撃は姑としては実に佗びしい言葉となって響いたのである。

精薄児うぬぼれだけはちゃんともち　（千　容）

精薄児と言うのは精神薄弱児が省略されたものであることは言うまでもないが、川柳のように僅かに十七音字の中に言ってのけるには随分ムリな省略も行なわれないとは限らない。この句は単に精薄児がうぬぼれを持っているというだけの句ではあるが、精薄児のこととてうぬぼれなど持っていまいと思っていたのに、人並みにうぬぼれを持っていたので意外に感じたのである。

片言が素破ぬいてたとはしらず　（凡九郎）

「ウチ、今日、お客さんやネ。仲人さんが来てはんネ。」
「アラ、そう。」
「姉ちゃん、お嫁入りするねん。」
「そう、いつ？」
「いつや、知らん」

これでは片言にならんな、まあ〳〵こんな会話

で、スッカリ知れ渡ってるとは知らないで、姉はいつものように澄まして歩いている。
「あんた、お嫁入りするんだってネ。」
「いゝえ。」
「でも、みっちゃんが、言ってたわ。」
「アラ、アラ」
と言ったところをうまくつかんでいる。

道楽な親父だったが親だった　（珊枝郎）

古句に、「親の闇ただ友達が友達が」と言うのがあるが、この句は親の方が道楽者で、麻雀ござれ、競馬ござれで年中家をあけていたが、流石に親だった。こどものこととなると、他所の子にひけをとらせまいとして可愛がってくれたと言うのである。父性愛を子どもの立場から見ているところにこの句の面白さがある。

紙芝居下手やと云うて寄りつかず　（春日）

子どもが好きなのではじめた商売ではあっても、紙芝居が巧くやれるわけではない。子どもは正直だ。
「アレ下手やで」
「ソヤ〳〵、アレ、下手や」
と言うて、なか〳〵寄って来ない。写生句として面白い。

うちの子がトップにくぐる塀の穴　（草右）

親と言うものはうれしいものである。或は馬鹿なものである。子どもが塀の穴をくぐってあそぶのにもトップを切っているということがうれしいのである。そうした親の心理を巧みにつかんだ句である。しかも情景が目に見えるように描出されている。

子の頭言わず学校ばかり選り　（文　秋）

少々ムリをしてもあの学校へ入れておかぬと、京大や阪大へ入学が出来ないとおッしゃる。でないと大きな会社で採用してくれないとおッしゃる。それはその通りかも知れないが、あんたとこの子どもは、そんな学校へやすやすと入学の出来る頭かいなと言われると、サァそればと言う親達が多いのではあるまいかと言う心理解剖の句である。ネライが面白い。

再婚の連れ子義理の子今度の子　（牛　歩）

佳人薄命と云う言葉があるが、嫁して間もなく未亡人になる。遺児を抱えて生活戦線に投げ出されたがまだ若いんだしと、再婚をするようにすすめられる。子どもを見て貰えるんだったらと、再婚する。そこには先妻の子がいる。そこえ今度の夫との間に子が出来る。実にフクザツな家庭が折くして生れてゆく。佳人は何処までも薄命の道を辿るらしい。

弱い子がきちんと寝てるのも淋し　（ひか平）

達者であばれん坊だと怪我でもしゃアしないかと案じるし、弱ければ弱いで、風邪でもひきはしないかと案じるのが親ごころである。

この句は弱い子を持った親ごころを巧みに詠みこなしていると思う。あばれて布団から半分からだを出していると案じるくせに、弱い子のきちんと寝ている姿を見せられると、しみ〴〵といとしいのである。

家出され子供々々ともう云わず　（谷　水）

「うちの娘はいつまでも子どもで困ります」と人の顔さえ見れば、愚痴ってる母親がよくあるものである。そのくせ、その子ども〴〵しているのが、自慢なのである。ところが、いつのほどにか、いい人が出来、ここばかり日が照る訳ではないと家出をした。

驚いて引き戻したものの、それからは子ども〴〵と云わなくなったと云うのである。斯うした母性心理は昔も今も変らない。

子を叱る声を子無しに笑われる　（平　休）

親が子を叱る声というものは確に尋常ではない。半ば泣き声で叱ってる場合もあれば事実泣きながら叱っている場合もある。ホントに叱るということは難しいことであるが、親が子を叱る場合の声は懸命であり、必至である。叱ってるというよりも叫んでいると云った方が当ってる場合もある。そんな時に、そんなに叱らないでもと思うの

は他人である。子のない人には到底そんな場合の親の心境などが理解出来るものではない。
判っているように思えるのは常識でものを云っているのである。叱って貰えなくなった子にその心境を聞いて見るがいい。

宮詣り本人様は欠伸をし

（香　林）

宮詣りというのは男の子なら生れて三十一日目女の子なら三十三日目に、その産土（うぶすな）の神に参詣することである。からだよりも大きな丈の長い美衣を纏わせられている。それが親としての誇りのようでもある。しかし、この句では赤ン坊は何んにも知らないで欠伸をしているというのである。ユーモラスな写生句として一つの発見である。

子供の絵どの花も真正面に向き

（夜　潮）

こどもの直観はおそろしい。見たままを印象的に描くのである。花という花がみな真正面を向いて、調和などを考えないところにこどもらしさがあって面白いではないか。

子が放送します時間をふれ歩き

（光　郎）

古句に「子を持ってやうやう親の馬鹿が知れ」と云うのがあるが、親の盲目愛ばかりは手がつけられないものである。この句は可愛い子どもが一寸した唄を唄うのであろうが、子どもよりも親の方が大騒ぎしているさまが眼に見えるようである。

初節句本尊さんは晝寝中

（形　太）

初節句をうれしがるのは子ども自身ではなくて、親の方である。或は祖父や祖母である。青空に鯉が泳いでいようが、いまいが、初節句の本人は少しもごぞんじないのである。この句では昼寝中なのである。本尊さんと云う特殊な用語がこの句には特によく利いている。

先に脱ぐ子に手拭を持ってかれ

（猫　三）

日曜の午後か。今日はお父さんに連れられて銭湯へ行く。

お父さんは猿股のヒモが堅くてほどけない。グズ〳〵しているうちに、子どもは素早い、パッと脱ぐなり、そこにある手拭を持ってサッサッと浴室へ行ってしまったという写生句である。実に軽妙に、銭湯風景を写している。親も子も生きている。

席譲るどころか赤子ねかしとき

（方　正）

郊外電車などでよく見かける図だ。北海道のサケのように、みんなが吊革にブラ下っていても、一向頓着しない。

老人に席を譲るどころか赤子まで寝かして三人分ほどの席を占領して平気である。女と云うものはとつく〴〵感じたのであろう。

花の色は移りにけりな子を抱いて

（一　瓢）

その昔と云っても、そう遠い話ではない。曾てはあの女に対して心を動かしていたが、遂に談す機会もないうちに、他へ嫁してしまった。その女にフト出会ったら、もう子を抱いていたが、以前の美しさは消えてなくなっていたというのである。「花の色は移りにけりないたずらに我が身にふるながめせしまに」からの引用句で、複雑な味を出している。

パパママをどなりつけてる一人っ子

（七面山）

パパママにとって、一人っ子は育てるというよりも、寧ろ一つの玩具だという観方が出来るであろう。あまやかされて育った一人っ子が、小さなホイラントになったとて何んの不思議もない言

だ。そこを巧みにとらえたのが、この句である。

石投げる楽しさ都会の子は知らず

（水　客）

氷の張りつめた田圃の氷上へ氷塊を投げると随分遠方まで飛ぶので、田舎の子ども等はそうした楽しみを持つものである。そうかと思うと、山の上から、或は海辺で石を遠く投げることを競走して楽しむものであるが、そうした楽しみを都会に住んでいる子供たちは知らないと云うのである。石を投げればすぐに、そこらの家や人にあたる窮屈な生活をしている都会の子をあわれんだ句である。

まにあわぬ順で日曜起きて来る

（宗太郎）

「明日は日曜だから、ゆっくり寝よう」

と云っておいたのに、

赤ン坊が先ず目をさます、するとその横に寝ていた三つの子が起きて来る。次に幼稚園、小学、中学へと通っている子どもたちが起きて来ることを詠んだもので、中年夫婦の家庭をまざまざと見せてくれる句である。

認識をさすべく突如子は泣きぬ　（夏　六）

赤ン坊は全身が声である。生きんがための唯一の武器は泣き声である。「認識」や「突如」と云うかたい語彙がこの句をいかに巧みに効果づけているかを知らねばならない。それ等の硬い語彙を生かすために「さすべく」や「泣きぬ」と云うような文語を用いたことも又、適切な用法だと云うことが出来る。

枯すすきだけですパパのハーモニカ　（方　大）

「お父さん、ふいて」

と子どもがいう。

「ああ、よし、よし」とは云うが、このパパのふけるのは、野口雨情作詞の「おれは河原の枯すすき」だけだと云うのである。

親に対する親愛感も出ているし、パパの時代感も出ていて面白い。

子の目にも二度目の父は金があり　（草一郎）

この句の裏には、この子の母の複雑な素性が隠されていることに気づくであろう。

何んとしてでもこの子を育ててゆきたいという母性愛が、金持である二度目の父との関係を結んだのであるが、こどもはそこまでは知らない。知らないが二度目の父には金があり、最初の父のように貧乏で母をいじめるようなことのないことだけは判るが、やはり二度目の父にはなじめないという子どもの心理を巧みにとらえている。

この雑煮で育った子等がみな遠し

（素　生）

この句を一読すると老夫婦が静かに迎えた新春生活が偲ばれる。お祝いの雑煮を喰べるにつけても思い出すのは遠く離れて生活している子等のことである。下五の「みな遠し」に親心がいかんなくにじみ出ているではないか。

パパも留守ママも出かけて僕とチビ

（幸　男）

僕と云っているのは学生であろう。

チビというのはその弟のいたずらっこに違いない。パパは今日もどっかへ出かけて留守。それ幸いとママもデパートあたりへ出かけたらしい。そして何時も留守番をさせられるのが「僕とチビ」と云うのである。

ある種の家庭が浮びあがってほほえましくなるではないか。

辛抱して呉れる養子はちと足らず

（八ッ茶）

養子ばかりは、切れすぎても風波が起るし、全くの薄ボンヤリではつとまらない。

「オイ意気地がないぞ、オレならとうの昔に飛んで出てるところじやが……」

と友達におだてられても、

「ソヤ〳〵、オレはなんでこんなに意気地がないのんやろ」

と、それこそ人ごとのように云うのである。養家の方では「養子がモ少し、しっかりしていて呉れたらと思いますが、しっかりしていたら、うちなどにとても辛抱して呉れまへんやろ」といささか諦めてもいるのである。

アルコール切れると養子らしくなり

（水　堂）

「君、そんなに飲んでもいいのかい。奥さんが又やかましいぜ」と云っても、

「何アに、たかが女だ。女は賢いようでも、男の阿呆と似たかよったかだ。」と気焔万丈の養子さん。

「もう二三本熱くして持って来い。この酒はまるで水や」と銚子を振り廻わす。

しかし、一旦酔が醒めたとなると、妻君の顔が大写しとなってあらわれ、首をちぢめて我が家の敷居を跨げるのを諷したのである。「養子らしくなり」が養子型のすべてを想像させて面白い。

吝嗇も継いだを養子気がつかず

（清　[illegible]）

あたまから家憲にこれ従って来た養子、しきた

りの外へは一歩も踏み出したことのない養子であるとすればムリのない話。一寸人の気付かぬところをつかんでアッと云わしたという句である。

孫ひとりこんなにおしめもって来た

（古　方）

他家へ嫁した娘が孫を連れて実家を訪れたのである。たったひとりの孫に沢山なおしめ持参でやって来たのに祖父がオヤオヤと驚いて斯くは詠んだものである。

この祖父から、おしめは遠い昔のものであった。自分等夫婦が娘を育てていたころにも、これだけのおしめは必要だったのであるが、そんなことは既に既に忘却の世界に追いやっていたので、今更のように驚いたのである。平凡な日常生活から斯うした一コマをつまみあげたのは作者の力であろう。

初孫のミルクの匂いまで愛し

（迷　窓）

初孫は眼に入れても痛くないと云われている。親が子どもを愛するのも全く理窟ぬきだが、孫は子どもよりも、もっと〳〵可愛いものらしい。虫が好くと云うのか、乳くさい匂いまでを愛することをキャッチしたのである。

初孫がチンポコ摘んで寫っとり

（麦太楼）

孫は目に入れても痛くないと云われる。日に日にのびてゆく姿をカメラにおさめる。その中に

は、この句のように裸でチンポコをつまんでるのもある。それは自然の姿であると同時に愛撫の象徴でもある。チンポコを詠んでも少しも不潔な感じがしないのはそれがためである。

孫抱いて足は夕月出た方へ　（古方）

孫は子よりも可愛いそうである。それは子どもがおもちゃを愛する感情に通じるものがあるように思える。おもちゃは飽きたらポイと投げ出されてかえりみられない。赤ン坊を抱いたおじいさんも「オイ、おしっこをしたよ」と云うて嫁の手へ渡してしまう。

この句おじいさんらしい愛情も出ているし、詩情も豊かである。

春眠の顔へ赤ン坊這い上り　（旭童）

春眠の顔という表現は非常に面白いと思う。戸外は既にあかあかと太陽が輝いているのに、まだ眼が醒めないのである。その顔へ赤ン坊が這い上るさまを詠んだのに過ぎないのであるが、いかにも光景が躍動していてはおえましい句である。

少年のやくざ口調にどきりとし　（牧人）

すべての少年が、そう言う訳ではないが、近ごろの少年の中には、やくざ口調の者がかなりいるようだ。作者はそれに胸を衝かれたのである。

こんな風潮を産んだ直接の原因は映画の影響で

あることは云うまでもないが、少年の前途に希望が持てず、刹那主義や悪い意味の自由主義を育てて来た政治の罪だと云えるであろう。

女の子手毬を足でつく時代

（藤　波）

街路で女の子等が手毬をついているのを、よく見かけるが、従来は手でついていたのが、近ごろでは足でついている。ジャンケンなども足でやっている。時代の変遷だと云ってしまえば、それまでであるが、変れば変るものだとは作者の観察である。こんな句から見ても、川柳が風俗詩だと云われる一面があるように思われる。

俺と寝たことにしとけと帰らさず

（千　里）

遊里華やかなりし頃には、この句に詠まれたような場面はザラにあった。

「今から去んだところで、寝るだけじゃないか」

と、巧みに誘惑されると、

「じゃあ泊っていこうか」

と立ちかけた腰をおろすのである。

妻の待ち呆けを思わないのではないが、こんな時の悪友の言葉を一蹴し得ないのが、男としての弱さである。

この句、柳樽を思わすうまみを持っている。

オイと云う友に工学博士あり

（いわを）

親しい友だちと云うものは、お互いの環境がどんなに違って来ても、オイと呼べるところにいい

ところがある。

この句はオイと呼べる友達に工学博士があることを、ほこりとしていることを詠んだものである。環境が違ったり、地位に隔たりが出来たためにそんな人は知らないと云う出世主義の男もいるがそう云う人間は友情とはどんなものであるかを知らないものである。この句はオイとは云うが畏敬していることを感じさせるところに妙味がある。

旧友を訪えば脇門くぐらされ　（一　[illegible]）

旧友を訪ねたところが、自分の知らぬ間に、産を成していて堂々たる邸宅に住んでいた。そして、「まあ上り給え」と脇門をくぐらされたと云うのである。オヤオヤ、こんなことなら訪ねて来るんじゃなかったと、いささか侮蔑と羨望を感じたと云う句である。

落ちぶれた友へお櫃のまんま出し　（小松園）

友情のこまやかさがよく出ている。「お櫃のまんま出し」がこの句のいのちである。

落ちぶれた友のガツ〳〵して喰べている情景が眼に浮んで放れない。

三等を見てたら二等で来やがった　（谷　木）

久しく会わない友を駅のフラットホームに出むかえた。

東京へ出て、出世をしていると聞いたが、大したことはあるまいと三等車のとまるところへボヤッと立って待っていた。やがて汽車が停った。

「オーイここだ、ここだよ」

と云いながら二等車から降りて来たというのである。スマートな風采でボストンバッグを提げている友を見た時、田舎にすっ込んでいる自分の姿のみすぼらしさがなさけなかったのであろう。

「来やがった」と云う語は下品な言葉ではあるが、この場合の二人の関係がこの語によってハッキリあらわされていると云えよう。

俺の齢（とし）桶なら輪替えする時分　（柳　葉）

とうとう停年が来た。一寸疲れも覚える。シャニムニに闘って来た人生に対して反省したのである。この句を読むと一抹の淋しを感じさせられるではないか。

そうだ。輪替えして余生を大いに楽しむ必要があろう。

箸を割る手つきに老いは争えず　（茶　仏）

軽いスケッチの句であるが、一抹の淋びしさが漂うている。自分ではそれほど老いこんだとは思っていられないのであろうが、ハタから見ると、箸を割る手つきさえ、いかにもたど／＼しく、矢張り年の加減だなアと感じたと云うのである。

おまわりさんを若いと思う程に老け　（不　二）

おまわりさんが立っている。学校を出たばかりの若者にしか見えない。若いなア、あんな若さで、巡査の仕事が出来るかしらと思ったのである。ただそれだけである。ただそれだけであるが、この句からは巡査よりも、むしろ老人の心のうごきがハッキリとうけとれるところに興味がある。

お前はまだ若いと理屈負けかかり　（文　秋）

若い男はなかなか負けてはいない。
「でもそれは……」と理路整然と論じて尽きるところがない。
「そ、それは君の云う通りかも知れないが、それは一つの理屈であって、現実はそうではない。いずれはそれが判る時代が来るよ。君はまだ若い」と最後の逃げ路でイキをついたのである。大ていの論議はこんなところで落ちつくものであることを巧くつかんでいる。

風船の残念乍らしなびて来　（薩　城）

ただ単に風船がしなびたと詠んだのに過ぎないが、構成上擬人法を用いて「残念乍ら」と表現したところに句の生命がある。しかも風船のようにブラブラしているうちに、いつの間にやら、朽ちはててゆく人間性を諷刺している点を称揚したい。

息子卒業菊の翁にまだ成れず　（静観堂）

息子は大学を卒業したが、家業はまだまだ譲れない。従って菊を作って余生を楽しむと云う訳にはいかない。いつまでも現役で働き続けなければならないという近ごろの老人の心境を詠んだ句である。

妙齢が隣へ坐る程に老け

（どんたく）

電車の中でもいいし、座敷の中であってもいい。自分はそれほど老いこんでいるとは思っていないのに、妙齢の婦人が平気で隣へ座ったので、心がときめくと言うよりも、老人扱いにされていることをハッキリ示されたような気がして一種のさみしさを感じたのである。

老人の心境をズバリと詠んだ穿ちの句。

還暦はちよっと悋気もしてほしい

（一　哲）

還暦を迎えたが、老人になった気がしないのが今の還暦人である。しかし、うちのおじいさんがと老妻はスッカリおじいさん扱いをするものだ。すこしは妬いてほしいと言うのが幾ら年とっても男性の通有性かも知れない。適度のよろめき、適度の悋気が男女のつながりをいついつまでも保持するのであろう。

還暦迎う

老人のつもりで居たり居なんだり

（遠　二）

昔と今では還暦に対する観念が違って来たようである。

一般に寿命がのびた関係もあろうが、六十一になっても、老人扱いをされたり、されなかったりするし、自分でも、老い込んだという気もするし、まだまだという気もするのである。そこをこの作者は巧くつかんだのである。近ごろは孫が出来てもおじいさんと言われるのをひどく嫌う人たちが殖えたようである。この作者にも、そう言った気持が多分にあるのだろう。

こいさんも早や還暦に近くなり　（一　伸）

　船場の古いのれんの末っ子に生れ、みんなからこいさんこいさんと親しまれたが、こいさんが結婚適齢期の頃には家運が衰えていたので俗に云う帯に短かし、襷に長しで、良縁が得られなかった。

　これというきずもないのに、月日は瞬くまに流れて五十も過ぎ、六十近くにもなってというのである。一篇の哀史には違いない。

邪魔にされ大事にされて八十九　（芳　仙）

　年老いて、何んの役にもたたなくなると、つい邪魔がられる。そんな時に養老院の話などを聞かされると余りいい気持ちはしない。ひがまいでもいいことでもひがむものである。

　しかし、一方では老人の日だの、敬老会だのといって大事にされると訳もなく感激する。幾ら高齢になっても、これが人世だと悟り切ることは容易ではないらしい。

敬老会笑う力もなかりけり　（香　林）

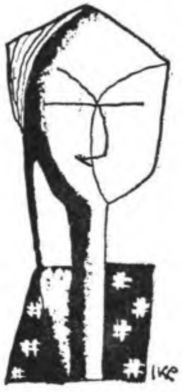
八十幾つ、九十幾つ、ながく生きたと言うだけで、敬老会に招かれる。もう眼がうすい、耳が遠い、水ばなをすすりあげる。全くザマはない。笑う力もないとは哀れな話である。この句、老人にとっては実に痛い句である。

鼻かんで貰って敬老会に出る　（鉄　洲）

「おじいさん、あんた、きょう敬老会のおよばれやな」
「何言うてんね、ちっとも聞えんがな。」
「ケ、イ、ロ、ウ、カ、イや言うてまんね。」
「ああ、そうか、きょうやったな」
「もう、そろそろ行く時間ですよ」
「オー、そうかい、もう行く時間かい。」
「あんた、鼻が出てまんがな。」

と鼻をかんでやる情景が巧みに描写されている。

女・男



年四十タイプ何時迄打つつもり　（季　贊）

会社の隅で、終日パチパチパチパチパチ、ガチャン、チーンとやっているオールドミスのタイピストを詠んだ句である。別に独身主義者ではないが収入がいいのと良縁に恵まれないので、いつのまにやら芳紀正に四十になったのであろう。年が年だから初婚はのぞめないし、後妻になって気苦労するよりも、いっそ今のままが気楽だと半ば結婚をあきらめているようである。

それを「いつまで打つつもり」と常に異性の社員の話題にされているのである。

一円のお釣へ女わるびれず　（水　客）

虚栄心の強いのも女の一面だが、一円のお釣りでも呉れるまで平然と立って待っているのも女ごころの一面である。そしてこの句は後者を詠んだものである。一円とは少額を表わしたもので必ずしも一円に限った訳ではない。

紅一点凄い拍手で立たされる　（博　也）

八等身でないにしても、男ばかりの中にタッタ一人の女が交じっていると、その集りを非常になごやかにするものである。次は何子さんに、お願いしますと幹事の人が尻込みする女をムリに立たせると、期せずして盛んな拍手が起るものである。そこをとらえたのがこの句である。

腕時計動かなくてもいゝのんよ

（豆　秋）

若い女性はアクセサリーを愛する。虫と称する小さな腕時計となると又してても動かなくなる。動かなくても腕に腕時計があると云う意識だけで充分満足が買えるのである。

それは時間を知るための時計ではなくて、装飾としての時計であるからである。若い女性の心理をハッキリと掴んだ句である。

でもでもと女あくまで逆う気

（高　志）

事件は少しも判らないが、男の云うことを、「でも」斯うだと云って、素直に請けいれようとしない斯うした女が世の中にはいるものだ。それが逆らわなければならんほどの大したことではないにしても「でもでも」を繰りかえすのである。女性心理の一面を巧みにつかんでいると思う。

ファッションショウ銀座を歩く気で歩き

（東岸子）

これから売り出そうという流行衣装を纏うて、いかにも得意そうにステージを前方に歩いたり後方にしりぞいたりするファッションショウのモデルくらい嫌味なものはないが、それを銀座を歩く気で歩いていると見立てたのである。

それは作家の主観に外ならないが、或はそうかも知れないと同感の出来るところにこの句の面白さがある。

すねて見たけどほッたらかしにされ　（良子）

恋愛中の男女とすれば、すねた場合に、ほったらかしにはしないであろう。ほったらかしにしても、大丈夫だとたかをくくっているところから考えて、この句は中年夫婦のことを詠んだものであろう。この句の味は口語体からうける軽味であり、ほったらかしと云う大阪弁がこの句をより効果的にしていると思う。

窓ぎわの女の腕は蛸に似て　（方正）

これは感覚派に属する句である。と云って作者が感覚派の作者だと断定する訳ではない。たまたまこの作者が「窓ぎわ」の女の腕を蛸に似たように感じたので、コレはこの作者の主観であるが、この主観にいささかでも共鳴することが出来るとすれば、この句にはいのちがあるとしなければなるまい。

口ひげの生えて来そうな女史であり　（阿茶）

たのまれもせぬ売春禁止法案をひっさげて起った意気軒昂の女史の姿がホーフッとして眼に迫るではないか。

「口ひげの生えて来そうな」は実に皮肉であり、ユーモラスである。女史と云われるほどの女性にあまり美人が居ないのも、口ひげが生えて来そうなの用語が適切である。

磨かせてガム噛んでいる紅い唇

（草　右）

アプレの女性を詠んだ都会風景のスケッチである。

「今御出勤？」

と若い男が肩をたたいて行く。

「アラ、今夜来てね」

と、流し眼を送っている。この種の女、靴を磨かせながらも商売気は忘れない。

誂えたのんよと喋べってみたくなり

（十　悟）

ホンの一寸したよろこびでも、悲しみでもジッと自分の胸の中に抱いていられぬのが女性の習性だと云えよう。特に若い女性が衣類の新調でもしたとなれば黙ってはいられないのである。「誂えたのんよ」という言葉のうちには誇らしさとよろこびが、にじみ出ているではないか。しかも「既成品ではないのよ」と云う意味もふくまれていて、何んとなくユーモラスな匂いもしている。

人を皆馬鹿にしたよにガムを噛み

（左文字）

ガムというもの、本来の目的は歯を洗滌するものらしいが口のさびしさをふせぐためのものでもあるらしい。若い奥さんや娘さんが、電車の中で、ムニャムニャとしきりに口を動かしているのを見ると、あんまりいい気持がしないものである。駐留軍の若い兵隊さんがムニャムニャやって

いるのを見ても、知的な人間にはうけとれない。ガムの愛用者からあんた余っぽどアタマが陳いのねと云われるかも知れないが、この作者の観方も一つの観方に違いない。

お握りで行こかと女同志なり

（千代美）

ハイキングか、それとも観劇か。それはハッキリしないが、そのどちらであってもいい。いい時候になったので家ばかり閉じこもってもいられないが、女性の立場からそうゼイタクはゆるされない。そこで「お握りで行こか」と女同志が談し合ったというのである。女のつゞましい生活ぶりを詠んだ句として面白い。

整然と足袋をたたむも女なり

（夜　潮）

男なら足袋を脱ぎっ放なしで捨てとくが、女はつつましくそれをたたむので、この句はそうした女性の習性を巧みにとらえている。どっかから帰って来たのであろう。羽織を脱ぎ、着物を脱ぎ、帯を解き、そして足袋までもキッチリとたたんで積み重ねているさまが眼に見えるようである。

本心が二伸に女心かも

（薫風子）

女と云うものはなかなか本心を打ちあけないものである。時には反対のことすら云う。この句、手紙に長々と何ごとかを述べてはいるが、それには

相手の気を引いて見たり、虚飾の言葉がめんめんと連らねてあるにすぎないが、その二伸には本心がのぞいている。それこそ女心の実態なのであろうと詠んだもの。女性心理を巧みにつかんでいる。

スピッツにはよくしゃべる口持っていて　（若　菜）

あの奥さん、いつ会っても、ムチッとしていて、チッとも口をきかない。いかにもそんだいに構えている。スピッツには何んとか、かんとか、よくしゃべる口を持っているくせに、人を莫迦にしてるんだわというのである。スピッツ以下に扱われているという劣等感を巧みに描いている。

塗下駄の感触女だけが知り　（千代美）

一寸面白いネライの句である。女性に限られた塗下駄の微妙な感触をとらえてうまく句にまとめている。しかし、その感触は男性にとっても、絶体に味えない感触ではないと思うが……。

売春禁止

足洗いし女に履くものをやらず　（挽　郎）

世相のきびしさを皮肉った句である。売春を禁止する法律は作ったが、それらの女性を救うためのうけいれ体制のないことはなげかわしいことである。

宿命が男のクズを養う身　（谷　水）

失業をよいことにして、競馬や競輪を追いかけ

る。それがなければ、麻雀パチンコへ入りびたりである。それでも連れ添う夫には違いない。ジッと手をつかねていれば人間の乾物が出来るので、飲み屋の女で僅かな金をつかんで来るが、暮しは決して楽ではない。それを宿命として甘受しているのも妻なればこそであろう。斯う云った環境の女を詠んだのがこの句である。

振返りはせぬかと女まだ立って　（薫風子）

愛すると云うことはふしぎな情熱が湧くものである。さよなら、さよならを何んべんかして、手まで振って別れたのに、まだ女はそこへ立っているのである。もしか振り返りはせぬかという気がそうさせるのである。女ごころを端的に描いた句である。

かき眉毛みみずくという顔になり　（栞）

かき眉毛というものは下手にやるとまことに滑稽なものである。それがあこがれの映画女優のかき眉毛などを真似たりすると一層滑稽なものである。「みみずくという顔」になったとは思わず、本人は案外平気でいらっしゃる。女ってものはとツイいらぬことの一つも云いたくなる。

螢光燈のせいにしておく唇の色　（梨花）

「どっか悪るいの？」
「いゝえ、別に」
「でも唇の色が変だわ」

「螢光燈のせいですよ」

と、すべてを打ち明けようとはしなかったのである。女性心理にメスをあてた句。

この人もやはりケモノの一人なる　（一　善）

女から見ての話なのであろう。この人ばかりはそんなことはないと思っていたのに、二人だけになった時に、その瞳には女のあるものを要求していたのであると云うのである。男の心理を巧くつかんだ句だ。

泣いてても女密柑を口に入れ　（俊　江）

世に女の涙ぐらい不可解なものはない。この句のように、女は泣いていても、みかんを口に入れるという余裕？を持っている。

泣くということが必ずしも悲しいから泣いているとばかりは云えないように、みかんを口に入れるという動作も喰べたいから喰べようとしているのでなく、一つの習性から来ているように思われる。こうした女性の習性をうまくとらえたのがこの句である。

夜の女あわれまれるが腑におちず　（一　瓢）

何んとか女史が赤線地帯を訪ねて、あんた方は女性の一生を台なしにしている。ボスのいけにえになっていて、実に気の毒だ。わたし達はあなた方をそれ等の吸血漢から救い出すために、懸命の

努力をしているのであると云うと、夜の女にして見ると、なぜわたし達はあんな人達からあわれまれなければならないのであろう。なるほどわたしたち達はこんな商売こそしているが、あんた達にこれっぱかしもお世話にはなっていないのだと云うのである。

売春法よ何処へ行くと云いたい句である。

飲んじゃいや嬉しいことを言うて呉れ

（春　日）

愛人か、新妻か。どちらでもいいだろう。「そんなに飲んじゃ、ダメじゃないの」と云ったって、飲まなくてはいられない時代がやがて来るのである。そう考えると若い時代や甘い時代を、うかうかと過ごしてはならない。おだてる訳ではないが出来るだけ甘い味を嚙みしめておく必要があろう。若さがほとばしってるような句だ。

撫肩は淋し解けてく氷に似

（湧　三）

ジッと眺めていると撫肩は淋びしい。それが次第に解けてゆく氷のようだと云うのである。冷徹な特異な比喩に作者の感覚の鋭さを見ることが出来る。斯うした句は黙って静かに味うより術がない。

馬鹿にした挨拶今日も呑んでるの

（娯句楽）

挨拶もいいが「今日も呑んでるの」とは何んだ。ワシの金でワシが呑んでいるのだ。兎や角云うて

もらいたくないと云うのが酒呑みの云いぐさであるが「今日も呑んでるの」と云う女の言葉には「だからいつも借金でうだつがあがらないんじゃないの」という軽侮の声がふくまれているのである。女は飲み屋の女であろう。話し言葉の句の面白さである。

男みな阿呆に見えて売れ残り

(阿　茶)

見合しても、しばらくつきあってからでないと結婚する気にならないのが、今の世の女である。さて、つきあって見ると、どの男もどの男も欠点だらけ、こんな阿呆と一生つれそうなんて、つまんないわと云ってことわってしまう。余所目にあの男ならと思う男にはもう妻子がある。あれもイヤ、これもイヤと云っているうちに、売れ残りになったと云うのである。皮肉な句である。

巌丈な男が泣けば喜劇めく

(淡　舟)

弱虫が泣くのに不思議はないが、誰れが見ても弱虫に見えない厳丈な男がポロポロ眼から涙をこぼして泣いてるのはあまりみっともいいものではない。それこそホントの弱虫なのであるが、からだがガッシリしているだけに喜劇めいてうけとれるというのである。たしかにうなずける句である。

赤着てる方がどうやら男らし

(阿　茶)

ジッと見ていると、今の世の中ぐらい、変テ古

な世の中はないとも云えるし、これでいいんだとも云える。男だから赤いものを身につけてはいけないという規則もないし、赤は絶対に男に似合わないと云う理窟もなかろうと云うものだ。ところがこの句を読むと非常にユーモラスに感じ、尤もだと云いたくなるのも面白い。今の若い人達は苦もなく風習を破るし、アバンはいたずらに風習に囚われると云う差が、斯う云う方法で表われるものと見える。

男手の針にはながいながい糸

（法泉子）

今の学童は男の子でも学校で運針を習うが、従前はよくよくの場合でないと針は持たなかったものである。この句もそうした男を詠んだものに違いない。男と云うものは針に糸を通すと云うようなことは至って面倒くさがるものであるから、長い長い糸をつけたと云うのである。男手と云うみじめな生活を巧みに描写していると思う。

二号置く気持不幸にして解り

（矢寸志）

本妻が胸を病んで十数年も入院生活をしていると単にセックスの問題だけでなく、一種の寂寞感、孤独感に襲われる。そんな時に二号の置ける人は二号を置いて心の空虚を充たそうとするものである。自分も不幸にしてそんな気持が判ると詠んだのである。

斯うした悲劇の人の心理解剖を巧くつかんでいる。

経験は尊とかろうが又振られ

（草一郎）

皮肉な自嘲句である。「又振られ」の「又」がよく利いている。失敗は成功の母と云われる。いくつかの失敗を積み重ねてゆくうちに成功するものであるが、女に振られた経験ばかりは苦笑ものである。「経験は尊とかろうが」とは何んという皮肉な言葉であろう。

又闇へやる気かと男真面目也

（珊枝郎）

近ごろの若い女は家に縛られることと、容色のおちることを、非常におそれているようである。まして子どものギセイになって赤字経済に苦しむというような事は愚の骨頂だと考えているらしい。しかしながら神のいたずらか、又しても孕む。そこで又してもおろすことを主張したのである。自然への反逆はそうなると男よりも女の方が強いと云えよう。「又」がよく利いている。

下積みでおわる男で慾がなし

（美笑）

将棋も一寸指すし、宴会で唄っても音痴の部には属さないし、一寸踊もおどれるが、そのくせ仕事の方では一向出世をしない人間がいるものである。そんな人間は課長どころか、係長にもなれないことを本人が一番よく知っているので身を殺してまで働こうとはしない。と云う訳でいつまでも下積なのである。しかし、その日その日は充分楽

しんでいる。欲がないと云えば云えぬこともないが、それで一向痛痒を感じないとすればそれも一つの生き方である。そこに作者は同感したのであろう。

キスしてほしい用件だと見抜き　（むじな）

別にこれという用もないのに会いに来る。
「何か用？」
と云っても、
「別に」
と云ったまま、帰えろうともしない。
そうだキスして欲しいのだなと見抜いたが、そこまで発展させるにはまだ時間があると云った句である。「用件」と云う用語にユーモラスな感じが出ていてほおえましい。

三度目のそれ見なさいへ折れておき　（迷窓）

しっかり者の妻を持った男の心境を巧くとらえている。何んかと云えば夫のすることに口ばしを入れる。それが不思議と妻の意見の通りになる。
「それ御覧、だから云わんことではないわ」
と度々やられる。三度目と云うのはたび〳〵の同義語である。

がみがみと云うてる愛しようもあり　（一貫）

朝、眼がさめて寝るまで、がみがみと叱り飛ば

している夫をよく見かけるが、では嫌やでいやでたまらないのかと思うとそうではなく、このがみがみは愛の言葉の変形である場合がある。妻も亦叱り飛ばされることによって刺戟を感じているらしい。この句はそうしたところをつかんだのである。

ハンサムだけれど頭は空っぽよ　（千　容）

今時の娘は隅におけない。男性を忌憚なく批評する。

娘二人寄ると、

「そうねえ、あの方ハンサムだけれど、頭は空っぽよ」とこの句の如く、やっつける。

「ハンサムだけでは買えないわ、それよか、ロマンスグレーの方がたのもしくはなくって？おもしろおかしくってね」

娘に対する作者の切れ味はなか〳〵鋭どい。

便乗の車五尺八寸小さく坐し　（春　雄）

「同じ方向へ行くのだったら、そこまでどうですか」と云われて自動車に便乗させてもらったのはいいが、こちらは五尺八寸の堂々たる体軀の持主である。

しかし、便乗させてもらったという遠慮から、なるべく小さく坐したというのである。

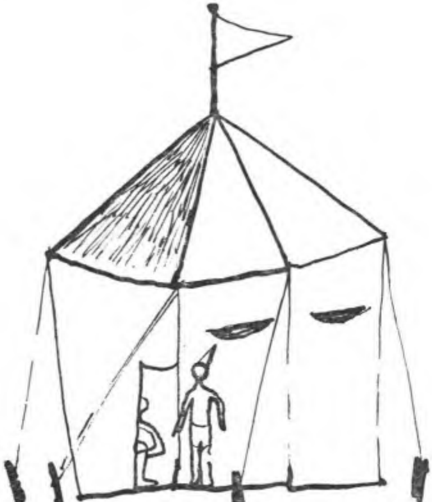
そうした、漫画式な自分の姿を思うと、微苦笑を禁じない。

軽い穿ちの句だ。

女一匹釣る餌代にも困り　（ひさみ）

これぐらい痛烈に男性を批判した句はすくない女の餌代どころか、自分のアゴがひあがっても恋情を断ち切れないのが男だ。伊左衛門も忠兵衛も皆この例に漏れない。

職業・職業人



商売のうまいやっちゃと見下げられ　（保　美）

商売にかけて抜け目のない人間は、ウソも平気でつく、悪事も悪事とは思わない。それがいつのほどにか習性になるので、下劣な人間になってしまう。そんな人間を世間では「商売のうまいやっちゃ」と云うが内心では人間の風上にもおけぬやっちゃと見下げるのである。面白いネライの句だ。

商売があほらしくなって来る人出　（文　秋）

ポカポカ暖くなって来ると、どこからとなくゾロゾロと人が出て来る。ジッと店番をして僅かな商いをしているのが、あほらしくなって来た商人

心理を巧くキャッチした句である。

メートルに直す間横へよらされる　（圭井堂）

メートル法実施後、斯うした情景をあちこちの店先で見せられるに違いない。

時事吟だけに、いのちの短い句であるが、一寸横へ寄らされて、換算しているふぜいに捨てがたいものがある。軽い穿ちの句。

ひまだから床屋へ来ればこゝもひま　（幽　王）

店がいそがしすぎても困るが、ヒマなのも困る。不渡りの手形のこと、イヤな税吏の顔等々、くだらぬことばかりが次から次へと頭にうか

んで来る。看板の剝げたのか眼につく。塗り替えたらいいことぐらいは判っているが、ヒマな時にたとえ少しでも経費をかけたくない。そんなことを考えていると、頭がムシャクシャして来る。いっそ散髪でもしてやろうと、床屋へ来たら、ここもヒマで、扇風機だけが生ぬるい音を立てていたと云うのであろう。淋しい市井風景ではある。

スポンサー羊羹の次胃腸薬

（千　永）

偶然ではあろうが、羊羹のスポンサーの次が、胃腸薬のスポンサーだったので、フト興味を感じたのである。しかし、スポンサー自身にはそんなことを思う余裕なんか有る筈もない。自分とこの商品を宣伝するのに懸命なのである。それを思うと又おかしくなったのである。

鼻声に勝てず百万契約し

（香　林）

「ね、ねえ、いいでしょう。」
「とてもとてもそんな金なんかありゃしない」
「そんなこと言わないでよ。よう」
と女の勧誘員は食い下って放さない。その鼻声が遂に功を奏して凱歌をあげてゆくことを巧く詠んでいる。

骨董屋推古のものにしてしまい

（文　庫）

骨董屋稼業の心理を巧みにとらえている。そうそう推古時代のものが、そこらに転がっている筈

もないのに、この彫刻の具合が、どこやらの何に、そっくりだし、この古びから言っても、推古朝のものに間違いないです。コレは全く掘り出しものですよと、勝手にきめてかかるのを諷したのである。皮肉な句。

奥さん奥さんと商魂のたくましさ

（草　右）

奥さん、奥さんの連発をするのは呉服屋か、化粧品屋か、それとも八百屋か、その点はハッキリしないが、この場合どれだってかまわない。奥さんと呼ばれることによって、誇りを感じて呉れることを意識する奥様であればいいのである。商人から云えば奥さん奥さんと連呼する代償がお買上げでありさえすればいいからである。

奥さん奥さんとかつぎや同志なり

（春　巣）

郊外電車や国鉄などでよく見かける情景である。

「奥さん、どやらこやら、奥さん、どやらこやら」

と、さかんに奥さんを連発してペチャクチャ、ペチャクチャ喋っているので、奥さんて、どんな奥さんかと、そちらへ向くと、何んのことはない、垢染んだエプロン姿の奥さんで、しかも、かつぎ屋同志だったと言うのである。

一寸したスケッチだが、アッサリとした表現のうちに一沫の皮肉味さえ感じさせられる。

見くびっていた職業についていた　（千　里）

この句から、どんな職業であるかを引っぱり出すことは出来ないが、それだけに、あんな職業なんてと見くびっていたどんな職業にも通じる訳である。この句には自己嫌忌と言ったものが感じられるが、それでいて、どんなにしてでも生きねばならないということを知ったのである。

軒下を借りる靴屋で世を終り　（七面山）

何とかして、何んとかしてと思っているうちに月日は容赦なく流れる。とうとう軒下の靴屋で世を終ったというのである。それが人生というものであろう。

御近所の頓死を保険屋無駄にせず　（弘　道）

近所に頓死があった。それを早速例に持ち出して保険の勧誘をしたというのである。詩味には乏しいが「無駄にせず」で、穿ちの味は充分だ。

なりわいの鱗かわいた手をはたく　（水　客）

魚屋のスケッチであるが、淡々たる表現のうちに、男一疋を浮きたたせた手腕をたたえたい。ヒラヒラヒラと散る鱗にも無限の味を感じさせられる。

客種に知事もされてるにぎりずし

（圭井堂）

「知事さんも来てくれはります」

と言うのが、すし屋のおやじの自慢の一つである。

「うちのにぎりを食ったら、よそのにぎりは食えませんぜ」

と、言うせりふが鼻の先にぶら下がってるんだからたまらない。

飲食街風景を巧くつかんでいる。

目と鼻の間で競う焼芋屋

（丁　路）

こんななんでもないことが句になるのも面白い。変った素材だけならべたからと言って、いい句がうまれるに限ったわけでないことを証明しているように、あまりにもありふれた素材でこの句は出来上っている。

自転車の上で老けてる配達夫

（香　林）

大てい郵便の来る家はきまってるし、ポーイと放り込めばそれでいいようなもののあれでなかなか楽な仕事ではない。降っても照っても、暑かろうが寒かろうが、自転車を乗り廻しての配達、それも乗ったり降りたりが、かなり頻繁なので若い者なら兎も角、相当の年配になると随分と疲れる仕事に違いない。勤続十年、二十年となると自転車の上でいつか老けてしまうのである。同情の思

いが自然と湧いてくる句である。

さびおとす労働もあり造船所

（平　休）

労働というても一律ではない。ニコヨンの労働、ビルのガラス拭きの労働と勤務評定を拒否している教員の労働とは雲泥の差があるが、何れにしても労働と名が付く以上そう楽な仕事でないことは言うまでもなかろう。

ところが、造船所には船のさびをおとす労働があるということを発見したのである。一ト目見ただけではすこぶるのんきそうで、これが賃銀のもらえる労働なのであろうかと疑いたくなると言っているのであるが、その反面には船側に身を挺しての危険な作業であることを思うと決して楽な労働でないことが判るというのであろう。

腐っても鯛と修繕屋のお世辞

（蜂　呂）

お世辞と言うものはむずかしいものだ。さて商売となると、何んとかお世辞の言いようもあるもので、こんなものは修膳するよりも、新ラで買った方がいいと思っても、そうは言わない。

「腐っても鯛ですよ。今時のものは、さっぱり見られませんからネ。修膳すればまだまだそこらの品は足元にもよれません」とか、何んとか言って揉み手をしている姿が眼に見えるようである。

細長うやってまんねと未だかつぎ

（ぴか平）

敗戦後八年になると言うのに、私たちはまだ汽車に乗ると、かつぎ屋に、足の下へ米らしい風呂敷包を押し込まれるのである。そしてその人たちは汽車が停車するたびに、あらぬ方を警戒している眼にブッつかるのである。中には汽車に乗るなり、エプロンを外ずし、コートを着たりして一般乗客に見せかけようとしているが、それがムダな努力だとは気づかないようである。一見してすぐ、未亡人のかつぎ屋だと知れるからである。

それはホンの僅かばなりしか運んではいないのいである。こうした女か、たまたま車中で知った人に出会った時に、「細長うにやってまんね」と言うことになるのであろう。この句半口語体の句で、かつぎ屋の一部の生活を巧く詠んでいると思う。調子も極く軽く表現されている。

祝おばはん駄菓子屋開店

千客万来五円十円二十円　(自由朗)

おばはんが駄菓子屋を開店した。人気もののおばはんが開店すると同時に、来るわ来るわ、青鼻垂らしたお客さま、エプロンをドロドロに汚ごしたお客さまが店を埋めつくした。実に光景が躍如としている。「五円十円二十円」がウンと利いている。古句に「千客万来皆来ると困るなり」と言うのがあるが、それは小料理屋の方で大供の千客万来を詠んだものである。ここの句は五円十円二十円で、こどもであることが溌然としている。一読はおえましさを感じさせられる。漢字ばかりの表現であるのも面白いし、調子もテキパキとして

いる。

根が生えた様に動かぬ露天商

（花　村）

人生の底を歩いて来た人が露天商として路傍に尻を据えているのを見ての写生句である。いつ売れるか判らないような品を並べ、根が生えたように黙々として動かない。世の中には斯うして生きている人もいるのだなァとしみじみと思わされたのであろう。

御近所はどうであろうと製材所

（多久志）

材木をまるで大根でも切るようにスカッスカッと製材している音の凄じさ位い、近所迷惑なものはないが、製材はわたしとこの職業なので、誰が何んと言うたところで止すわけにはいかない。やかましかったらそちらがサッサと移転するより方法がないでしょうという意見らしい。そして相も変らずジャンジャン製材しているさまが眼に見えるような句である。

老いぬれば老いの仕事のあるを知り

（香　林）

年をとると、えてしてワシはもうだめだと自ら諦めてかかるものであるが、老人には老人の仕事がある。年は寄っても生に希望をつなぐことはよいことであり、確かに、老人には老人の仕事があるものである。足や腰は若い者について行けないが、その顔がものを言うという手もあるのであ

る。作者の自慰から生れた句であろう。

葬式に松・竹・梅と級があり　（安　夢）

人間として優越感を持たないものはない。そこへつけ込んで葬式にまで等級をつけてその代償を得ようとはなさけない話である。

しかし斯んなことは葬式だけではない。世のありとあらゆるものに等級があるのである。

お泣きなさいとまってくれてる葬式屋　（古　方）

まだ棺側に泣きくずれているのに、いかに職業だとは言え、そうもぎどうに、もうそれぐらいお泣きになったらいいでしょうと言うわけにもいかないので、しばらく待っているのを、第三者がこの句のように詠んだのである。

第三者の眼は斯うした悲劇に対しても常に冷静である。それは川柳が常に真を求めてやまぬからであろう。

税務署が見付けてくれた使い込み　（宗太郎）

正直に申告していても税務署に調べられることはゆかいなものではない。ところが世の中にはこの句のような場合があって大騒ぎしている会社や商店がかなり多くあるのではあるまいか。税務署をこう言う方面から詠んだ句は珍しいと思う。

税務署でひげも盛んにおじぎをし　（一　伸）

ヒゲを生やすと人との応待に、そうペコペコおじぎをしないのが定石のようである。ペコペコしない地位の人がヒゲをたてるし、ペコペコしないことを自他ともに許しているようである。

ところが、そのヒゲ紳士も一度税務署の門を潜ると、ヒゲのあることを忘れている訳でもあるまいが、親子ほど違う年下の税務吏に盛んにペコペコおじぎをしているのをスケッチした句である。それが自分でなければ実にユーモラスな情景である。痛烈な穿ちの句。

税金はもう恐がらぬほどさびれ　（十　悟）

ジャンジャン儲かったころは人の顔さえ見れば「税金が高いのでかないません。まるで税金のために、働いてるようなものだす」とぼやきにぼやいて税金のノイローゼに罹っていたが、近ごろはトンと税金のゼの字も言わなくなったことを詠んだのである。

「斯う店がさびれては、いつ税吏が飛び込んで来てもビクともしまへんがなァ」とは近ごろの心境なのであろう。世の中は思うようにはならないものである。

見世物が明治の色で来る祭　（十九平）

覗きやサーカスが臨時にやって来る祭と言うものをハッキリとつかんでいる。時代錯誤の見世物が、いかに祭を祭らしくしているかを見逃がさぬところに、作者の眼の凡でないことが知られる。

「明治色」とは巧みな表現である。

サーカスが引上げスリも引上げる　（甲　吉）

サーカスがやって来て、天然の美のはやしが流れて来ると場末の人々の心は自然と浮き立つものである。しかし、そこには銀蠅のようにスリがくっついて来ることを忘れてはならない。

「ああしもた」

と言っても後の祭で、サーカスが引上げるとスリも亦引上げて行くというのである。サーカスとスリとを対照にして場末らしい情景が巧みに描かれていて面白い。

手錠かけてからあゝ君かいな君かいな　（韶　骨）

新派悲劇の一場面を描写したような句である。手法は厳粛である。手錠をかけた以上見逃がしてやるわけにはいかない。少しでも刑の軽いことを祈ってやるより術はないのである。この句はロマンチックな句であると言えば言えないこともないが「あゝ君かいな君かいな」と畳み句にして友情を感じさせる手法をとったのがいのちである。

駅長を出せとなにかが気に入らず　（久米雄）

汽車の延着か、荷物の遅着か、その原因は判らないが、旅客と駅員とがもめたのであろう。駅員との話がもつれるとなかなか埒があかぬので、旅客は遂にゴウを煮やし、「君では判らぬ。駅長を出せ」と言うのがきまり文句である。そこをうま

くとらえたのがこの句。

先生に云うたろ先生喧嘩中　（阿　茶）

「先生に言うたろ」
「言うのなら言うて見い」
というのが、学童の喧嘩の売り言葉に買い言葉であるが、
「先生に言うたろ」
と言ったところが、その先生は、そんな学童に耳を貸すどころか、先生自身、喧嘩の真ッ最中だというのである。

　学童そこのけでストをしている先生達へ投げられた実に痛烈な皮肉の句である。

鉢巻をすれば先生もおっさんや　（蛙眠子）

　先生と言えば一般に曽ては尊敬されていた。しかし、民主主義時代、自由主義時代になって、先生は労働者になり下がった。それでも、まだ筋肉労働者との間に一線を劃して多少の尊敬を保持していた。ところが勤評問題から多数の先生が一般の労働者と同じように、鉢巻をしてデモるようになってから、先生に対する尊敬の念が全く後を断ちそうである。先生も鉢巻をしたら、ただのおっさんだとは皮肉な観方である。

デモってからの先生が安く見え　（六　花）

勤評問題以来、先生の坐り込みやデモ行進などが、ズンズン明るみへ出るようになり、従来の先生に対するイメージが薄らいで、所謂労働者と何等変らないという印象をうけるようになったのである。

鉢巻をしてデモッている姿の先生に教育者としての敬意が払えないとすれば安っぽく見えるのが当然であろう。

子供好き田舎教師で世を終り　（万　古）

一方には坐り込みで騒ぐ先生もいるが、他方にはこんな教師もいるのである。子供好きが自分の出世などは忘れ、伸びゆく学童のために田舎教師として埋れたのを詠んだもので、軽い穿ちの句である。

先生よ先ず鉢巻をとり給え　（文　庫）

先生も労働者であると言って労働組合を作って、いろんな要求をすることになり、ねじ鉢巻で坐り込みまでやるようになったので、斯うした皮肉な句が生れたのである。

こんな先生に教育されるのでは、学童たちも、ゆくゆくは労働運動のベテランになることであろう。この句「先ず」の措字が非常によく利いている。

先生先生と情報たえまなし　（奇　童）

この句を読むと小学校の先生と、学童との親密なありさまが眼に見えるようである。

「Bさんが、こんなことをされました」

「A君が、僕の鉛筆を」

とか、なんとか、次ぎ次ぎに情報をもたらして来るのである。それは先生にとって、まことに煩しいことに違いないが、煩しいとも思わずに一々面倒を見てやるところに、小学校の先生でなければ味えない親しさもあるのである。この句は内包的に多くの味を持っている。

恩師機嫌わしも家内が苦手じゃて　（伊知呂）

恩師のために一席を設ける。いける口とて、とても迚も御きげんである。「お前は梯子か、そうか、家内がうるさがるって、そうかそうか、ワシも家内は苦手じゃて……」男にはこんなうれしい世界があることを世の女房どもは知っておくべきであろう。情景なり、人物なりが話し言葉によって躍動しているではないか。

一本立出来ると弟子はすぐ思い　（梅　志）

この句では何の弟子かは判らないが、弟子というものは一寸出来るようになるとすぐに天狗になるものだ。その点まことに可愛いものである。しかし、さて一本立になって見ると、それほどでないことをしみじみと感じるものである。この句「すぐ思い」の下五がよく利いている。

予備校の広告落第待つ如し

（草　右）

白線浪人の眼を射るものは予備校の広告であるが、その広告を読むと予備校は入試地獄ですべるのを待っているようであるというのである。皮肉でもあり、滑稽である。この句の面白さは「落第待つ如し」という表現の巧みさに外ならない。

入学へここは便所と教えとき

（摩天郎）

小学校の入学であろう。うちの子は今まで外の風にはあてていないし、いたって内気な子だとその親々は思っているのである。入学式がすむと学校の中を連れて歩いて、「ソラ、ここが便所だよ」と便所まで教えてやるのも親ごころである。

中学生大人を真似て子が生まれ

（喜　由）

道徳教育がやかましく言われている時に、中学生の桃色遊戯から子供が出来たのである。それを作者は「大人を真似て子が生れ」と皮肉ったのである。これは中学生の風紀よりも大人の風紀の悪いのを皮肉ったのであろう。何んでもなく詠んではいるが、何んでもなく詠んでいるところに却って鋭どさが感じられる。

プラカード下手糞な字が練り歩き

（茶　仏）

穿ちズバリの句である。よりによってあんな拙ずい字しか書けない連中が、ベースアップとはチャンチャラおかしく感じたのであろう。この句を一読すると思わず苦笑を禁ずることが出来ないではないか。

惡筆の方が目にたつプラカード　（省　三）

プラカードの下手クソなギコチない文字を見ると、私たちはゾッとした寒気を感じずにはいられない。こんな下手クソな字を書くような能力しか持合わさない連中が賃上げなどとはチャンチャラおかしい気がするのである。それを作者は「悪筆の方が目に立つ」と皮肉ったのであろう。彼等の尖った気持がそのまま文字にあらわれたのだとすれば、悪筆の方がむしろ適切な表現になっているとは言える。

運転手と云う見知らぬ男へ生命をあずけ　（妄　夢）

お互いは何等の考慮も払わずに、自動車に乗っているが考えて見れば随分危険な話である。何処の誰だか見知らぬ運転手、運転が上手か下手かそれすら知らずに平気でいのちをあずけていることをふっと思ったのである。神経衰弱でなくてもそんなことをふっと思うものである。そうした心理をうまくつかまえたのがこの句だ。自由律の句としての妙味もある。

子澤山の番付へ住職がトップ　（幽　谷）

子沢山と言えば昔から貧乏人と相場がきまっているようであるが、この村ではお寺に年中おむつが飜っているのであろう。
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えながらヒョコヒョコと子を生ましている住職を想うと、なかなかにユーモラスである。

獨り居の僧で雨戸も忘れ勝ち　（古　方）

どうせ盗られるものもないという安心感も手伝ってのことであろう。僧の一人居の静かさを、「雨戸も忘れ勝ち」という表現で想起させた手際のよさがこの句のいのちである。

貧乏の幸福ばかり説く牧師　（明　林）

「貧しきものは幸なり富むことを得べければなり」と牧師は常に言う。それには違いないが、貧しい者の多くは、それだけではなっとくがいかない。彼等は貧乏でない幸福がどうして得られるかにあるのである。この句は牧師に対するレジスタンスとしての穿ちだと言えよう。

經木書よくも落武者揃えたり　（薺　花）

お彼岸に天王寺へ参詣すると、石の鳥居の近くに経木書がズラリとならんでいるが、何れも風采

のあがらぬ世の中から取り残されたような人物ばかりである。そこを作者は「よくも落武者揃えたり」と詠んだのである。

風采こそあがらぬが、なかなか達筆なのもいる。そうかと思うと当て字ばかり書いているのもいる。それでもいくらか稼げるのであるから世の中と言うものは不思議なものだ。この句の面白味は、別に貧弱な風采をした落伍者を狩り集めて来たのでもないのに、「落武者揃えたり」と強く言い放った表現技巧にあるのである。

老人を車掌苦もなくつまみ上げ

（夜　潮）

街頭風景のスケッチである。電車かバスか、それは判らないが、老人を「苦もなくつまみ上げ」と言うところを見ると男の車掌らしいので電車なのであろう。この場合の車掌の行動は親切というよりも、早く発車させるためと解する方が妥当であろう。

老人のヨボヨボとした動作と、くっきょうな車掌の動作とが眼に迫って来る。

眼に注射誰れか医学を信ぜざる

（日　満）

今でも不治の病のあることを認めない訳にはいかないし、新しい病気が次々に発見されて手のつけようのないこともいなめないが、それにしても医学の進歩したことを疑う余地はないだろう。眼に注射と聞いただけでも、ドキッとするが、医者の立場から言えば、今では何んでもないことかも

知れない。たしかにこの句は一つの発見である。

婦人科へつてのつてから堕しに来

（清　生）

この句によって子を堕さねばならぬという原因は判らないが、そう簡単に婦人科へ行く訳にもいかないし、婦人科の方でも何時でもいらっしゃいとは言っていない。理由があれば堕ろせるにしても、つてを求めて出かけるのが常識らしい。そこでつてを求めて頼み込んだところが、わたしは婦人科の医者に心やすい人は居ないが、友人が婦人科の医者に心やすいから、頼んであげようと言った具合に、つてからつてへ頼んで堕しに来たという世相の一端をキャッチしたものである。

部分品取替えますと整形科

（花　村）

女ぐらい、顔の造作をかえたがるものはない。隆鼻術へ行って低い鼻を高くして来る。整形外科へ行って一ト皮目を二タ皮にして来る。耳にはイヤリングをブラ下げる。鼻の穴に鼻輪を通したらミス何んとかにしてやると言えば通しかねない。整形外科が儲かるのもうべなるかなである。この句なかなかにユーモラスである。

少しなら飲んでもという医者に替え

（清　生）

人間というものは誰でも、自分の都合のいい方へ解釈したがるものである。その弱点を衝いた

のがこの句だ。飲酒家の患者にとっては病が峠を越したとなると少しぐらいなら飲んでもよろしいと言われることは最大の福音なのである。
人間性の弱さをつまみ出して見せてくれているところにこの句の面白さがある。

病院の横でも医院食ッてゆけ　（清　生）

大きな病院がある。患者がグン〳〵吸いこまれてゆく。その横に小さな医院がある。患者がいっこう来てそうにもない。それでいて、その医院は消えてなくならないところを見ると、小さな医院は小さな医院で食ってゆけるものらしいとは作者の発見である。
対照の面白さをつかんだ句である。

往診のお医者の方がたんと咳き　（牛　歩）

医者の不養生という言葉がある。少々咳が出る位は意にも解さないで、宅診もするし往診もする。必ずしも病気を軽く見ている訳ではないが寝込んでいない限りは往診をする。風邪をひいた位で医師を呼んだ人の経験に違いない。一寸面白い発見である。

医学会藪医者同志のむ話　（ゆずる）

「学会でネ―」
と藪も筍も、忙しそうに、得意そうにいう。その癖、驚天動地の学説を発表したという声は聴いた

ことがない。公費で旅行することだけは間違いないが、この句のように藪医者は藪医者同志で大いに呑んで、小唄の一つも発表して来るのがオチであろう。お医者さんに叱られそうな句であるが、ワシは藪医者であると名乗って出るような人は先ず先ずあるまい。

診察室こけしも置いて女医若し

（杜　的）

強度の近眼鏡をかけ、白い手術着に豊満な肉体を包んだ女医さん。医者稼業はしても、診察室にこけしを飾っているところを見ると、女らしさと言うだけでなく若さを放散していることに気付くのである。多少の穿ち味もあるが、どっちかと言えば感じの写生句である。

お百姓さんにたまわる広い天

（太郎丸）

常にビルの谷間にうごめいている人間が、たまたま郊外に出た時に、ああ、ひろびろとした天、あおあおとした天、果てしなき天、平和を表徴する天、これこそ百姓にたまわった天恵であると、つくづく思われたのである。これは都会人にとって一つの発見に違いない。

百姓でなけりゃ故里よいところ

（旭　童）

山はわが寒村を抱きかかえているし、河は流れ流れて海にそそいでいるし、山紫水明の美くしさは誇るに足ると云えようが、猫の額のような土地

柄だけに私達を養うに足る収穫はのぞむべくもないと云うのであろう。「百姓でなけりゃ」が暗にそれを指摘しているではないか。一百姓として生を享けた人間が古さとに対する述懐の句である。

囲われたままで小鳥のように死に　（薫風子）

二号夫人も、囲われて幾歳月となると、平々凡々たる日が過ぎるに過ぎない。
寵愛せられたあの頃の甘さも、色褪せた花のように何の変哲もないものとなって散ってゆくのである。その死を鳥籠のせまい天地で死んでゆく小鳥の姿にたとえたところに哀れな美しさがある。

三号になって洋裁通いなり　（七面山）

三号にとっては豊満な肉体と若さの提供以外に捧げるものはない。その代償としては物質的に不自由のない生活そのものでしかない訳であるが時に将来を考えると、身につけておきたい慾望がアタマを擡げて来る。それが洋裁通いとなったのに外ならない。

病床吟

今日あたり来て呉れそうな髪を梳き　（ひさみ）

愛人ともとれるが、二号生活を詠んだものとうけとるのが、より適切なような気がする。なんとなくしみ〴〵としたものを感じさせられる。髪を梳き、頬紅をさしては見たが、鏡に映る顔は少しも晴々とはしていないのである。若しかしたらこのまま棄てられるのではなかろうかという不安を

どうすることも出来ないからである。そうした女性心理を実に巧みにとらえている。

しゃなりしゃなり十半の足袋で来るおかま　（一　瓢）

おかま（男娼）を詠んだ句は珍らしいが、この句を一読するといかにも美人気どりで歩いているおかまをピシャリとやっつけているところに特に興趣を覚えるのである。顔も美しい、姿も仇ッぽいにしても、足袋の十半はツャ消しである。思わず吹き出さずにはいられない句であるが、ムリにくすぐって笑わさないところに作者の腕をみとめねばならない。上の絢「しゃなりしゃなり」もこの句を生かしている。

不渡りと知らぬ女将は靴そろえ　（梨　花）

今のあそびは月が出た出たや、黒田節で、ドカドカと来てドカと帰って行く。払いと云えば会社の小切手。ウッカリすると不渡りと云う。コレでも遊んだ気がするとは、世も末やと云いたくなる。

お勘定の小切手へ三拝九拝した女将、飛んで下りて靴までそろえたのに、不渡りとは、そりゃ聞えませぬと云って見てもあとの祭り。人物躍動。

お女将さんがうるさいのよと断られ　（多久志）

しげしげと来る客が、

「どっか、温泉へでも行こうじゃァないか」と、誘いをかけて見たのであろう。それは婉曲なくどきでもある。ところが女の言葉は「お女将さんがうるさいのよ」であった。アッサリとことわれたのである。酔客と仲居との心の動きを巧みに描出している。話し言葉ズバリの窄ちの句である。

座布団にいつかなってた膝枕

（白　星）

好きな酒に酔うた上に、好きな妓の膝を枕にうとうとすることは、むじょうのよろこびに違いない。維新の志士の詩に、酔うては枕す美人の膝というのがあるが、今も昔も斯うした気持ちは同じだと云えよう。

酔いがさめ、目が覚めて見たら、美人の膝ではなく座布団を枕にさされていたのである。現実をそのまま見せてくれた面白い句である。

妻のみでなく芸者までお父ちゃん

（愁　夢）

いさゝか禿げて来たせいもあるが、人の善さからでもある。

「お父ちゃん、ワテこっちにするわ。エゝでしょう。」

「ウム」

「姐ちゃんにもコレ、エゝでしょう。」

「ウム」

何か、買わされたのである。

「お父ちゃん、早よ帰りまひょ。お女将さんが待

ってはるわ。」

「ウム」

斯くもお父ちゃんは善人なのである。まとを外ずさぬネライ、巧みな描写、句は生きている。

啄木を晶子を語る妓で売れず

（春　日）

石川啄木の「一握の砂」がどうの、与謝野晶子の「舞姫」がどうのというインテリ芸者だけに、媚を売ろうとしないのであろう。男の脱線を理解することの出来ない、イヤ男と一緒に阿呆になれない妓が売れる筈もない。そこをとらえたのがこの句である。

電話口花千代さんは舌を出し

（豆　秋）

ところは色街、芸者姿のあでやかさ。受話器を手にして「待ってまんねで、ウソやおまへん、ワテ、べた惚れだんね。（と云って、ペロリと舌を出す）みんなにひやかされてばっかり……照れくそうて照れくそうて（と言って又ペロリと舌を出す）、来てくりやはれへなんだら、ワテ焦れ死に死んでしまいまんがな（と言って長い舌をペロリと出す）斯うした色街情景を巧みに詠んであますところがない。花千代さんが浮彫りされていて、この世界を髣髴させるところ、しかもユーモア味を感知させる技巧は作者の独壇場である。これこそ所謂豆秋ばりの句の上乗なるものか。

ハンサムの人から女給先に酌ぎ

（草一郎）

女給がお酌をするのに、無意識のうちにもハンサムの人から先にお酌をしていたと言うのである。ただそれだけのことであるが、軽い穿ちの句として興味がある。斯うした心理の探求が手際よく果たされるところに川柳することの面白さは尽きない。

終電車さっきの媚がツンと居る

（修　三）

キャバレーでの痴態も彼女の営業用の媚だったことをハッキリ認識させられた訳である。「さっきの媚」とは巧い表現である。

送詞謝詞仲居はずらりかしこまり

（麦太楼）

送別会風景のスケッチである。送詞と言うのが型の如く行われる。別に惜しい人ではないにしても、一応は惜しむことになっている。謝詞と言うのが又型の如く行われる。しかし、この方は去るにのぞんで感無量の涙を流す人もいる。そんなとりやりの言葉が交わされる間、仲居さんはズラリと目白押しに並んでかしこまっているのである。光景が眼に見えるように詠まれている。

ダンサーの亭主だそうな葱を買い

（麦太楼）

日はとっぷりと暮れた。市場はもう仕舞いかけ

ている。一人の男がネギを買ってゆく。別にいそいでいるさまも見えない。一人者とも思えないが時々ネギを買いに来る。

「アレ、ダンサーの亭主だそうな」

とは市場の声である。夜更けて戻る妻のために、スキの準備なのであろう。明るいような暗いような、そうした二人の生活を巧みに描いたところが作者の手腕である。

上役・下役

人間として選挙権ない陛下

（十　悟）

雲の上から降りて来られた天皇に、選挙権がないとは、同じ人間なら選挙権がある筈なのに、これはどうしたことであろうと感じたのである。

陛下には選挙権どころか被選挙権もない。それに姓もない。まだまだ特権階級者の第一人者であると同時に、多くの束縛もうけていられることは言うまでもない。制度の改革ということはそう簡単には実現しないものであることが、陛下が人間としての選挙権を持っていられないことからも考えられるのである。

首相あわれ營業用の笑顔もし

（花　村）

カメラマンに、一寸お笑い下さいと言われてニコリと笑うのを、「営業用の笑顔もし」と皮肉られたのである。芸者や女給の営業用の笑顔なら兎も角、首相ともあろうものが、営業用の笑顔までせなければならぬとはあわれな話ではないかと思ったのである。

面白いネライの句。

首相云う雨のふる日は天気がわるい

（伍　健）

首相ともなれば、もっともらしいことしか云わない。揚足をとられまいと云う意識が自然と当り前のことをもっともらしく云う。そこを皮肉ったのであろう。

当選御禮今から公約忘れます

（春　雄）

さて選挙となると、なるべく当選しそうな口約を数限りなく並べ立てるのが立候補者の常である。

その全部が全部の口約をまともに受けとる選挙人もいないであろうが、その幾分でも果してくれたらと其の候補者に一票を入れる。それが積み重なって当選する。そして当選御礼となると、それを限度に公約を忘れますというのである。皮肉な句でなる。

尾があれば振って見せたい立候補

（花　村）

この句の場合どんな選挙か判らないが、まァ代議士戦としておこう。さて立候補したとなると急に人間が弱くなって、誰にでも頭を下げたくなる、イヤ下げるものである。なるほどこの句のように尾があれば振って見せたくなるものであろう。これぐらい皮肉で、しかも痛烈に立候補者の心臓をゆさぶった句は稀れであろう。

左派の左派雑草に似てよくねばり

（香　林）

左派と名のつく限り、社会と取っ組んで多くのなやみを持っているものであるが、その左派の更に左派となると意の如くならぬことが多い。しかし、不屈の精神が彼等の生命であるだけに、どんな難事にぶっつかってもひるまない、ねばりにね

ばる。それは、ひん抜いて投げ捨てられても、投げ捨てられたとこで更に根をおろす雑草のねばりに似ていると観たのである。

はからずも等とやきもきしたくせに

（生々庵）

会長に推された人が就任の挨拶に「浅学菲才の自分がはからずも云々」とハンコで押したように使う「はからずも」の語で情景を躍動させている。会長になりたくてあんなにやきもきしたのを忘れたような云い草に苦笑を禁じ得ないことを詠んだもので稀に見る皮肉な句である。

遊説をしてみて悪路よくこたえ

（一　念）

大臣が地方遊説に出掛けると、下にもおかぬもてなしをうけるが、村から村へ、町から町への遊説で一番こたえるものは俥からふり落されそうな悪道路である。

この悪道路の改修を何とかならんもんでしょうかと持ちかけられて、「イヤ、よくわかった。是非骨を折ろう」と言質をとられるのも、遊説で身にしみたからであろう。

清濁併呑豪語していて引張られ

（千　容）

「そんな堅いことばかり言ってたんじゃァ世渡りは出来やァしない。万事はオレにまかしとけ、決して悪るいようにはしないよ」と札ビラを懐ろ

にネジ込んでやったり、ネジ込まれたりして、いかにも大物らしく振舞っているうちに汚職事件の容疑者として引張られたと言うのであろう。酒、女、贈賄等々の世界がこの一句から眼に浮んで来る。

洗濯機粗品と書いて運ばれる　（鬼　美）

洗濯機へ粗品と書いて運んだと言うだけでは味も素ッ気もない句のようであるがわいろに贈る粗品だと判ると平凡な句とは言えない。粗品と書くにはあまりにも洗濯機は高価であり、あまりにも嵩張った品であるところにユーモアを感じる。贈られる人がサラリーマンであり、思いがけなく洗濯機が据えられて、よろこぶ人が、その人の妻君であることが想像にかたくない。

ポケットへ突込まれてから辞退せず　（多久志）

昔は袖があった。そして袖の下が行われた。今はポケットがある。突ッ込むのに便利である。収賄が絶えない所以である。まァ〳〵と突ッ込まれたら、サアそれはと突き戻す勇気が無くなるものらしい。この句はそんなところを巧くとらえている。穿ちの句である。

野心家に前後左右が敵に見え　（一　善）

野心家というものは、良心的に動いている人間から見ると、実にイヤな奴であり、バカバカしい

存在である。その人間の噂をしていなくっても、お互いが談笑しているとすぐにきき耳を立てるし、先輩にはツベコベと阿諛するし、同僚は出し抜くし、実に鼻持ちならぬ行動を平気でやる。しかもそれをさも腕があるように考えているのであるから、コッケイである。斯ういう男にとってはこの句のように、「前後左右が敵に見え」るのである。痛快な穿ち句である。

生字引表彰されて元の椅子　（藤　波）

生字引と言われる人間は、どこの役所に行っても一人や二人はいるものだ。庶務の隅にいつもくすぶっているが、こと役所に関しては、かなり詳しく知っているものである。それは課長のアクセサリーのような存在に過ぎないのであるが……。

そしうた生字引が表彰されたと言えば多分何十年勤続と言うのであろうが、表彰されても矢張り元の椅子にいるのである。係長の椅子も課長の椅子も彼を待ってはいないのである。しかし、それでも別に不平そうな顔もせずに、元の椅子にいるところが、生字引の生字引らしいところなのである。「元の椅子」の下五が、この句を生かしている。

埋立ての好きな役人ばかりなり　（山川児）

端的に叙してはあるが、役人の急所を小気味よく衝いている。

あの池を埋立てたら、何万坪の住宅アパートが出来る、あの海辺を埋立てたら何十万坪の工業地

帯の施設がやれるとは役人のアタマである。役人のアタマの限度がこの一句によって判るような気がするのも面白い。

でも社長さんと怒らす事を云う

（日　満）

でも社長さんと、社長の意志に反することを言うのも若さばかりではないが、社長は社長の意見がある。社長は決してウンとは言わない。サア、その意見に、時代のズレがあることを正面から指摘して、でも社長さんを繰り返えすのである。怒らす内容は具体的に表現していないが、労資対立の一コマを「でも社長さん」と言う言葉で想像させるところが妙である。

取締役会長になり菊作り

（一ン十）

喜寿もすんだ。金も出来た。肩書もかなりあるが、それも煩わしいだけだ。今では是非と請われるまま取締役会の会長だけ引うけさされて、時々顔を出すだけである。たまたま人が訪ねて来ると庭先から上って来て、

「近ごろは菊作りでなァ」

と悠々自適していることをさも誇らしげに、菊談義をやると言うのである。財界に多少とも色気のある人物を髣髴とさせる句である。

ノック聞き社長は伏せる「ホトトギス」

（玲　人）

私は俳句が作れる。これが社長の自慢である。俳句がつくれると言うことは世の常の社長のような俗物でない証左であると信じているのである。

社長室の大きな机の上には毎月、俳誌「ホトトギス」が配達される。誰かが訪れた時に、静かに「ホトトギス」を伏せることに社長の誇りがあるのである。社長心理を巧みにつかんだ句だと言えよう。

巻頭へ社長の俳句らしきモノ

（玲　人）

会社の文化部から、雑誌が出る。厚生課長が、おそるおそる社長室のドアをノックして、社長さんに何か一つお願いしたいのですがと言う。「よろしい」と安請合いはしたが、これと言う原稿が書ける筈もない。下手なことを書くと労組がうるさい。そこで「これを載せてくれ給え」と渡されたのが、即ち「俳句らしきモノ」なのである。皮肉な穿ちの句で、「らしきモノ」が特によく利いている。

幕間にも社長思いつきをメモ

（清　生）

社長とは凡そ忙しい仕事の人。観劇すら自分の意思からでなく、お客様を御招待する場合が多いのである。

幕間にも、何かを思いついたらノモを取っておき、心は明日の仕事へと向っているのである。軽い穿ちの句。

君たちがあっての僕と老獪な　（一　瓢）

社長と社員の場合や、工場主と工員の場合などがおもわれる句である。一寸持ちあげられて、いい気になっていると、アンに相違して社長だけがいい子になったり、工場主だけが儲けていたりすることを「老獪な」という下五で利かしているのである。

香煙の中から故社長にらんどり　（どんたく）

告別式に、一般焼香の席から、香をつまんで、フッと向うを見上げると、喪章の紐の垂れた中から社長の引伸された写真が、こちらを見ていられる。それが、いつもの社長のようにグッと睨んでいられるように見えたと言うのである。実に鋭どい句だと思う。

重役の会食今日は書の話　（法泉子）

クラブか何んかでの会食であろう。Aはなかなか書が巧いではないかと言うことからはじまって、王羲之がどうの、顔真卿がどうのと知ったかぶりを言い、近ごろの前衛派のあれは書じゃないね、全く邪道だよなどと誰ればからぬ御たくせんである。そこをとらえたこの句には軽い穿ち味がある。

重役が二十五人も居て潰し　（日　満）

重役が二十五人と言えばかなり大きな会社であろうが、みんなが皆働いている訳ではなく並び大名に過ぎないのである。しかし、船頭多くして船山に登るという格言もあるので、重役が多いことが必ずしも社運を隆盛にするとは限らないのである。この句は重役が沢山居ながら名策も出ず、ガヤガヤ騒いで社をとうとう潰してしまったのに興趣を感じたのである。

腹立ちが自由に出せる地位となり　（春　雄）

すぐさまクビの心配をしなければならぬ地位にいては少々癪に触わることがあっても真ッ向から腹を立てる訳に行かない。家に帰って妻にあたるか、どッかの呑み屋でウッを散じるより術がないのであるが、それが、腹が立ったら誰に遠慮もなく、自由に怒鳴ることの出来る地位になったのである。ヤレヤレ、これで、俺も生甲斐があると思う、そうした人間の心理をうまくつかんだ句である。

世相険し上役の死を待つも　（仕　的）

部長が病気をする。年が年だし、ひょっとしたら、ひょっとされるかも知れない。若しそうだったら、自分に部長の椅子が廻って来るかも知れないと思うと、少しも早く亡くなって呉れたらと、言う怖ろしい考えが、又してもアタマをかすめてゆくのである。そんな考えがよくないことは言うまでもないが、こんな考えが浮ぶというのも世相

がきびしいからであると自分で自分をかばう人間の弱点をついた句である。

催促の仕方を大学出に教え　（一ン十）

大学を出ても実務にはサッパリ役に立たんと言われる。これはせめる方がムリである。

この句は大学は出ていないが世間学には長じている社長が、催促の仕方を大学出に教えているのをキャッチしたものである。

主任とはかくも休まぬものかいな　（没食子）

時計のように、キッチリと出勤するし、映画の話一つしない。そのくせ、部長が咳をしても振り向くと言う忠勤ぶりである。これが主任だとすれば自分などはいつまで勤めても主任にはなれないだろうと、いささかあきれているところを詠んだもの。平社員のためいきさえ感じられて面白い。

ハイ耳掻きと秘書如才なし　（多久志）

ボヤッとして秘書の役はつとまらないのが常識である。社長の顔色一つで右か左かをテキパキと判断しなければならない。「ハイ耳掻き」ぐらいは秘書心得の第一ページだと言えよう。しかし、この句は女秘書を詠んだものであろう。

おえら方やつぱり女工の顔を見る　（方　大）

工場へ這入ると、機械よりも女工の方が眼につくものである。若い学生が視察に来ると女工の眼が一斉に学生の方を見るのと同じ心理かも知れない。おえら方はもう相当の年配者なので女工達から見られるほどの魅力を持ち合わさない。あゝ、それなのに、おえら方が、あいつは一寸踏めるなアとジッと女工の方へ眼を据えるのである。たかゞ女工だとも思わないで。

大臣になったとたんに野暮を云い　（アート）

大臣になるまではそうでもなかったが、大臣になったとたんに、場席も考えずに、修身を説いたりしないまでも、野暮なことを言うようになったと言うのである。そこらの大臣がくッしゃみをしそうな句で、たしかに穿った句だ。

要職で少くなつた言葉数　（方　正）

身軽な地位にいたころにはよく冗談を言った。しかし、要職につくと、ホン一寸した自分の言動でも大きな反響を呼ぶことがあるので、ウッカリしたことは喋べれない。アレは冗談でとは言えないからである。要職につくと自然言葉数がすくなくなって行くのは椅子が孤立したり、部屋が別室になる関係ばかりでもないようである。この句一つの発見である。

世論もう聞えぬ椅子へそりかえり　（明　林）

すべての政治家は世論に敏感でなければならないのであるが、総理だの総裁だのという椅子にそりかえって我が世の春を謳うようになると、もう世論などは聞えぬようになるものである。イヤもう聞こうともしなくなるものである。

本当の仕事はコンマ以下がやり　（水　堂）

本当の仕事をコンマ以下がやってるか、どうかはハッキリしないが、そうでも思わねば仕事なんて出来るものではない。

問題はホントの仕事とはどんな仕事かと云うことである。この句の場合、コンマ以上は遊んでいるか、アクセサリー扱いにしているようにとれる。それでは物の半面しか見ていないのでないかと思う。この句のような考え方からストが片意地になったりするのである。その反面コンマ以上がホントの仕事をしていると思う時に、コンマ以下に仕事をぶち毀わされることがある。コンマ以下も、コンマ以上も考える必要があろう。

振り上げて目にもの見せるは蠅ぐらい　（井　蛙）

考えて見れば諦らめの生活とでも云うのであろうか。蠅にことよせて、自分の平凡な生活を詠んでいるのである。この句には叙法の学ぶべきものがあろう。少しもムダな文字が使ってないし、調子にもスキがない。

下ッ端と見てか挨拶せなくなり　（無　鬼）

この句あながち下ッ端のひがみとも云えないだろう。皮肉な句である。

上役と下ッ端との心理関係を余程細心に凝視していない限り、斯うした場合に度々触れていても句としてとりあげるまでには到らないのである。敬服に価する。

旗本社員今日も社用でない社用

（伊知呂）

出勤する。出勤簿にはんこを捺す。それから自分にあてがわれた仕事をする。そのうちに社規による八時間が経過する。そこで静かに退出する。本来会社勤めはそれの繰返えしでいい筈のものであるが、それだけでは多くの場合、いいポストにはつけない。大ていの会社には形に影の添うように重役に対する旗本社員というのが存在する。彼等はすすんで重役の私用を果して保身の術としているので、それを諷して「社用でない社用」と云ったのである。「今日も」がよく利いている。

月給日行つて来るぞと勇ましく

（どんたく）

大戦の時に「勝って来るぞと勇ましく」という軍歌が流行したが、その「来るぞと勇ましく」と云う引用句で構成されたところにこの句の面白さがあるのである。ここでも、いっていらっしゃいと妻子が見送っているところに共通した情景が描かれているではないか。

皆花見ですと日直そっけなし

（日　満）

「今日はお休みですか」
何んの返事もない。ズッと這入って見ると、日直が一人ポツンと椅子にもたれている。机の上には詰将棋の譜と今日の新聞が散らばってあるばかり。
「今日はお休みですか」とかさねて聞くと、
「そうです」とたった一ト言云ったきりでこちらを向こうともしない。
「社長さんは」
「来てません」
「では、どなたか、社長さんの代りの方にお会い出来ませんか」
「皆、花見です」

家族主義だからと労基法も無視　（扇子仙）

家族主義と云えば一応は理屈はつくが家族主義の美点の方は忘れて、労基法に対するレジスタンスに過ぎない場合が多い。この句はそうした家族主義者へ一撃を与えているのだと解すべきであろう。

ストをして万才万才言うてはる　（美　喜）

ストをしている労組の連中が気勢をあげて、ワッショイ、ワッショイ、万才、万才とデモッてるのを見て、何が万才万才だと皮肉ったのである。「言うてはる」とアッサリ大阪弁で皮肉を投げつけたところにこの句の面白さがある。世間ではもう、年中行事のようになったストに同情もしないし関心も持たないのである。

メートル法定年覚えようとせず　（清　生）

市場でもメートル法になった。百貨店でもメートル法になったが、まだメートル法では、感じが出ないと云うのが定年組なのである。

是非必要な場合には換算表を見て用だけはすますが覚えようとはしないのである。明治生れの人間には晩酌何リットルでは酔えないからであろうか。

引退へ趣味の無かったのに気づき　（草一郎）

生きると云うことはホントにむずかしいことである。引退をしてフト気づいたら、今までの生活はただハンド・ツー・マウスの生活にすぎなかったのである。老いて何一つ趣味を持たないことが、どんなに心の貧しさであるかをしみじみと知ったのである。

四十年の勤続髪も捧げたり　（麦太楼）

勤続四十年、いつのまにか歳月は流れた。停年としてしりぞいても何等悔いはない筈だが、一沫の淋しさがないでもない。房々とあった頭髪も今は薄く、真っ白くなっている。これでよいのかも知れぬが、矢張り淋しい心に変りはないという老サラリーマンの心境を巧く描出している。

五十五の満期ペン先換えるよに　（一　瓢）

サラリーマンの停年制を詠んだ句であるが、使えるだけ使うたら、何んの感傷もなく捨ててかえりみられないペン先に比べているところに、停年にドキンと突き当ったという悲哀さが巧みに描出されていると思う。

「五十五の満期」が資本主義の惨忍さを思わせるし、「ペン先換えるよに」が人間の老朽とペン先の使いふるしとの対比を適切なものとしている。

定年になるまで会社もつかしら　　（静　馬）

どうにかこうにか勤めて来たが、もう二年もすれば定年だ。だが一寸した不況にもがたつく会社のことだ。私の定年まで会社がもつかどうかが疑問だ。そんなことを考えると定年ノイローゼに罹りそうだ。

そうしたサラリーマンの心境を巧くとらえたのがこの句である。

定年が近くいやみも輕く受け　　（回天子）

「定年だそうですなァ」

「そうですよ。いつの間にやら定年になりました」

「しかし、ワタシなどと違って、家はご自分ののだし、退職金はタンマリ這入るんだし、悠々自適というわけですね」

「なかなかどうして、前途を考えると、ボンヤリもしていられませんよ」

と云った具合で軽く受流していることを詠んだものであるが、軽く受け流してはいるが、心の底には多少の不安がないでもないことを内包している。

定年の寂しさ物価あがるのみ　（緑　雨）

これがワタシの天職と云って、まっしぐらに働いて来たが、さて定年退職となると物質的には酬いられないことがハッキリした。僅かな退職金では満足な余生が送れそうにもない。しかも物価はあがる一方で、心は何んとなく暗いと云うのである。

定年になったサラリーマンの心境をそのまま表白した句である。

衣•食•住

モーニング煙草を入れるとこがなし　（法泉子）

作者の実感であろう。ほおえましい句である。モーニングを着て、しかつめらしい顔はしていても、タバコ喫みはタバコを放せないのである。ところがモーニングにタバコを入れるようなポケットがないので、思わず苦笑をした。そこを捉えたのがこの句である。調子の軽い穿ちの句。

モーニング着ても
おっちょこちょいに見え　（しげお）

婚礼か葬儀か、それは判らないが、兎に角厳粛な集りへモーニング着用で出かけた。ところが元来おっちょこちょいの男なので、モーニングを着てても、おっちょこちょいに見えたというのである。おっちょこちょいとモーニング、それだけでも、充分にユーモア味を感じさせられる。

縫目あるので素足ではないらしい　（方　大）

オヤ裸足のまゝで、ハイヒールなんか穿いて何処へ行くんだろうと思って、ハイヒールから眼を脚のウラの方へ移すと、縫目がある。足に縫目がある筈がない。思わずウフフと笑えるのである。面白い発見と云える。

サックドレスポストのように
ひとを待ち　（知恵美）

赤いサックドレスを着た女性なのであろう。ソ

レがポツンと街角に立っている姿は恰度ポストのように見えたと云うのであるが、この比喩法はそのものズバリと云いたい。ポストに見立てられるなど余りいい恰好ではないが彼女自身は流行の尖端を行っている気でいるんだから世話はない。

こんどめはニューモードなる袋着て

（沐　天）

フランス仕込みや、そうでないのも交じえてのデザイナーが次ぎ次ぎに、ニューモードなるものを世の中へ送り出すが、それを若い女性たちは臆面もなく着て歩いているのである。

「こんどめは」どんなものかと思ったら、サックドレスと称して、袋を着ているので一驚を喫したのである。

「袋着て」の下五に作者の皮肉が横溢している。

繿あてて天地に愧じぬ作業服

（水　堂）

汚なく働いて綺麗に食えという言葉がある。油じみた作業服で今日を生き抜く。あちこちに継ぎがあたっていようが誰に遠慮が要るであろう。

「天地に愧じぬ」はいささか大げさな云い方であるが、誇張法の句として面白い表現である。

湯豆腐で一っときＵＳＡ忘れ

（草一郎）

アメリカに居ても、一世にとって湯豆腐の味は忘れられない。そこでアチラに居ても天ぷらも喰べるし、湯豆腐も喰べる。四囲の環境がすべてア

メリカではあるが好きな湯豆腐の一っときは全くここがアメリカであることをさえ忘れていると云うのである。いくら帰化していても斯うして折にふれ、物にふれては祖国を忘れ得ない人たちがかなり多いのである。

かんと煮き脊中の風は気にならず

（木　客）

さむざむとした冬。かんとだき屋の湯気が街へ流れている。ここは庶民階級にとっての天国には違いないが、風がノレンを吹きあげるたびに背中へまともに風が当るのである。しかし、いける口にとってはそれも気にならないほどに、朗らかに気焔をあげていることが、うなずける句である。

電化してみたが坐って飯を食べ

（多久志）

台所風景をごく平易に詠んだ句であるが、なんだか、自分たちの生活が常にムジュンだらけで尻こそばゆさを感じたのである。そう思うて振りかえると畳の上に椅子をならべて事務をとっているのもおかしく「電化してみたが」の上八の措字がピタリと来る句である。

火吹竹何も忘れた顔で吹き

（八　歩）

火吹竹と云うものは都会ではもう忘れ勝ちであるがかまどで飯をたくには必ず一ト役買っていた台どころ用具の一つである。今でも農家の台所な

どにはころがっている。昔のどどいつや端唄の中にには色っぽい役廻りさえしていたものである。火を吹いて火力を強化するのに用いる用具で、至極単純で素朴な感じのものだ。かまどの下がけぶると、頬をふくらませて、息の続くかぎり吹くので、それこそ何も彼も忘れた顔となるのである。

面白い写生句である。

一山にされる胡瓜のどれもすね　（芳　泉）

あまり出来栄えのいゝ胡瓜でないことは、いずれは八百屋の店先で一山幾らで売られる品なのである。そんな品だけに、どれを見ても、すねていて満足な形をしてはいないと云うのである。この句は擬人法による諷刺句である。人間も一山扱いにされるような人間は、どっかにすねたところを持っているからである。単なる写生句でないことは「すね」の二字が表わしている。

すき焼の健啖体制整える　（夜　潮）

「体制整える」はいかにも大げさな云い方であるが、そこが誇張法の面白味である。日常の茶飯事でも表現技巧によって、この句のように句を生かすことが出来るものである。

利用価値尻尾をつけたエビフライ　（万　古）

海老フライからシッポが出ていると云うだけであるが、なかなかユーモラスな句である。尻尾が

出ていて、たしかにエビの存在を示し、エビの大きさをそれとなく示しているところに、料理人の技巧が思わされたのである。それに利用価値という硬い用語を駆使して一段とユーモラスな味を出していると思う。

出刃庖丁らしくポタポタ水が垂れ

（水　客）

一体料理人というものは水使いの荒いものであるが、出刃を使うような場合には特にザァザァと水を使う。出刃庖丁は一寸見ただけでも随分とぶきみなものであるが、その出刃庖丁からポタポタ水が垂れるさまは血の滴りのような物凄い感じをうける。この句は感覚的な写生句である。

自転車の見える角度でそばを喰べ

（芳　仙）

うっかりしていると、自転車は出先でよく盗まれるものである。この句の場合、セールスマンに限ったわけではないが、たびたびとられた経験があるので、軽食をとっていても、自転車から眼を離さないのである。写生句の妙味がこんなところにもあることを知らねばならない。スル〳〵スル〳〵とそばを喰べる音をさせながらも、チラッチラッと横眼を使っているユーモラスな情景が眼に見えるようだ。

素うどんですます気隅の椅子へ寄り

（良　坊）

それは外交員か、公務員か、人物はハッキリしないが、この句の場合どっちだっていい。ただ昼めしか晩めし代りに素うどんですましておく人間の心理をつかんだのである。つまりこの句のネライは「隅の椅子に寄り」である。行商などが弁当のサイに素うどんをとるのとは少しくおもむきが違い、素うどんを喰べるのに、何んだか気がひけるクラスであることが感じられる。

ハイお土産裕ちゃんのブロマイド　（芳　仙）

この句の面白さは「ハイお土産」という上六字のへうきんさにある。あたり前なら、ハイお土産と、「と」の字を挿入して声調を整える筈だがワザと「と」の字を入れずに「と」の代りに休止符的なマをそれに替えて、句をいきいきとさせている。裕ちゃんは云うまでもなく人気俳優の石原裕次郎の愛称である。

パラソルをひろげて見せて昨年のよ　（初　甫）

たとえ安物でも、今年の流行を追いたいのが、女性に共通した心理である。この句、無頓着なようには見せているが、去年のパラソルに何んとなく、ひけ目を感じているのである。淋しい心境がよく出ていると思う。

寫真向って一人置いてと無視される　（不　二）

これは新聞などを見ていると、よくぶッつか

る。大物と大物との間に、それほどでもない人が撮っていると、写真説明の時に、この句のように「一人置いて」と無視されてしまうのである。

自分は斯うした大物といつも交際っているように思わせるために、陣笠代議士などが、とっさに割り込んで撮さられる場合がよくあるが、あわれにも写真説明ではオミットされてしまうのである。こんな句境をつかんだ作者のケイ眼を推奨する。

質流れのオメガにうかと引っかかり　（麦太楼）

オメガの時計が欲しいと思っているところへ、「質流れだから安くしておきますよ。二度とこんな出ものはないでしょ」と、うまく談し込まれて、そんなに安いのだったらとムリ算段して求めたところが、それが贋物で、うまくつかまされたというのである。オメガであることがこの句のヤマである。

イヤリングいやよいやよと揺れている　（豆　秋）

「いやよいやよと揺れている」は一読しただけでは極く平易な表現に見えるが、所謂無技巧の技巧の句で人物が躍動している。殊に「いやよいやよと」いう中・七の重語法に情緒を横溢させている点、凡手でないことが知れよう。

紐つけて引っぱりましょかイヤリング　（花　村）

イヤリングに対する感覚は国土によって、時代によって環境によって、人おのおのによって違うであろうが、作者の眼には浅薄な女性の虚飾として映ったので、この句のように揶揄したのである。イヤリングすることが、よいか、わるいかは別として一つの観方には違いない。この句に同感の人たちは微笑を洩さずにはいられないであろうし、イヤリング美を感じる人たちには一種の侮蔑とうけとるであろう。

銀行のマッチをでんと應接間　（北　海）

堂々たる応接間というはどでもないのに、私のうちは何々銀行が取引銀行だと云わんばかりに、一流銀行のマッチの大箱がデーンと据えてあるところを詠んだのである。どんなに大きなマッチがおかれてあろうとそんなことは問題ではない筈だが、ライバルにとってはピーンと来るかも知れない。

お燈明バーのマッチで惡うました　（多久志）

お燈明と云えば昔からひうち石でカチカチとやり、発火すると、先ず附け木に点火してそれから燈芯に移すか、ローソクに移したものである。近ごろは平気で、マッチで点火するようになったが、流石にバーのマッチと気付いて良心的にゆるされないものを感じたのである。

騒音に馴れて立読自若たり　（伍　健）

街路の騒音がブッ突けに耳朶を衝くのであるが、執拗に立読をするほどの心臓の持主だけに、自若として身じろぎもしないのである。

この句「自若たり」の漢文調の誇張法によって句が生きている。そしてそこから一種のユーモアを発散している。

ベストセラーそうかそうかとよう読まず　（柳蔭亭）

生活にあくせくしていると、なかなか読書の時間が見出せないものである。原田の「挽歌」が出た。大谷崎の「鍵」が出た。深沢の「楢山節考」が出た。山崎の「暖簾」が出た。五味川の「人間の条件」が出た。と、次から次へベストセラーの声を聞いても「そうかそうか」と云うばかりで、一冊として読む暇のないことをなげいたのである。世の中には一冊の小説すら読むひまのない人がどんなにか多いことであろう。軽い穿ちの味もあり、中・七の「そうかそうかと」が、よく利いていると思う。

ゆたんぽの底に値札をはったまま　（古方）

病人が出来て急にゆたんぽを求めたのであろう。ふと、気がつくと、ゆたんぽに値札が貼ったままである。慌てて買いにやったその時のことがまざまざとアタマにうかんで来る、という句である。淡々とした家庭の写生句である。

原子力人間はまだ蚊帳を吊り　（多久志）

原子力で万事を解決しようとする科学の時代に、その裏側ではまだ蚊を防ぐのに蚊帳を吊って人間が存在することを面白く感じたのである。科学が人を殺すとなると、科学々々と騒ぐよりも、蚊帳の中の平和こそ真の平和かも知れない。

棺桶に入った様な仕舞風呂

(春　雄)

内湯であることは云うまでもなかろう。一日の仕事を終えて戻って来た身にはそれが仕舞風呂であろうと疲れを慰するには充分だと云えよう。もう洗う元気さえない。湯槽にふかぶかと身を沈めて、静かに目をつむる。ふとアタマにうかぶのは棺桶に浸入っている自分の姿である。それは疲れ切った人のこころでもある。

大阪銭湯

下駄に鍵衣類も鍵に気が疲れ

(無　鬼)

都会ではウッカリすると物が無くなる。銭湯のなやみは下駄がなくなる。衣類がなくなる。一々弁償していては商売にならぬ。そのための番人をおけば人件費が高くつく。そこへ生れたのが下駄函のカギ、衣類入れのカギ、雨が降れば傘入れのカギとなったのである。都会人にとってはそのためにゆったりと湯に浸ることが出来るのであるが、馴れない人にとっては気が疲れるかも知れない。一つの発見である。

ガス風呂の見積るだけは見積らせ

(省　三)

家庭に風呂のあるということが、サラリーマンの念願だ。しかし、風呂を焚く者の身になって見ると、かなり辛い。折角風呂がありながらつい焚かないで銭湯へ行くことになる。行くとなると面倒だ。殊に遅く帰った時などには行く気がしない。今日も行けない。いっそ、ガス風呂にしたらという気になる。

「不経済でしょう」と妻はもうガス代が気になる。

「ウン大したこともあるまいが、差し詰め設備費が要るさ」と夫の方は設備費について考える。

「まあ見積るだけ見積らせて見よう。それからの事だ」という穿ちの句である。

門札を見なおす程の庭が見え　（六　花）

ホントに見たままで何んの変哲もないスケッチのようであるが、ジッとかみしめるとなかなか味のある句である。人を訪ねたりしている際に、住宅街などで、この句のように、一体誰の家かしらと門札を見直すことがままあるものである。

インテリの無力を知った大掃除　（雅　堂）

大掃除にスタイルだけは一人前だが、さて簞笥を運び出すとなるとヒョロつく。畳も手伝ってもらわないと運べない。つくづくとインテリの無力さを知ったのである。大掃除の日に「映画でも見に行っていらっしゃい」と追い出されてホッといきをつくのがこの種のインテリである。

山ン中に建てても庭を造りたく　（一　雨）

人間というものは雄大な自然に恵まれた山の中に家を建てても、自分の庭というものを持ちたがるものである。

猫の額のような庭でもいい、自分の庭と名のつく庭が欲しいのである。

そうした心理を一個の人間からつかみ出したのがこの句である。

何をたく煙か我家見えはじめ　（旭　童）

そろそろ黄昏れて来たので家路をたどる農人の姿が思われる。

遙かに自分の家か見え、その家の棟から、何を炊く煙かしらんがゆらゆらと煙が立ちのぼっているのが見え、何んとなく身内に温たかさを感じたのである。田園風景の叙情詩として捨てがたい。

嫌な隣だが風除けの位置にあり　（一　瓢）

一寸奇抜なネライの句である。「嫌な隣だが」と云って置いて、あとを思いもよらぬ「風除けの位置」にあると、自分に有利な観方に転換した技巧は素派らしい。技巧の句もこれほど鮮かにやればいい。

もげそうな釘へ電話帳をかけ　（梅　志）

都会の電話帳は型も大きいし、ページ数も多いので、かなり重量がある。それがすぐとれそうな一本の釘に吊されている風景のスケッチである。

誰もが、イヤというほど見せつけられている風景を拾いあげるか、拾いあげないかは作家の眼に外ならない。上五の「もげそうな」という方言がこの句を生かしている。「もげる」は「ちぎれる」の意である。

メリーにごはんやってと歌舞伎座から電話

（清　生）

メリーと云うのは多分犬の名であろう。

「ごはんやって」と云う言葉から類推すると女性の匂いがする。それは有閑マダムかとも思えるが、犬好きの女性であることには間違いない。軽い穿ち味もあってネライはあざやかだ。

これは歌舞伎座からの電話であるから句が生きたのであって、外の劇場だと全くそぐわない。この点から云っても語彙と云うものが微妙な働きをすることが判る。

受話器を押えて留守だと言いましょか

（高　志）

貸借関係にある人からの電話であろう。話し言葉で生かした句である。人物も判り、情景もよく出ている。スケッチの句であるが、軽い穿ちもある。

どの雨も池へは円となって落ち

（妄　夢）

なんでもない表現であるが、詩味を感じさせられる。静に物を観る作者の詩性が遺憾なく表出されていると思う。

市場籠の中まで夕焼赤く染め　（杜　的）

夕餉の準備で出かけた主婦の提げた市場籠の中まで夕焼けが赤く染めているのを見て、その美しさに、心がなんとなくなごやかになったのである。詩情豊かで、短歌的な句だ。

大風に一家を背負う人默し　（太郎丸）

大風の強靱な破壊力の前には家も人も問題ではない。一瞬にして吹き飛ばされてしまうのである。一家を背負う人が、大風に対して僅かな抵抗すら持ち得ないことを知った時その心は暗い。ただ黙りこくいるより仕方がなかったのである。

ヤジ馬は焼け落ちてからコーヒにし　（旋　風）

火事場の弥次馬心理というものは非情なもので、次の棟へドッと火の手があがると心の底で快哉を叫び、消防の努力で瞬く間に白い煙があがるとガッカリするものである。火事そのものと、焼け出された人達への同情とは全く別個の心理が働らくのである。この句は焼け落ちたので、ああこれでしまいかというガッカリ組が、コーヒでも飲もうかと、喫茶店の椅子に腰をおろしたというのである。ヤジ馬心理を巧くつかんでいる。作者は

ホノルル市に住んでいるが、ハワイも日本も火事場のヤジ馬心理は同じらしい。

また次へ移る火の手をうれしがり

（圭井堂）

いくら寒くても、かたずをのんで見物しているのが、火事の弥次馬である。パチパチと音がして又次へ火の手が移ると、何んとなく壮快味を感じるのである「この風ではまだまだ焼けるでしょうなア」と燃え拡がるのをうれしがってるような口吻である。火事の弥次馬心理をつかんだ句。

焼跡の柱草月流に立ち

（一　恒）

焼跡の柱が、夜空に高くニョキニョキと立っている情景は実にさむざむとした感じである。それを作者は「草月流に立ち」と表現したところがこの句のネライである。草月流へ投げた皮肉に興趣のつきないものがある。調子もよく整っている。

金

的確に且つ迅速に金銭が減り

（不　二）

カネがグングン減ると云うことは誰もが経験し過ぎるほど経験しているので、使えば無くなることに何んの不思議もない筈だ。ところが斯うして句にされて見ると一種の魅力を生ずるのはどうしたわけかと云うと、「的確に」「且つ迅速に」と云う漢語で、しかも調子のよい表現の力によるのである。何んでもない題材を生かすのに、調子や表現の仕方が、かなり強力な役割を果していることの証左としてこの句などいい例であろう。

あけすけにものを云うのも金があり

（夢　裡）

誰に遠慮会釈もなく、大きな声で、あけすけに口をきく人がある。こんな人はキッと金がある人だと云うのである。人間にはたしかにそんな一面がある。癪にさわっても、金がものをいう世間ではどうすることも出来ない。云うだけ云わしておくより手がないのである。しかし、そんな人に限って、案外握り屋が多いのである。

作者はそうした人に対するレジスタンスでこの句を詠んだものらしい。

小遣を呉れる財布を覗いて見

（一　傘）

「お小遣い、幾ら呉れるかしら、たんとお金があるのかしら」と小遣を呉れる財布を覗きながらも、そんなことを考えるさまがうけとれるのであ

る。スナップ的な句ではあるが、非常に面白いと思う。

自殺した部屋でも権利金とる世　（谷　水）

深刻な住宅難を詠んだ句である。うちの近くに首を吊って死んだ家があったが、住宅難と云うものは怖ろしいものである。なアに、首を吊って死んだと云ったところで自分達とは何んの関係もない人である。自分は何んとも思わないと云って、権利金を出してサッサと引越して来た人があった。恰度この句の場合とおんなじである。世相の一断面を確かに穿ってはいるが、句としての魅力には乏しい。

腹工合わるし大金持たされて　（豆　秋）

極く平易に詠まれているが小心翼々とした男の態度をハッキリとつかんだ句である。

多少は作者の実感かも知れない。自分の金でないのと、常に持ちつけぬほどの大金を持たされて、万一盗られてはと思うと、何となく腹の調子が悪るくなるものなのである。作者はこの間の心理の動きを巧みにキャッチしている。

われと来て遊べ財布に金入れて　（望　峰）

俳人一茶の

「われと来て遊べよ親のない雀」の引用句である

が、「われと来て遊べ」が奇想天外に引用されているのが面白い。

一茶はせむしでまま子で、友だちもない淋しい生いたちから、親のない雀へ呼びかけているのであるが、この句は悪友への呼びかけである。一茶の句には動物愛が感じられるが、この句にはいささかの友情も感じられないが、なんとなく浮きうきとした情緒があるので捨て難い。

忘れてはいないが借りたまま五年　（十九平）

すぐにも返すように云って借りるのが金である。その時にはたしかに、そう思って借りたのであるが、そうすぐに返済出来ないのも金である。月日はグングン流れるが、金の方は返えせそうにもない。別に返えすのを忘れているわけではないが、借りたままで、もう五年になる。金なんか借りるものではないと今頃になって気がついても、もう遅い。返えすものを返さねば、何んとなくユウウツである。斯うした心境をとらえたのがこの句である。

あきまへんやろかと借金気が弱し　（淡　舟）

この句の借金が、大金でないことは云うまでもなかろう。相手方はソレと察して、ポツポツ予防線を張っていることも想像に難くない。漸くにして切り出したところ、

「こっちが借りたい位だ」

とニべもなくことわられた。

「あきまへんやろか」

と、上眼ずかいですがりつく。「お気の毒だが……」

と云ったきりである。

善人であつた証拠の借りが出る　（牛　耕）

頼まれたら、イヤと云えない性格だったのか、借りてまで貸してやると云う人の好さがあったのである。さて一生の幕を閉じた時には人のために借りた借金がその人の好さを証拠立てたと云うのである。こんな人間が、うっかりすると、選挙の世話をして選挙違反にかかるのである。人間ははじめから悪人ではない。

家出して来た妹へ借りが出来　（虹　要）

早くから都会へ出ている兄夫婦を頼って、妹が家出して来た。しかし、頼られている兄の都会での生活は決してラクではない。僅かばかりの妹の小遣をちょいちょい立替えさせることを詠んだもの、曽ては兄も都会にあこがれて家出して来たことが想像されるが、都会生活と云うものがそう甘いものではないことをうなずかせられる句である。

光陰遅々として月賦はまだすまず　（多久志）

「光陰遅々として」と大げさな云い方をしているが、それが月賦に対して云っているところにユーモラスを感ずる。

光陰矢の如しと云う成句があるが、それは速い

のと、行ったら戻らぬのを云ったものであるが、月賦の場合にはいつまでもいつまでも月賦を取立てに来るようで、なかなか月日が経たない。そこで光陰遅々として詠んだのである。

くじ一枚で投資したよな気にもなり　（月　都）

いつかは当るかも知れない――と云う、はかないのぞみをいだいて、毎月毎月一枚ずつ、くじを買っていると、投資しているような気がして来たと云うのである。なるほど、そんな気がするであろうとうなずけるところに、この句の面白さがある。

鼻糞の株で見ている相場欄　（草　右）

僅かばかしの株をもっていても、夕刊を眺めて上ったの下ったのと云ってる人種はかなり居るものである。

上ったからと云って売ろうともしない。売ったところで家が建つ訳でもない端した金。儲かった、損をしたと云うスリルだけはそれでも味わっているのである。この句「鼻糞の」の措字がよく利いている。

株少し持って哀れや気が小さし　（矢寸志）

僅かな株を持って、夕刊にかじりついている人種を嘲笑した句である。少し変動があっても、川釣に浮きがピクピク動いたほどに感じて大騒ぎするのを見て憫笑したのである。世の中には株で儲

けたいと云う人間がかなりウヨウヨしているが、大ていは僅かな株を持ってビクビクしているのである。皮肉られても返えす言葉はないであろう。

課長いくらだしたと幹事また聞かれ　（谷　水）

慶弔のつなぎか、慰安会のつなぎかであろう。例によって幹事がやって来ると、
「課長はいくら出した？コレか、ソレともコレか」
と指を出して訊く。
「コレだ」
と幹事も指で答える。
「タッタ、それだけか。」
と、ケチだなァという顔をする。

こんな問答の繰り返えされる情景をうまくキャッチしている。
下五の「また聞かれ」の「また」がよく利いている。

やっと借れたのに嬉しさがグッと来ず　（多久志）

事業資金らしい。銀行へ泣きついて、やっと借れたので、ホッとしたことはしたが、あんなに走り廻ったり、苦慮したりした割に、嬉れしさがこみあげて来なかったというのである。事業家心理を巧みに描出した句だ。

金使こた程に売名出来ていず　（庸　佑）

金が出来ると名が欲しくなる。そこで金を使って売名をする。しかし、金を使った割には名が売れない。変な連中に担がれて、仕事らしい仕事はせずに肩書ばかりふえるからである。

選挙があると立候補させられる。これも金を撒いた割には票がは入らない。と云った実質のともなわない売名家を諷した句として面白い。

買いました下りました五百株株主

（妄　夢）

粒々辛苦で貯めた金、株でも買っておいたらと買ったところが、値下りだ。

「だから株なんか買ったってダメよと云ったじゃないの」

と細君から皮肉られて渋面をつくっているのが目に見えるようだ。

格調がきびきびしていて五百株の小株主の驚いたさまが躍如としている。

趣味

直された癖で謡っている謡　（梅　志）

なんでも聴く人が聴いたら判るし、観る人が観たら判るものである。そうした真理をこの句から知ることが出来よう。先生はよい先生を選ぶことである。

記念碑を拝借彼女寫しとき　（ひか平）

なるほど、そんなこともあろうと思わされる句である。

「そこへ一寸立ってて」
「もういいの？」
「イヤ、もう一枚」

と云ってる声が聞こえて来そうな句である。この句からは若さというものを感じさせられる。

お父さん僕の足だけ寫しなや　（東　岸）

ネコも杓子もカメラを持つ世の中で、芸術が何んであるかも判らないお父さんがカメラを持つ一人となり、先ず被写体に子どもを選んだのである。

「写してやるから、そこへ立っとれ」
と云うと、
「お父さん、足だけ写しなや」
と、こどもから、からかわれたのである。
「足だけ写しなや」
に自然にユーモア味がにじみ出ている。

こけし皆目鼻の位置がチト變り

（初甫）

あのおどけたような、眼をくりくりさせている、あどけない顔のこけしの眼や鼻の位置が、それぞれ少しずつ変っていることは誰もが発見するが、それを斬う巧みにキャッチして見せた手腕は敬服に価する。

書道展竜かみみずかはたシミか

（花村）

この句は近頃の書道展を観ての感想であるが、従来の書道の概念からは斬うした皮肉が生れないわけにはいかぬのである。

お尻へ墨を塗って、床や紙の上へ、尻もちをつくような肉体派の書もあると聞くから、竜かみみずかシミか判らぬようなのは、まだまだいい方なのであろう。芸術の奥なんていうものははかり知れぬものだと云っておこう。

手習

ハンマーより筆の輕さに肩がこり

（三歩）

労基法がどうの斬うのと一人前の口は利けても、手紙一つ書けない金釘流ではと、たまたまの休みに手習をしたのである。ところが、ハンマーよりも軽い筆なのに、肩が凝ったので、つくづく嘆じたのである。ハンマーと筆の比較で、人物なり心境なりを巧みに表現したところにこの句のよさがある。

草月流ほんとの花が見たくなり　（多久志）

草月流の生花と云えば、よくよく木切れや針金やガラスのかけらが、アタマにしみ込んだものと見え、「ほんとの花が見たくなり」と草月流の生花をする人の中にもこの句のような人も出て来るであろうと皮肉を飛ばしているのである。家元から芸術の何んたるかを解しないと云って叱られるかも知れないが、確かにコレも一つの観方であるから草月流も他山の石として反省する必要があるのではなかろうか。

順番に足袋の白さのにじり口　（きさ子）

茶室のにじり口から這入る女の姿の特に足袋の白さが際立って目立ったのを印象的に描写した句であるが、作者の繊細な神経にしてはじめてとらえることが出来た句だと云えよう。私としてはにじり口を詠んだ句にはじめて接したので非常に興趣を覚えた。

よし来たと博士が踊る奴さん　（豆　秋）

集会が済んで宴席にうつった。宴たけなわになって、かくし芸の指名がはじまる。博士さんに白羽の矢が立つ。

「よし来た」

とばかりに博士さんが気軽に立って、奴さんを踊ったと云うのである。平素の気難しい博士と宴席

のさばけた態度の博士の対照に興味を持ったのである。同じ博士でも医博には多芸多能の人が多い。奴さんぐらいを踊ったからと云って多芸多能とは云えぬが、奴さんを気軽に踊ったさばけた態度が医博を思わせる。芸の巧さは問題ではない。

名人の踊扇子が槍に見え

（七面山）

黒田節を詠んだのであろう。名人芸と云うものは、扇子が槍に見えるだけではない。あらゆるものを生かす力を持つところに名人の名人たる所以があるのである。この句は単なる名人技の写生句であるが、句における語彙の技巧は扇子が槍に見える以上のものであることを知らねばならない。

御亭主の儲け誇示した舞ざらえ

（修　三）

舞ざらえというものは莫迦々々しく費用のかかるものである。デカデカした衣裳にウンとかかるだけでなく、御祝儀が予想外に要るのである。そこへ虚栄心も手伝うので、一寸やそっとの収入では舞台を踏む訳には行かない。勢い御亭主はどんな働らき手かと思わせるほど派手に振るまうものである。

わたくしの趣味は仕事と大きく出

（静　馬）

仕事は仕事、趣味は趣味とハッキリ区別している人がいる。どれが趣味やら仕事やらハッキリし

ない人もいる。仕事はしているのか、していないのか判らぬが、趣味なら、碁から釣から踊と何んでも来いの人もいる。

ところが、政治家や実業家で、何一つ趣味を持たない人がいる。こんな人に、

「あなたのご趣味は？」

と訊いたところが、

「わたしの趣味は仕事ですよ」

と大きく出たと云うのである。そんな人間に限って女色に耽っているようであると作者は思ったのであろう。

たまに見た映画はキッスばかりして　（湖山）

映画を見たからと云って別に腹の足しになるわけでもないが、永い間見ないので、フト見る気になった。ところがキッスばかりする映画だったのでウンザリしたというのである。たしかにそんなことを経験する人が多かろうと思う。軽い穿ちの句である。

眼が覚めりゃ丁度映画は済んだ処　（花村）

一パイ機嫌で映画をのぞく。キッスシーンを見ても大して興味が湧かない。まして連れて行ってと云われて来た女の手を握るほどに若くもない。そこでついウトウトとする。ハッと眼が覚めたら、終と云う字幕が映っていたと云うのである。

泥沼へ斬られて転ぶ役がつき　（丁路）

スターだけで映画が出来上る訳ではないが、その他大勢にしても、いい役もあればわるい役もある。この句はロケーションで、泥沼に斬られて転ぶだけの役がついたのであるが、それでも映画俳優としての誇りを持っていることは想像に難くない。

ロカビリー新興宗教よりさわぎ

（雄　々）

踊る宗教のように、新興宗教というと、なんとなく騒がしいものが多いが、近頃流行のロカビリーというものは、新興宗教よりも、もっと騒がしくて、一般人から見るとまるで気狂い沙汰としかうけとられぬと言ったのである。そういう観方も一つの観方には違いない。

黒帯の猛者も口説きの手を知らず

（一　念）

黒帯と云えば柔道で初段以上の者が締めることになっている。その黒帯の猛者が敵を降すのには色々の術を知っている筈であるが、惚れた女を口説く手ばかりはどうしていいか判らないということを詠んだものである。

始球式ヒョロヒョロヒョロと知事の腰

（麦太楼）

白髪童顔の知事が野球場へ引っ張り出されて始球をやる。この日、天気晴朗、空には飛行機が乱舞し、地上には西瓜をならべたように人人人で一パイである。そこへ知事のヘッピリ腰での始球は

本人が真面目くさっているだけにユーモアそのものだと思う。

フラフープの周りを雪も付いて舞い

（甦　光）

最近に流行したこどもも大人も楽しんだおもちゃのフラフープを詠んだ句はかなりあるが、斯の句のように感じを巧く出したのは少ないと思う。「雪も付いて舞い」が情景を生々とさせている。

旅・仏・神

僕の旅地方新聞にものらず

（宏　方）

平凡な生活、平穏な生活のよさに安住し得ないのが凡人の常かも知れない。生活に不自由はしないが、まだどっかに、名誉欲と云ったものが欲しいのである。旅をしても、地方紙からインタービュー一つされないのが物足らないのである。きらくでのんきで、ほんとうに旅が楽しめるのに、それでいて一沫のさびしさを感じずにいられない凡人の心なのであろう。

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来

（栞　）

ゆったりとした旅の一コマを巧みに描写した句である。宿の裏に小川でもあるのであろう。

この句から海の碧さを想像出来ない。小蟹がこの句のヤマである。

見送りの時間をきいて遂に来ず

（栞　）

この句の場合人物は不明である。それは人物を問題としていないからである。見送りの時間は聞いたが、はじめから見送るつもりで時間を聞いたのではない。それは一つの挨拶にすぎないのであった。こちらも見送ってくれることに少しも期待を持っていないのである。都会生活をしているとこうしたことによくぶっつかる。そこをうまくキャッチしたのがこの句だ。

聊はどれもはげてる一等車

（侃流洞）

一等に乗るほどの人、それが政治家であろうと実業家であろうと、大なり小なり、世の荒波に揉まれて来た人達だけに、ヨーモトニックの厄介にならぬ人はいないと睨んだのである。この句は一読すると表現上どの一等車も色が剝げてると言うようにうけとられそうであるが、この句の場合一等車に乗っている人の誰もが頭髪が禿げているという意味であることは言うまでもない。川柳ではこの種の省略が往々にして行われている。

陽炎へ貨車を放して晝にする

（侃流洞）

駅の構内である。春の陽射しがポカポカと暖かい。陽炎がたっている。貨車を切り放して押しやる。ゴロゴロと貨車だけが鉄路をすべってゆく「どりゃ、昼にしようか」と駅員は大きな弁当箱を開いたのである。まことにのんびりとした情景だ。こうした写生句は全く絵であり詩である。

平和と見たり夜汽車の下の町

（緑之助）

山裾を夜汽車で過ぎる。下の町には宝石をちりばめたように燈火がキラキラと光る。その割に町は静かだ。それをそれぞれの営みを終えた平和な静かさと見たというのだ。西部戦線異状なしの口か。巧みな叙景川柳である。

汽車の戸はガチャンと締めるものらしく　（無　鬼）

ガラガラッ、ガラガラッと汽車の通路の戸を明けては行くが、明けっぱなしの人が多い。これ位、なんでもないこと柄を軽く穿っている句は稀れである。川柳は何処にでも落ちていると言う感を深くさせられる。

邪教か知らんがバスの客が増え　（万　古）

いいものが必ずしも人気がある訳ではない。人気があるから必ずいいものだとは限らない。だが、しかしと言いたい。あの神さまが近々二、三十年間の発展ぶりには驚かない訳にはいかない。駅前から社頭までバスがズラリとならぶ。すべてが信者であるか、どうかは別としてワンサワンサと詰めかけるバスの乗客は物凄い。何んだか考えさせられるではないかというのである。

大阪だ月賦のラジオが鳴り出した　（清　潮）

朝っぱらからジャンジャンラジオが鳴り出すのも大阪である。五球のスーパーですと言う、そのラジオも、その実月賦の品で、まだ半分も払えていないのである。「アラわたしとこのラジオも月賦なの」とも何とも言わないが、流石に大阪、向い三軒両隣りから鳴り出すのである。

我れは山の子大阪からリュック　（永　断）

大阪駅から各地の山を目指してサッソウと発って行くリュックの姿は青少年の羨望の的に違いない。「我れは山の子」と言い切れる山の魅力は大したものである。

又かいなと大阪城を案内し　（多久志）

次々と郷里から人が来る。見物となると先ず大阪城を案内することになる。コンクリートの天主閣から、大阪の街を見降ろすと、大ていのところは見たような気になれるからである。この句、又かいながよく利いている。

大阪は惡の榮える灯もともり　（一　瓢）

アルサロ、キャバレー、バーのネオンで渦巻く大阪。ここへ吸い込まれて来る限りの男たちは酔いどれ、使い込み、女の誘惑に身を持ちくずすのであるが、そうした男を相手に悪の華が栄えてゆくのである。そこを作者は「悪の栄える灯もともり」と観たのである。

裏街も水が流れて京に住む　（水　客）

観光都市京都の静かな生活を目のあたりに見るような句である。裏街に流れている清らかなこの水も、平安朝の昔から流れている水なのであろう。

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅　（薫風子）

熱海と言えば、新婚旅行に、アベックに一度は足の向くところだと言うのがこの句のテーマでなければならぬ。

改札の係は二枚ずつ二枚ずつ重ねてパンチを入れる。この句は熱海で結んだ嬉しい夢を抱いての帰路であることは言うまでもなかろう。

ソロバン川柳は理智が働らきすぎて詩情が稀薄である。

富士遠く橋の高さに及ばざる　（喜　由）

景色を詠んだ句としてなかなか面白いネライだ。

まるで東海道五十三次の広重の絵を見るような句だ。

「アレが富士ですよ」

指さされた方を見ると、ちっとも見えない。

「どこに？」と訊けば

「それ、あそこですよ」

と、遙かに遠い富士が橋の下方に見えていたのであった。

遠近法をねらったのがこの句のいのちである。

家族湯へ大阪からの電話です　（形　水）

大阪というところは、働らきもするが遊びもする。温泉と言う温泉が大阪人のお蔭で息をしているようにも思える。この句大阪人の発展をうまくキャッチしていると思う。家族湯に浸っていても、大阪から取引上の電話がかかって来るほどの

抜け目のない活躍振りである。

踏切はジンガジンガと夕焼ける　（水　客）

駅の近くのあわただしい踏切の情景を巧みにスケッチした句である。ジンガジンガという擬音が踏切の夕暮れのあわただしさと、車輛の通過を待つ間のいらだたしさをうまく表現していて、しかも、作者はそうしたあわただしさの中にいて、踏切の向うが夕焼けている美を見のがさなかったのである。

通る人なくとも遮断機の律義　（珠　笑）

誰れ一人通る人がいなくても、遮断機は雨が降ろうが、風が吹こうが、夜となく昼となく、列車が踏切を通過する時間の前後には必ず開閉するので、その正確さを眺め面白く感じて詠まれたのであろう。

律義という語が、この句の場合、遮断機を擬人化したので一層興味の深いものにしている。

バンガロー今宵は月が出ぬそうな　（水鏡子）

「今宵は月が出ぬそうな」は流行歌からの文句取りであるが「バンガロー」と上五を据えただけで二人の情熱を燃え上らせたところに、この句のいのちがある。引用句の多くは、そうした成語に引きずられて失敗し易いものであるがこの句のように殆んどが引用句で埋められていて句をなして

いるのは尠ない。

混亂の世へ電柱は手をつなぎ　（一　也）

ジッと電柱を見渡すと、電柱という電柱が一列に手をつないで一つの仕事を完遂していることに気づくであろう。人間はどうして手がつなげないのであろう。日本人同士が血を流さねばならぬ基地の存在も悲しいことに違いない。そこに住む人達のことを考えてやろうとはしないで、弱肉強食を敢えてする行動がいつになったら絶滅するのであろう。この句の諷刺をしみじみと味わって欲しい。

シグナルは青だそれ行け子澤山　（一　瓢）

都会の交通量は殖える一方である。少々馴れているものでも街を横切ると言うことは命がけである。

昔は本を読みながらでも歩けたものだが、近ごろではそうはいかない。ウッカリ考えごとでもしていようものなら、間違いなく自動車にハネ飛ばされてしまう。

誰かの句に「御堂筋スローモーション引っ込んだ」と言う句があるが、全くその通りで、スローモーションの人には御堂筋などは横切れるものではない。

ここにあげた句を読むと、子どもを四、五人も連れた母親の街を横切るさまが、髣髴として眼に浮んで来る。街路のスケッチであり、穿ちの句でもある。

眺望がよすぎ賽銭わすれられ

（花　村）

旅をした時の句であろう。山の中を幾曲りして絶頂の神社を訪ねた時、眼界が俄かに開らけ、眺望が素晴らしくよすぎたので肝心お詣りした神社へ背を向け、ただただ景色にみとれていて賽銭のことなどは忘れたというのである。その時の旅人の心境を巧みにつかんだ句だ。

住吉さん一ケ所だけへあげておき

（多久志）

住吉大社へ参詣して一ヵ所だけへ賽銭をあげたというので、何んの変哲もない報告川柳のようではあるが、決して報告川柳に終っていない。淡々と詠んではあるが一市井人の心の動きをアケスケに表わしているところが実に面白い。味読すると神社に対して世間並みに親しみは持っているが、清い信仰からの参詣でないことが、「住吉さん」という語と「一ヵ所だけへあげておき」という表現から類推することが出来るのである。関西人は「住吉さん」「戎っさん」と神社に対しても極く心やすい言葉で言い表わすが必ずしも深い信仰がある訳ではない。沢山な末社があっても、たいていは失敬しておくのである。この句、庶民心理を忌憚なく解剖しているのが面白い。

建仁寺

八百年の庭へボールが打込まれ

（草　石）

建仁寺垣で名のある京の建仁寺を詠んだ写生句である。八百年の歴史のある寺の庭も、時代が変ると野球のボ・ルが打ち込まれる。静寂であるべき古寺も時の力には抗することの出来ないことをこの句に描出したのである。一つの発見か。

神も佛もあるかと戦後から變り　（日　満）

肝心のところで神風も吹かずに国は破れた。お守り札も一こうきき目がなくて多くの戦友は白骨となった。そうした事実を眼のあたりに眺めたので、戦後は神も仏もあるものかという心境に変ったのである。奇蹟的に帰還した人たちで、こうした心境になっている人たちも尠くはなかろう。

折伏に来たとは知らずおいでやす　（晃）

新興宗教の創価学会の信徒が折伏（しゃくぶく）に来た。折伏というのは従来その家に伝わる宗教をやめさせるだけでなく、神具、仏具等一切の物を強制的に焼却せしめるというので世間から随分と怖れられているのに、折伏に来たとは知らぬものだから、あっさり「おいでやす」と迎え入れたというのである。知らぬが仏で、歓迎出来ぬ折伏へ、さも気やすく、「おいでやす」と言った下五のムジュンを面白く感じたのである。

掌へのる姉となり南無阿彌陀　（十　悟）

しんみりとした句である。この句一読すると、身うちがジーンとする。作者の実感を詠んだものであろう。迫真力の強さがそれを物語っている。掌へのる姉とは言うまでもなく、お骨になった姉と言う意味であるが、川柳語として垢抜けのした表現である。

お燈明消えたくるわの稲荷さま　（麦太楼）

売春はなやかなりし頃の遊廓のお稲荷さまには商売繁昌を祈願して或いは又思うお方と一日も早く添われることを祈ってのお燈明の絶え間がなかったのであるが、売春禁止で転業後のくるわのお稲荷さまへはお詣りする人の影さえなくなったことを詠んだもの、栄枯盛衰は人の身の上ばかりでないことを思わされたのである。

御無沙汰の間に石碑宿替し　（堰　子）

生活に忙しいので先祖のお墓詣りもせず、お寺へもスッカリ無沙汰をしているうちに、お寺が戦禍で焼けたり、都市計画で墓地の移転があったりしたので、いつの間にか石碑が宿替していたというのである。実に長い時間的な句である。

永久的なものと思っている石碑がいつの間にやら宿替したというところに微苦笑を催させる句である。

極樂で合えば過労で死にました　（梅　志）

誰も死んだら極楽へ行けるものと決めているのも面白い。極楽で会ったら、私は過労のために死にましたと、シャバでは人一倍に働いたことを言っているのである。人間というものは極楽へ行ってもも人間らしい見栄や自慢を捨てきれぬもののらしい。この句はきびしい今の世の現実を空想化して詠んだところに興趣の尽きぬもののがある。

動物・植物

そんなに見るなイと象いもを喰べ

（しげお）

象の食物は藁を何貫目とか、芋を何貫目とかいう喰べ方で喰べる単位が人間どもとは全くケタ違いである。流石にズウタイが大きいだけのことはある。人間にジロジロ見られるので、少しはテレたのであろう。「そんなに見るなイ」と言ったところの写生句である。尤もこれは作者の主観が、そう感じたのであることは言うまでもない。

見て貰う気をいつ頃か孔雀持ち

（水　客）

動物園の孔雀であろう。別に見て貰うために羽根をひろげている訳ではないが、羽根をひろげるとみんな珍らしそうに寄って来て眼をみはるので、いつのほどにか見て貰うために羽根をひろげるようになったというのである。これは作者の主観がそう感じたのである。人間にもそんなところがあるので、この句は諷刺句だと言える。

立話長うて犬も坐り換え

（薫風子）

立話を詠んだ句もいろいろあるが、これは又面白い観方の句である。

犬がキチンと坐って立話をしている飼主をジッと見上げているが、なかなか話が尽きそうもないので、とうとう坐り換えたというのである。

空もソロソロ曇って来そうだ。

境内のあひるでさえがアベックか（平休）

境内へ写真機を肩にして這入って来たのがアベック。極言すると近ごろの神社仏閣はカメラの対照でしかないようだ。アッ又アベックが来たが、それはアベックには違いないが、アヒルのアベックだったというのである。時代を諷したユーモラスな句である。

春の雪解けて流れて家鴨浮き（夜潮）

叙景川柳として秀れている。田園風景ののびのびとした詩情が感じられる。「解けて流れて家鴨浮き」の中七、下五のなだらかな措字が「春の雪」と巧みにマッチしている点を賞揚したい。

稲妻へ蛙ゆっくり向き直り（水客）

稲妻がピカリピカリと光る。その光りの中に浮き彫りにされた蛙が、ゆっくりとこちらへ向き直ったのを作者は面白く感じたのである。人間たちが、恐怖を感じる稲妻に平然として動じない蛙の姿に一種の驚きを感じたのである。

まだ雨が来そうに線路蟹が這う（ひさみ）

雲が低くおりている。一ト雨あって、線路の砂が洗い出されている。まだまだ雨が来そうだ。ふと眼をやると蟹が這うている。何んと言う静かな

情景であろう。作者の寂びしい気持ちがそうした情景にピタッと来たのである。叙景川柳として秀れている。

バケツとは知らない蟹のもがきよう

（暁　明）

ふとしたことで蟹が捕えられ、バケツに投げこまれた。バケツがどんなものであるかを知る筈もなかった。そこは視野が狭くてすぐ壁に突き当った。外へのがれようとしてものがれるすべがなかった。

海にあこがれ、自由を求めてもがき苦しんでいるさまを詠んだのであるが、これは蟹に限ったことではなく人間も亦こうした苦難を持つことを諷したのである。

教室の窓へ小使さんの猫

（不　二）

教室の窓へチョコナンと猫が座って日向ぼっこをしている。漱石の猫は塀伝いに、よくあちこちへ出かけて、いろんな観察を報告しているが、この猫は教室の窓へ来ていることを思うと、ひそかに教師の勤務評定をしているのかも知れない。

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

（薫風子）

檻の鶴を観てのスケッチの句である。こうして檻の中に閉じこめられてはどうしようもないという気持が、又してもかんねんの眼をジッと閉じるのである。この句作者が、自分の境遇に比較して

見て、檻の中の鶴に同情するというよりも、むしろ自分を憐れんだという諷刺の句と見るところにいのちがあると言えよう。

飛んでも飛んでも鴉夕日に追っつけず　（野　甫）

単に自然を詠んだというのでなく、何かを諷した句としてうけとれる。鴉は作者自身なのであろう。鴉が夕日を追うていると観ずるのも、作者の主観に外ならない。人生の果を思わされる静かな句である。

動物園みな就職をしてるなり　（山雨楼）

動物園の動物は入場料を稼いでいる。その意味から言えば、みんな就職をしていると言えるだろう。それなのに、自分は今、職を失っていると思うと、淋しい感情が身内を流れない訳に行かなかったのであるという句のウラを観ねばならない。

冬陽背に鰐一粍も動かざる　（七面山）

冬のにぶい陽を背にうけて鰐はピリ動きもしない。別に死んでる訳ではない。

動物園を訪れた人も、佇立したままジッと鰐を眺めて動こうともしない。鰐からうける淋びしさを嚙みしめているのであろう。

近づけば山羊はゆっくり道をあけ　（水　客）

田園風景のスケッチである。実感でなければ、こんなにも、静かな、ゆとりのある句は生まれるものではない。
作者の詩情の豊かさがおもわれる。

なめくじがモダンアートの線をかき
（どんたく）

なめくじが這い廻ったあとの、ギンギン光ってる線の美しさはモダンアーチストを佇立させるに充分であろう。なめくじは時にモダンアートそのものの線を描くからである。

巻物の様に秋刀魚を猫くわえ
（花　村）

写生句であろう。猫がサンマをくわえたところは、たしかに巻物をくわえたようで猫好きでなくても、なんだか、ほほえましい情景である。

勝手口猫が来犬が来鼠が来
（義　風）

勝手口風景をこういう角度から詠んだのは珍らしい。どことなく地方の素封家のゆったりとした勝手口を思わせられる。
この句は単なる猫や犬や鼠の写生句ではなく、勝手口から出入するいろんな人物を猫や犬や鼠に擬人化した諷刺句である。ジャック・ロンドンが野生の狼の生活を藉りて社会主義を諷したように、猫のような犬のような鼠のような人間の出入りを描出したところにこの句の面白さがある。

集団の威力蚕が音をたて　（満　秋）

蚕というものは蒼白い繊細な肉体を持っていて、一寸触っても潰ぶれそうであり、死んでいるのか、生きているのか判らないほどの静かさで棲息している。ところが、沢山なかいこが、桑の葉を食むとなると物凄い音を立てるので、作者はそこに集団の威力を感じとったのである。一つの発見である。

青草に寝転んで極楽だ極楽だ　（粗　彰）

青草に寝転んで春の大気を心ゆくまで呼吸しているさまを実に率直に大胆に詠んでいるではないか。

三月をオヽ雑草は忘れてず　（高　志）

三月ともなると、庭の雑草までが青々と芽を出すことを擬人法で巧みに描写した句である。この句などは全く表現技巧によって生かされた句である。

余っ程のずぼら仙人掌こりゃいいや　（不　二）

仙人掌（しゃぼてん）と言うものは、水をやらいでも、うっちゃらかしにしておいても結構生きているものだ。よっぽどのずぼら者が「こりゃいいや」と共鳴したのもムリはない。

銀行の担保の家の白椿

（三林坊）

銀行へ担保に這入っている家に白椿が咲いているというだけの句であるが、没落しかけている家の寂寥さが出ていいてしみじみとしたものを感じさせられる。

しかし、白椿はその家が銀行へ担保に這入って居ろうが、居るまいが、そんなことにはかかわりもなく清純な姿を見せているのである。

こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の

（梅　志）

朝顔はなんとなく儚ない感じのする花である。咲いたかと思うと、すぐにしぼんでしもう。この句からどっかに凡人の生を思わせられる。表現技巧の妙味がこの句を生かしている。

龍舌蘭眼を刺しそうなつれこみ屋

（梅　志）

通り筋から少し外ずれた街にあるつれこみ屋の状景をうまくつかんでいると思う。

「眼を刺しそうな」が、いかにもよく利いている。

温泉マークのザックパクな感じと違って、竜舌蘭による寂びのある刺激をねらったところにつれ込み屋と街の調和がとれており、このつれ込み屋の主人の人物までがうかがえる。

雜

車庫のためだけの車庫前停留所

（不　二）

車庫のあるところ、あまり人家は密集していない。車庫の事務所以外には全然用のないところでさえある。それでも、車庫で働く人たちだけが乗るための車庫前という停留所がある。一寸ゼイタクな感じがしないでもないので面白い。

順序不同とどん尻を慰める

（むじな）

俺が俺がの世の中で、あちらをたてればこちらがふくれる。こちらをたてればあちらがふくれる。そんな時に、順序不同として発表する便法がある。一番どん尻に自分の名前が掲げられても順序不同としてあるので、その四文字に慰められて辛抱するというのである。どん尻に自分の名前を並べられた人の心理を巧くつかんでいる。

手ぶらとはかくもたのしきものなるか

（村諷子）

何んでもない表現であるが、この句一読すると、何んとなく朗らかで愉快になる。いつも、なんかかんか持って歩いている人が、たまたま何一つ持たずに、ブラブラ歩いたとしたら、斯うした思いがするのに違いない。

じゃあ僕も云うがと敵意あらわなり

（一　瓢）

机を並べてのライバルと仮定してもいい。自分

のミスをようしゃなく、攻めるのでいささか弁解に窮したが、窮したままではおさまらない。そこで「じゃあ僕も言うが」となったのである。斯うなると二人の間の溝は大きくなるばかりである。ライバルの心理を巧みにつかんだ句である。

浪曲的人情論さと取りあわず　（あきら）

「あいつも心からの悪人ではありません。永いことわずろうた女房に死なれ、赤ん坊を抱えて、困った挙句なんです。決してだます気ではなかったのです。」

「だます気でなくても、結果がだましたことになってるのだ。サッサと立退いてもらいたい。あんたも、いくら友達でも、いつまでも、そんなことにかかわっている必要もないだろう。」

「それでは人情がかけます」

「そんな人情が浪曲的人情だよ。私の世界では通用しないからな。私は法の力ででも立退かして見せるよ」と言うようなところを詠んだもので、複雑な内容をうまくまとめている。浪曲的人情論と言う辞齣も歯切れがいい。

御援助の賜物ですをもう忘れ　（万　古）

この句を読むと微笑を禁じ得ない。いろいろと世話を焼かせて、どうにか一人歩きが出来るようになり、これも「御援助の賜物です」などと言っていたのに、今では、あと足で砂をかけているのを見て詠んだのであろう。皮肉な穿ち句である。

恩愛にそむく反旗ははためかず

（潮　花）

若さにムリはつきものである。長年、自分をはぐくみ育ててくれた人に、反旗をひるがえしたところが、そうした旗は決してはためくものではないということを詠んだのである。世間にそんな男がちょいちょいあらわれるが、いつの日にかは旗をまいて姿を消すことを思わされて淋びしい句である。

それも一理と云ったのが気に障り

（　晃　）

サシではかったように、これは斯うだと、さかんにまくしたてる人がいる。

ところが、その説を静かに聴いていたのが、「それも一理はありますが、斯ういう観方もあると思いますが」と言ったので、とうとう喋っていた相手方の御機嫌を損じたと言うのである。皮肉な句である。

生きてゆくための四三の手を案じ

（没食子）

この句の場合、人生をホントに生きてゆくと言う意味よりも、どうにか生活してゆくと言う意味らしいが、そのどうにか食ってゆくのにも今の世はそうラクではないのである。そこで四三の手を考えると詠んだのである。五目ならべは四三の手でなければ勝てないのであるが、生活をしてゆくのにも、生活にきっと可能な四三の手を考えると

言うのである。

定刻に行けば反対派ばかり　（宗太郎）

いろいろな会合に出る人達にとってはこうした場面にぶっつかることは往々にしてあることである。反対派の連中が、呵々大笑したり、ごうぜんと語り合ったりしている隅に、ひとり淋みしく週刊誌などを見ている姿を思わせられる句である。

平凡の凡をこつこつ歩かんか　（緑之助）

人生行路はそうラクではない。雨もあり、風もある。社会に揉まれて、悪戦苦闘が続いた人であろう。遂に平凡の凡の生活を思うようになったのである。

急がば廻われで、あせらずにコツコツと歩くことを悟ったのである。その道も亦ラクでないかも知れないが……。

本心を出しそびれたで助かった　（古　方）

気の弱い人間の心の動きをうまく詠んでいる。うっかり本心をブチまけていたら、今ごろはすべてがブチ毀しだったことを思うと、肌に寒さを覚えたと言うのである。これだけではどんな内容か判らないが、心の働らきの一断面を切りとって見せた手際を面白く感じさせられた。

頼りにしてまっせと冗談めかしとき　（水　客）

織田作之助の「夫婦善哉」も、森繁久弥や淡島千景の映画化でウンと人気をもりあげ「頼りにしてまっせ」の親しみある大阪弁が、ピーンとお互いの胸に響いたので「頼りにしてまっせ」という言葉が流行語となったので、この句の場合は夫婦善哉を詠んだのでなく、自分の愛人にこの流行語を冗談のように言った女の心のうごきを詠んだものである。なかなか芸のこまかいところに味があると思う。

惡例になると犠牲を一人出し

（祐　助）

こんなこと位で辞めさせるのは怪しからんというのはそちらの考え方で、こちらとしては、あいつの時には問題にされなかったのに、私の場合には何故辞めさされねばならないのかという人が出て来ないとも限らないのである。気の毒だが、辞めさせるより手がないのでギセイを一人出したという穿ちの句である。

二丁目に住んで一丁目も知らず

（梅　志）

二丁目に住んでいて、一丁目も知らんどころか、都会生活のあわただしさは、隣りにどんな人が住んでいるのかさえも知らないのである。

考えれば馬鹿々々しい話であるが、それでいて結構自分自分の殻を護って生きているというのである。何んの変哲もない表現であるが都会人の人生がのぞいていて面白い。

断ると言って表彰待って居り

（養痴園）

文化勲章だ何んとか勲章だと、近ごろは勲章ばやりである。金がやれないから、勲章でごまかしているのだと聞かされたら味もそっけもない話だが、それでも勲章一つで老人の顔の皺がのびることを思うと、ありがたいものに違いなかろう。

「イヤ、今更勲章でもないよ、やると言ったら、断わるよ」と言うが、その実、「何んとか言って来そうなものだ。俺より後輩の誰れそれクンにさえ言って来てるんだからなァ」と心中おだやかでないのである。

空壜を大事がる癖まだぬけず

（藤　波）

戦争で物資が不足した時代には空壜を持って行かねば売って呉れなかった。それで空壜を非常に大事にしたものである。戦後もう十幾年にもなり、今では空壜がなくても買えるようになったが、それでもまだ空壜を大事がる癖が抜けないというのである。たしかにそんなところがある。軽い穿ち句だと言えよう。

べんちゃらやないでと念を押してほめ

（日　満）

ほめるということはむずかしいことである。むやみにほめるとべんちゃらにうけ取られる。この句はほめているうちに、自分でもべんちゃらと気づくほどにほめているので気がとがめたのであろう。しかし、そこには幾らかべんちゃらが含まれ

ていることも想像にかたくない。

生れ變りますと便利なことをいう　（晃）

悪事をした場合に、その悪事を認めて、

「すみません」

と云ってあやまる。

「今後、こんなことをしなければ、ゆるしてやるが……」

「決していたしません」

「きっとか」

「へい。生れ変ります」

と云うのである。そんなにうまく生れ変れるものとは思えないがと云うのがこの句の真意である。

働きもせずに社会の罪にする　（一鶴）

食うだけ呉れないから働けないのだと云って、ブラブラ遊んでいる。「それではなお更食えないことになるのではないか」と云えば「そうだ。だから詐欺でも、押し売りでもなんでもすることにしている」「それは正当な生き方ではない」「知り過ぎるほど知ってるよ。しかしそうしなければ生きられないのだ。それが悪事だとすれば、それは私が悪るいのではない。働きたくても働けないのは社会の罪だよ」

作者がこの論法を是認してはいないところに、この句が生れたのである。

次々と阿呆ばかりの来る日なり　（晃）

どんな阿呆が来るのか判らぬが、なるほどそんな気がする日である。自分もその阿呆の一人であることは云うまでもないのである。そんな日が続くことが、その人にとっては意外に幸福なのかも知れない。こんな句は句のウラに味があるので噛みしめて見ぬと味は出て来ない。

寒けたつものに机のわが入歯　（偃子）

机の上に、自分の入歯が置かれてある。自分のからだの一部には違いないが、見れば見るほど変な感じがして寒けがするというのである。

この句、感じの句であるが感じよりも穿ち味の方がより強くひびく。

禿げるのは痛くないのが取柄なり　（麦太楼）

詩美は感じられぬが、ユーモラスな句である。いつも帽子を放さぬのもそれがためである。写真を撮すとなると、ワザワザ帽子を被むるのもそれがためである。

痛くないのが取柄であると達観はして見ても金語楼の親類のようには思われたくないのである。

―寝る前に、注射すれば朝眼が覚めたら黒髪ふさふさ―と云う薬でも売出さんものかと云うのが、禿げた人達の世界共通の念願に違いない。禿げてる人は善人だよと自分に云い聞かした位で

満足出来るものではない。

禿げててもコソコソエロのコレクション

（没食子）

老いてますます旺んという言葉もある。いくら禿げてても、この道ばかりは別だという好色家もいる。「禿げてても」の上五の措字の妙味、「コソコソ」が含むユウモラスな味は作者の老練さをあらわしている。

今度こそひょっと効くかと加美の素

（文　秋）

若いのに禿げてる人もいるが、いつまでも黒髪がふさふさしている筈のものではない。いつのほどにか薄くなるし、ひたいのあたりから禿げて来て急にあわてている人もいる。額と頭の境界線がハッキリしないのですくなからず悲観している人もいる。毛生液の広告が目に入ると、効かぬと知っても一度は買うて見るのも斯うした人達である。この句も、そんなところをねらったのである。近ごろ加美の素がさかんに広告しているのでこんな句が生れたのであろう。人間の弱さを巧みに描出している。

禿げかけていますと生徒ズバリ云い

（萊　春）

近ごろの生徒は、先生をまるで友達扱いにする。

「先生はN先生が好きですか」

「そうだなア、嫌らいではないなア」

「先生がいくら好かれても、僕はダメだと思うな」
「どうしてそんなことが判る？」
「だって先生はもう禿げかけていますからね」
とズバリとしたことを云う。
「そうかも知れん」と先生の方が黙り込んでしもうというところか。

信心をせよと手ぶらの見舞が来　（幽　王）

病気で長く床についていると、それにつけ込むと云う訳でもあるまいが、いろんな新興宗教の手が伸びるものである。近ごろは何ヵ月の間に癒してやるから信心せよと云う新興宗教もある。そして癒らぬ時には信心が足らぬとか、前の宗教に関するものが家の中に残っているからそれを全部焼き払わねば癒らぬと、家探しをしたりする宗教もあると聞いている。この作者も、そうした新興宗教になやまされた一人かも知れない。それを手ぶらの見舞と軽く揶揄したものであろう。

ながびくと思てか見舞おちついて　（望　峯）

みんな手から口への生活をしているので忙しいのである。悪いと聞いたが、なかなか見舞に行く日がない。入院と聞いたが、まだ見舞に行く日がない。行かねば義理がわるいが、長びくらしいのでなかなか尻をあげかねているのである。そこを「見舞おちついて」と一寸皮肉に詠んだのである。

看護婦につかませといてやと病人気を使い

（幽　王）

いつの世にも贈賄は絶えない。大きな汚職問題に対してはどんな理由があろうともゆるせないが、ものによってはみのがしてやってもいいのではないかと思う。それは看護婦への心づけである。これも一つの汚職だとは云えるが、そこまで追求する必要はあるまい。多少の心づけは病院によっては公然の秘密なので病人までがその点に気を使うのである。この句は「気を使い」の文字は調子の点から云って無い方がいいと思う。

胸病めば科もつ如く人をさけ

（七面山）

胸を病むと一応は同情されるが、伝染をおそれてなるべく近寄らないようにされるので、つい人を避けるようになるものである。それが罪でも侵した人のように思えるというのである。病人心理を詠んだ淋しい句である。

大病の自慢をしかねないその後

（竹　二）

病で痩せ衰えていたが、その後見違えるほどの健康体になった。

「大病をされたようにも見えませんネ」

「そうですとも、いかな大病も私の精神と摂生にはかないませんよ。このからだを見てください」

「病いぬけされたのでしょう」

「そうです、そうです。人間は時に大病にかかる

 こともよいことですネ。大病は一つの休養であり、その人の人生を更改しますからネ。」

聞いていると大病を自慢しかねないようだと云うのである。

病人の心理をグッとつかんでいて面白い。

人間になったと思や薬壜

（○　丸）

働らき抜いて、地位も出来、少しは金も出来てヤレヤレと思う途端に、病魔に襲われたのである。それが人の世の現実で誰もが同じような道を辿るものだと悟ってしまえばそれまでであるが、悟りきれないところに人間のなやみは尽きないのである。

石の床オカズは鼻で知っていた

（甲　馬）

病院の一室であろう。うごきのとれないギブス患者の心境をこの句は巧みにとらえていると思う。ジッと寝ていれば、そこには食慾の現実があるばかりだ。そしてきょうのオカズは何かと云うことが大問題なのである。斯うした患者の常として嗅覚が異常に発達する。附添婦の説明を聞くまでもなく、今日のオカズは鼻が知っているのである。それは患者自身にとっては何んでもないことに違いない。それだけに、私たちはこれを悲劇として取扱いたい。そこを作者はキャッチしたのである。

順々に上着をまわし焼香す

（草　右）

告別式で焼香という悲しくも緊張した場面に、順々に上着をまわして焼香したのである。云うまでもなく夏のことで、上着なしで出勤していた連中が、告別式に臨み、たまたま上着を着込んでいた人の上着を順々に借って焼香を済ましたので、誰一人吹き出す人もなかったが、静かにその情景に想到するとなかなかにユーモラスである。斯うした笑えない滑稽をキャッチしたところにこの句の面白さがある。

どの黨も貧しき人に味方せず

（冬　二）

共産党のトラック部隊に限らず、どの党も、貧しい人たちのために全面的に味方でないような気がする。社会党にしても一部の人たちのためには動くが必ずしも貧しい人達の味方ではない。自民党は云うまでもなかろう。政治の貧弱さが叫ばれる所以である。ではどうしたらいいのであろうか。人世の淋びしさをしみじみと思わせられる。

ローソクの消え止む如く肺で逝き

（七面山）

比喩法の句であるが、肺で死んだ人を「ローソクの消え止む如く」と冷やかに評したところ凄愴な感じがする。この種の句は感傷的になりやすいが、この句にはそれがない。死というものを、ローソクの灯が自然に細く小さくなって消えてゆく

姿として見たのである。

轢死には虚空を摑む暇もなし　（夜　潮）

轢死があったと聞いただけでも暗らい感じがするのに轢れた人が死の断末魔に虚空を摑む暇もないというようなことを想像する作者のとぎすました神経の冷ややかさが思わされる。

それでいて、この句を読むと悲劇のユーモアといった劇的な感じがあるので、事象としての暗さが消えている。

新聞が補筆したよな遺族の辞　（法泉子）

「主人も満足でしょう」とか、「この子どもたちを立派に育ててゆくのが、これからのわたしのつとめです」とか、何とか、かとか、未亡人の言葉が型の如く報道されている。悲しい出来事の中ででも常に遺族として、寸分の隙もない言葉が綴られているので、たぶん記者の補筆したものであろうとにらんだのである。補筆どころか、記者の作文の場合も多いのである。

スムースにやったと葬儀委員長　（一　瓢）

厳粛な告別式が滞りなく終ったのを見て、

「大変でしたでしょう」

とねぎらいの言葉をかけたら

「スムースにやったよ」

と、いかにも、こんなことには馴れているよと云

わんばかりに事務的に答えられたので、スムースという言葉にユーモアを感じたのである。

俗名をとどめて薬瓶しずか

（不　二）

薬石効なくという訳である。まだそこには薬瓶がしずかに卓の上に残っている。しかも薬瓶には在りし日を物語るかのように俗名が読まれるのである。

人生の終焉が、斯うした静かさで迫って来ることは堪え難い淋しさである。

ビジネスのように会葬すませて来

（文　月）

世の中で多少知られている人は今日は何んとか会社の社長の告別式がある。と三日にあげず会葬する。利害関係の濃淡はあっても別に悲しい訳ではない。俥を走らせて型の如くに葬儀場へゆき型の如くに焼香をすませて帰る。まあ、これですんだという程度であるのを「ビジネスのように」と観たのである。

盲人大会矢っ張り会旗うちふって

（栞　）

その昔、公会堂で盲人大会を見せてもらったことがあるが、議席にはその人の名札があって、議長何ン番と呼んで発言の許しをうけることは市会や府会と同様だったのに驚いたことがある。この句の「会旗うちふって」も眼明き同様の行動に作者が驚いたのであろう。停電の時に、さてさて眼明きは不自由なものと威張られても一言もない訳

である。特異な場面の写生句として興味が深い。

嘘ついて帰れば嘘が届いてた

（花代子）

大して嘘をつかなくてもよいことでも嘘をつく人間がいるものだ。悪質な嘘は別として、嘘をつく習性の人間は、何んの気なしにヒョイと嘘をつくものらしい。この句は嘘をついて帰ったところが、その嘘がもう届いていたと云うのであるから大した嘘ではないらしい。嘘がバレても平気でいるような感じがこの句からうけとれるからである。なかなか面白いネライの句である。

菜の花の中の工場は閉めてあり

（ 桒 ）

ところは場末か、郊外であろう。田圃の中にポツンと工場が建っている。工場の周囲は菜の花の真ッ盛りで、いかにも春らしくのんびりとした平和な風景であるが工場の煙突からは煙りも出ていない。工場の門は閉ざされたままで人影さえもささないことを思えば、そこには平和どころか中小工業の惨めさが眼に迫って来るのである。穏やかな表現で、しかも鋭どい観察がこの句のいのちである。

立呑みでソースのついた名刺くれ

（豆 秋）

庶民的な立呑みで、呑むほどにだんだん口が軽くなる。

ツイ隣りの男とも口を利く。

コイッ話せるなァと思うとソロソロ名刺の交換がはじまる。

それは平凡な情景に過ぎないが、この句のヤマは中・七の「ソースのついた」である。もう既にだいぶまわっていることがうかがえて面白い。

歳は歳だけの素顔となり寂し　（没食子）

鏡の中の自分の素顔をつくづくと眺める。いつのほどにかヒフがたるんで若さが消えている。年は争えぬと思う。「寂し」の語、軽く扱ってはあるが多少説明的である。

姓名学正田美智子の名も並び　（文　秋）

市場附近などでよく姓名学を説いている男にぶっつかるが、それには天下に名をなした人たちや、その附近で新聞種になった人たちの名を並べ姓名によって、その人の運勢が左右されるものであるから、悪い姓名を持っている人たちには名を変えてあげよう、これから生まれる赤ちゃんには名をつけてあげようと、人の弱みにつけこんだ商売をやっている。

その姓名学先生が、よい例のところへ早速皇太子妃に選ばれた正田美智子さんの名を並べたというのである。穿ち句として面白いと思う。

順番を並べかえさす花輪来る　（好　郎）

花輪にも親戚一同から贈られるものや、同業組

合や、首相やボスや、交際範囲によって各方面から贈られるものとがある。そこで世話役は花輪の並べ方に随分とアタマをなやますのである。必ずしも親疎関係にはよらないからである。この点をとらえた穿ち句として大いにうなずかせる。

影法師あるのを空巣わすれてた　（谷　水）

空巣が抜き足さし足でしのび寄ったが、壁に大きく自分の影法師が写っていることには気づかなかったというのである。時にはその影法師にギョッとしておびえることもあろう。この句はそういう人間の弱点を巧みに衝いている。

釜ヶ崎に住んで

今さっき出て来たんやと丸刈の　（晃　）

釜ヶ崎はスラム街である。ポリスもここでは威力がないと云われている。「今さっき出て来たんやと」は云うまでもなく、刑務所から出て来たのである。いつ散髪をしたのか判らない人たちにまじって丸刈りが光るのもそれがためである。観察はなかなかに鋭どい。

霧の街乞食も詩情ある如し　（晃　）

霧のたちこめた街を乞食が歩いている。何んとも云えない情緒が流れていて、それは一幅の画である。しかしながら画の中の乞食に詩情が湧いて、街の中を漫歩している訳ではない。作者も知悉しているので、「詩情ある如し」と結んでいるのである。

云うまでもなくその詩情は作者その人の詩情である。感じを詠んだ句として秀れている。

眞珠句抄

（附録）

腐るからこれも喰べとく肥りよう　梨里
辛うじて住む東京をうらやまれ　白星

中陰

亡き母の煙管を持てば詰り居り　鉄洲
煽風機の代りを妻がまだつとめ　没食子
名曲か知らねど夜業腹が立ち　無鬼
檀家から帰る尼僧は梅を持ち　稔一
草月流鋏だけでは手におえず　久子
だが　君　蜘蛛の努力も学ぶべし　粗影
金のない明治生れは放っとかれ　不水
春だそれッ記者は動物園へ飛び　野甫
ばいばいのとても上手な二号の子　珊枝郎

置き去りの米にポリスの非力なり　麦太楼

男臭い部屋ねと窓を開けられる　ひか平

酔っぱらって殴って欲しい時もあり　牛耕

大往生とは弟子達の作り事　弓削平

大工には素直に動く鋸であり　侃流洞

角帯のここも株式会社なり　巻雨

銀行の門燈やもりが来る暑さ　紫香

底にたまった牛乳（ちち）を勿体なしと見る　水客

ざあますで受けられ舌がもつれかけ　茶々

一周忌遠慮さしたい女が来　文蝶

悪銭が身につき板につく名士　沐天

新課長机の位置を変えただけ　竹青

ハテ誰の忘れものかと煽いでみ　梵鐘

税務署と言えばシャックリ止まったり　栞

吉田さん三振しても引っ込まず　豆秋

間違いなやと宿題母にさし　花村

肺活量負けずぎらいが二度も吹き　さぎす

宿題の此の辺迄は母も出来　牛歩

二階から冬をみているふところ手　夏六

タチツテト入歯はずせばダヂヅデド　恵二朗

新築へもう天皇の額かけず　文郷

不縹緻の方へ初めは親しくし　方大

虚子の名もしらない胸の議員章　正郎

先妻の子に学問が出来すぎる　玲人

葬儀の短かさ犬もついて行き　粗影
働いて取れと資本家折れ合わず　文蝶
子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち　生々庵
お祈りをする黒髪の長さかな　春巣
更年期内科外科歯科忙しい　満年
音のよいおなら乳呑む児も笑い　蕣花
天誅か税吏が酔って川に落ち　酔月
終電を気にして料理残して来　草右
腹が見えるよ柘榴かげんしな　朗笑
出しゃばりが燗のぬるさを云いにくる　牛歩
大空の下チョボチョボと人の住む　海棠
屈辱を耐えるこめかみ脈を打ち　妄夢

昼風呂へ切腹するように坐り込み　無聖

正直に談し借金ことわられ　快夢起

亭主もう黙って針を拾うなり　粂南

ハゲぐらい嫁きます別荘自家用車　史球

芝居ではあろうが家出ほっとけず　芳泉

すかしては注ぎすかしては注ぐ一人旅　孤浪

抓り合いして愛情を交換し　美秋

近道はようそうに父の老を知り　孤浪

ハウマッチ指四五本で答えたり　不二

みの虫のなんぼ匐うても壁だった　豆秋

道とえば嫁にもほしい教えよう　月都

税務署が居るのに電話またかかり　無骨

貧乏はいといいませんと云うたけど　艮子
未亡人読めない本を売りもせず　草々
いい仲と知らず間へ席をとり　竹荘
向う向く娘財布を明けており　柳堂
観世音甘えてみたい御姿　穂波子
一同の寸志汚ない紙幣ばかり　文庫
女なる悲しみおんな酌をする　梨里
我もその烏合の一人賛成す　翠光
最後まで予算がないで押すつもり　POE
泣いたのは他所の子針を持ち直し　糊月
日向水のような相手でくたびれる　茶々
足の裏猫といっしょに叱られる　五酔

着たままでボタンつけるもベタハーフ　満年
脊負い投げする様に母は子をおろし　草右
御免ねといって仲よし先に嫁き　花村
御祈祷をパーマの上にして貰い　ひかる
母と言う乏しき髪に油きれ　宵明
接吻をしてと子供はもう五つ　ひさみ
帰化しても唄は二上り三下り　草一郎
手作りの胡瓜はつむじ曲りなり　草右
奢られる弱き奴が好きといゝ　しげを
三等がよいとおふくろ困らせる　多久志
取るものは取って信仰足りません　芳泉
押入のついでに拭きたかった肺　山雨楼

三べんに区切ったあくび母も老け　幽王
水貰うだけに女の暇が要り　月仙
子沢山ニックネームで母も呼び　玉兎
水族館食気放れて見て通り　一瓢
舌を出す癖は娘のときのまま　水客
ヤットコショ云えば女中が笑いこけ　千容
素うどんへくったくのない子が並び　いさむ
名刺には社長あれあれ掃除もし　摩天郎
蓄めようとすれば花咲き鳥歌い　ただみ
故郷へも寄れと社長の暖かし　さぎす
悲しみを蛙ケロケロとしか鳴けず　野甫
素人のなすびは十一月もなり　春巣

もう踏まぬ故郷ぞ柿へ肥えをやる　自由朗
その上によその子までが来て遊び　日満子
二十五でもう税務吏は家を建て　香林
残業に酒が出るのとつねられる　四季無
われ老いぬ子故の詐欺に二度も遇い　表情
締めたろと見たら卵を生んでいた　尋四
オイ風邪をひくぜと男から折れる　伍健
気前よく腹の痛まぬビール抜く　梅里
もう少し寝ててと食事準備中　日満子
お父さんの様になるとはいじらしい　淡舟
床の上で散るとは花も知らなんだ　宏方
早よう去んで欲しい火鉢へ鏝をさし　照子

約束を破らす様な雨が降り　季贇
もの足りぬ夫事業の虫のよう　草一郎
手紙では届く本社が見当らず　井蛙
喋べり散して診断聴かず去に　方正
It is だけで世界を廻って来　法泉子
我が町の昼を知らない労働者　玲人
意見して帰れば妻に意見され　夜潮
金策の急がば廻れ碁に坐り　壽花
ばらばらの高級品で身を飾り　水客
泥棒の逃げた窓から首を出し　小松園
支那服を着て出る妻はまだ若し　美笑
まないたは白く乾いて妻の留守　呑水

女房もう先に寝るのも憚らず　鉄洲
エレベーター押し込められてお辞儀され　花村
見て見ないふりして同職見て通り　卯之助
惚れた弱み彼女の連れのまで払い　素身郎
五尺八寸二つに折った御挨拶　白水
鏡台を並べてみんな不倖せ　白星
父親は只居るだけの看護なり　淡舟
神経の太い妻なり戸も締めず　いわを
洗濯機今年も話だけで暮れ　文夫
停年も近くちぎった煙草喫う　澄泉
税吏来て猫にさかなを食われたり　摩天郎
療養所汽車から見ればいいところ　法泉子

恋人がいるのに嫁けへんか嫁けへんか　ひさみ

人間が真っ正直ですぐ怒り　水車

バンガローへ来ても女は洗濯し　竹荘

すゝき原園児が通る声がする　方大

急逝へ飲んだ思い出ばかりなり　春巣

職場大会鰯を食った息で来る　不水

マネキンと同じ柄だが見てくれず　井蛙

現実にかえって女米をとぎ　水客

喪服まで借りて来たのにもち直し　一三夫

峠茶屋一団去ったごみを掃き　緑雨

読みながら十代ジャズも聞いて居り　ハツ茶

力つきたように冬の日海へ落ち　一夫

女手の家で汚い硯箱　京一楼
前借で来た娘邪慳に父と会い　白星
御苦労なこっちゃとスキー見送られ　修
お喋りが来た来た来た話題さっと変え　一善
足らぬとこだけ奥さんが口を入れ　香林
窓あけて家主眺めも買わせる気　おかき
斜陽族さすが式辞の堂に入り　美秋

鳥取砂丘

はるかなる砂丘は独り歩くべし　八歩
水道の漏りもよう直さぬ亭主　春巣
ざあますに市場の口でとらえられ　千代美
席譲ってやったのに講談本を読み　香林

使い込みをさせた女はけろりとし　緑風子
若後家の喪服一番よく似合い　紫香
甘党は女の方の中に居り　美笑
好きと好きならばと母が先ず折れる　草一郎
矢印の通りに曲るモーニング　三司
二つ頼めば一つ忘れる附添婦　甲馬
楽天家のクラゲは磯に置き去られ　一瓢
大学へやれば酒呑む様になり　卜占
左手でよかったねえと怪我見舞　侃流洞
旅楽し前も隣も女性です　方大
あきまへんなどと芦屋へ居を構え　水堂
街録の妻の鼻息まできこえ　ひか平

お年玉貰えば子供去ぬといい　愛論
二号の眼に三号の自由奔放さ　谷水
飲むだけは飲みお土産はもぐさにし　博人
波の音海もなかなか音楽家　宏方
半生はゴムで消したいことばかり　野甫
代表におされて妻に叱られる　竹荘
麦秋の往来釣師に邪魔がられ　越鳥

哲多町生る

合併に山紫水明考えず　灯竿
手袋の脱ぎすてられしぶきみさよ　翩骨
皆寝かしても女には用があり　愛論
機関車も一人で走って見たかろう　豆秋

質屋を出れば今日は満月　野甫

ピース光新生目下パット党　千容

天人の様に愛人去ってゆき　秀敏

附添の診断正露丸をくれ　甲馬

予算ここまでと工事ほっとかれ　澄泉

下戸の酌マということを考えず　矢寸志

外套が左前だけ女也　孤浪

献盃の膝を正して順を待ち　井蛙

しなびても土筆袴はつけていた　一瓢

掃除婦も官庁と云う掃きっぷり　愛論

城崎にて

誰の着たどてらか余香拝すなり　白猫児

娘ばかりになればおい君なんだ君　牛耕
ぼうふらは皆蚊になれり失業苦　芳仙
その割に葬儀屋自宅から出さず　花村
スキーでもするさと左遷うそぶいた　谷水
はしゃいだあとの淋しさ妓にも　栞
子の作文それからそれからで綴られる　柳慶
石橋を叩いて恋に見放され　梨里
野球見るのに会社まででだまし　日満
流行医者エコノミストも読んでいる　春雄
もう一つ蚊取線香をたくへボ碁　方大
買収はされぬつもりの箸をとり　多久志
みおつくし大人が聞けばまだ十時　鬼酔

退職金の端数が飲め飲め飲めという　野甫
秋来ぬとさだかに見えてまだ裸　静観堂
これはまあと臥を笑わす綴り方　伍健
アプレだと見たかビールにさそてくれ　梨里
同窓会女優がいっち羨まれ　草一郎
入選のコントが仕事嫌いにし　文庫
基地話かるくいなしてパトロール　博
搾取される事に膝まで泥々だ　乱耽
痛いとこだらけ五十のスキーヤー　貴志子
年寄のライスカレーを汚ながり　規堂
仏陀より今なでている女の手　勝二
邪魔くさい返事をすればいい話　公二

餲悲しや胎児諸共食われたり　一瓢
をんなみたいねと女らはさげすみぬ　花情
背の子と一つ違いで歩かされ　ライト
受付はいと明瞭に恩を売り　杏三
親切な巡査は地理を知って居ず　雨眠
柔道の帯を風呂屋へしめてくる　光路
弱い者元利の外に何か添え　草明

新川柳鑑賞 索引

四季

長閑さよ……………………（二）
一年の計……………………（二）
お元日右も左も……………（二）
お元日ばかりは……………（二）
元日のどこかで……………（三）
丹前のまんま………………（三）
長女にも……………………（三）
仕切直しに…………………（四）
元日の小言…………………（四）
見なれたる…………………（四）
床飾りよして………………（五）
おとがいも…………………（五）
まな板の……………………（五）
松の内………………………（五）
賀状書く……………………（六）
年賀状女将の………………（六）
年賀状やった………………（六）
印刷でない…………………（七）
葉書一枚とも………………（七）
正月の………………………（七）
電停に………………………（八）
ぺんぺん草かて……………（八）
機関車の入替え……………（八）
朧月…………………………（九）
俄か雨………………………（九）
引返す………………………（九）
未亡人仲に…………………（九）
ステテコの…………………（一〇）
頂いた………………………（一〇）
月光に………………………（一〇）
読みもせぬくせに…………（一一）
接吻を………………………（一二）
秋だなと……………………（一二）
井戸水の……………………（一三）
にじりよる様に……………（一三）
十二月襖を…………………（一三）

恋・酒・果物

柔肌に………………………（一四）
ぼろくそに…………………（一四）
六段の調……………………（一四）
養老院………………………（一五）
ネクタイに…………………（一五）
別人の………………………（一五）
地味に着ていても…………（一六）
押しで行けと………………（一六）
失恋の痛手…………………（一六）
生酔いが……………………（一七）
釣革を………………………（一七）

勤評を…………………（一七）
酒が酒…………………（一八）
牧水でなくとも…………（一八）
酒の祖父………………（一八）
酔うているのに…………（一八）
酔えば出る……………（一九）
嫌いかと………………（一九）
猪口をもって…………（二〇）
数の子で………………（二〇）
自己批判………………（二〇）
酔はなくちゃ…………（二一）
妻も子も………………（二一）
招かざる………………（二二）
熱燗を…………………（二二）
ラッパ呑み……………（二二）
豪快に…………………（二三）
酒女許し………………（二三）
献盃献盃………………（二三）
無理矢理に……………（二四）
クダまかれるよりはと…（二四）
お流れを………………（二四）
絶句して………………（二五）
所望され………………（二五）
役員会…………………（二六）
飲み足らぬ……………（二六）
パトロンへ……………（二六）
追っぱろう気だな………（二七）
酒器自慢………………（二七）
この艶で………………（二七）
細い道…………………（二八）
買うて食う……………（二八）
母は来ず………………（二八）
ようここで……………（二九）
柿のなる家へ…………（二九）
下落したイチゴ………（二九）
王の座にまします………（三〇）
何の因果か……………（三〇）

夫婦を中心に

一生を…………………（三一）
蚤取って………………（三二）
ツンとした……………（三二）
へそくりの……………（三三）
迷い子札………………（三三）
麻雀と…………………（三四）
悪しざまに……………（三四）
避妊法やめて…………（三四）
女房の記憶に…………（三五）
子がいても……………（三五）
よだれ拭くにも………（三五）
子のカメラ……………（三五）
夫婦愛…………………（三六）

夫婦喧嘩で……………（三六）
洗濯機あんたも…………（三七）
若いのに負けず…………（三七）
湯の宿も……………（三八）
麦をまく……………（三八）
子へ頼り書く…………（三八）
敷きのしの……………（三九）
夢もなく……………（三九）
チャームする…………（三九）
うちのばあさん…………（四〇）
デシャ焼きの…………（四〇）
奥さんは……………（四〇）
子供等が……………（四一）
パン買って……………（四一）
妻として……………（四一）
おいしいと……………（四二）
丸刈にしようかと…………（四二）
刑事より……………（四三）
再婚し……………（四三）
金のない……………（四三）
うちの女房……………（四四）
長女ソッポを…………（四四）
奥さんの……………（四四）
尻に敷く……………（四五）
金の奴隷の……………（四五）
時代ですなァと…………（四六）
親だけが……………（四六）
断固許さず……………（四七）
焦げ臭いぞと…………（四七）
金盥……………（四七）
父なるが故に…………（四八）
殴打されて……………（四八）
英語の質問……………（四八）
兄遭難……………（四九）
蛇足の多さ……………（四九）
角帽と……………（四九）
背丈だけ……………（四九）
女体壮厳……………（五〇）
仲居して……………（五〇）
母なればこそ…………（五一）
おぼっちゃま…………（五一）
出来すぎる……………（五一）
継母が……………（五二）
水仙の……………（五二）
淋しかろと……………（五二）
空巣かと……………（五三）
母娘して……………（五三）
出戻りの……………（五三）
パラソルを……………（五四）
どの顔も……………（五四）
娘にも……………（五四）

年ごろが……………………（五五）
三味弾いてあげて…………（五五）
老嬢は………………………（五五）
もう二十……………………（五六）
アプレの娘…………………（五六）
うち非売品やと……………（五七）
早よ嫁に……………………（五七）
名士の仲人…………………（五七）
お見合の……………………（五八）
交際を………………………（五八）
何一つ………………………（五八）
出世すりゃ…………………（五九）
嫁かんでも…………………（五九）
ユアマザーと………………（五九）
精薄児………………………（六〇）
片言が………………………（六〇）
道楽な………………………（六一）
紙芝居………………………（六一）
うちの子が…………………（六一）
子の頭言わず………………（六二）
再婚の連れ子………………（六二）
弱い子が……………………（六二）
家出され……………………（六三）
子を叱る……………………（六三）
宮詣り………………………（六四）
子供の絵……………………（六四）
子が放送します……………（六四）
初節句………………………（六五）
先に脱ぐ……………………（六五）
席譲るどころか……………（六五）
花の色は……………………（六五）
パパママを…………………（六六）
石投げる……………………（六六）
まにあわぬ…………………（六六）
認識をさすべく……………（六七）
枯すすきだけです…………（六七）
子の目にも…………………（六七）
この雑煮で…………………（六八）
パパも留守…………………（六八）
辛抱して呉れる……………（六八）
アルコール…………………（六九）
吝嗇も………………………（六九）
孫ひとり……………………（七〇）
初孫の………………………（七〇）
初孫が………………………（七〇）
孫抱いて……………………（七一）
春眠の………………………（七一）
少年の………………………（七一）
女の子………………………（七二）
俺と寝た……………………（七二）
オイと云う…………………（七二）

旧友を……（七三）
落ちぶれた……（七三）
三等を……（七三）
俺の齢……（七四）
箸を割る……（七四）
おまわりさんを……（七四）
お前はまだ……（七五）
風船の……（七五）
息子卒業……（七五）
妙齢が……（七六）
還暦は……（七六）
老人のつもりで……（七六）
こいさんも……（七七）
邪魔にされ……（七七）
敬老会……（七八）
鼻かんで……（七八）

女・男

年四十……（八〇）
一円のお釣へ……（八〇）
紅一点……（八〇）
腕時計……（八一）
でもでもと……（八一）
ファッションショウ……（八一）
すねて見たけど……（八二）
窓ぎわの……（八二）
口ひげの……（八二）
磨かせて……（八三）
誂えたのんよと……（八三）
人を皆……（八三）
お握りで……（八四）
整然と……（八四）
本心が……（八四）
スピッツには……（八五）
塗下駄の……（八五）
足洗いし……（八五）
宿命が……（八五）
振返りはせぬかと……（八六）
かき眉毛……（八六）
螢光燈の……（八六）
この人も……（八七）
泣いても……（八七）
夜の女……（八七）
飲んじゃいや……（八八）
撫肩は……（八八）
馬鹿にした……（八八）
男みな……（八九）
巌丈な……（八九）
赤着てる方が……（八九）
男手の……（九〇）
二号置く……（九〇）
経験は……（九一）

又闇へ……（九一）
下積みで……（九一）
キスしてほしい……（九二）
三度目の……（九二）
がみがみと……（九二）
ハンサムだ……（九三）
便乗の車……（九三）
女一匹……（九四）

職業・職業人

商売の……（九六）
商売が……（九六）
メートルに……（九六）
ひまだから……（九六）
スポンサー……（九七）
鼻声に……（九七）
骨董屋……（九七）
奥さん奥さんと商魂の……（九八）
奥さん奥さんとかつぎや（九八）
見くびっていた……（九九）
軒下を……（九九）
御近所の……（九九）
なりわいの……（九九）
客種に知事も……（一〇〇）
目と鼻の……（一〇〇）
自転車の上で……（一〇〇）
さびおとす……（一〇一）
腐っても……（一〇一）
細長う……（一〇一）
千客万来……（一〇二）
根が生えた様に……（一〇三）
御近所は……（一〇三）
老ぬれば……（一〇三）
葬式に……（一〇四）
お泣きなさいと……（一〇四）
税務署が……（一〇四）
税務署で……（一〇四）
税金は……（一〇五）
見世物が……（一〇五）
サーカスが……（一〇六）
手錠かけてから……（一〇六）
駅長を出せと……（一〇六）
先生に云うたろ……（一〇七）
鉢巻をすれば……（一〇七）
デモってからの……（一〇七）
子供好き……（一〇八）
先生よ……（一〇八）
先生先生と……（一〇八）
恩師機嫌……（一〇九）
一本立出来ると……（一〇九）
予備校の広告……（一一〇）
入学へ……（一一〇）

中学生……（一一〇）
プラカード……（一一〇）
悪筆の方が……（一一一）
運転手と云う……（一一一）
子沢山の……（一一二）
独り居の僧で……（一一二）
貧乏の……（一一二）
経木書……（一一三）
老人を……（一一三）
眼に注射……（一一三）
婦人科へ……（一一四）
部分品……（一一四）
少しなら……（一一四）
病院の……（一一五）
往診の……（一一五）
医学会……（一一五）
診察室……（一一六）
お百姓さんに……（一一六）
百姓でなけりゃ……（一一六）
囲われたままで……（一一七）
三号になって……（一一七）
今日あたり……（一一七）
しゃなりしゃなり……（一一八）
不渡りと……（一一八）
お女将さんが……（一一八）
座布団に……（一一九）
妻のみでなく……（一一九）
啄木を……（一二〇）
電話口……（一二〇）
ハンサムの人から……（一二一）
終電車……（一二一）
送詞謝詞……（一二一）
ダンサーの……（一二一）

上役・下役

人間として……（一二四）
首相あわれ……（一二四）
首相云う……（一二四）
当選御礼……（一二五）
尾があれば……（一二五）
左派の左派……（一二五）
はからずも……（一二六）
遊説をして見て……（一二六）
清濁併呑……（一二六）
洗濯機……（一二七）
ポケットへ……（一二七）
野心家に……（一二七）
生字引……（一二八）
埋立ての……（一二八）
でも社長さんと……（一二九）
取締役会長になり……（一二九）
ノック聞き……（一二九）

巻頭へ……（一三〇）
幕間にも……（一三〇）
君たちが……（一三一）
香煙の中から……（一三一）
重役の会食……（一三一）
重役が……（一三二）
腹立ちが……（一三二）
世相険し……（一三二）
催促の……（一三三）
主任とは……（一三三）
ハイ耳掻きと……（一三三）
おえら方……（一三三）
大臣に……（一三四）
要職で……（一三四）
世論もう……（一三四）
本当の仕事は……（一三五）
振り上げて……（一三五）
下ッ端と……（一三五）
旗本社員……（一三六）
月給日……（一三六）
皆花見ですと……（一三六）
家族主義だからと……（一三七）
ストをして……（一三七）
メートル法……（一三八）
引退へ……（一三八）
四十年の勤続……（一三八）
五十五の満期……（一三八）
定年になるまで……（一三九）
定年が近く……（一三九）
定年の寂しさ……（一四〇）

衣・食・住

モーニング煙草を……（一四二）
モーニング着ても……（一四二）
縫目あるので……（一四二）
サックドレス……（一四二）
こんどめは……（一四三）
継あてて……（一四三）
湯豆腐で……（一四三）
かんと煮き……（一四四）
電化してみたが……（一四四）
火吹竹……（一四四）
一山にされる……（一四五）
すき焼の……（一四五）
利用価値……（一四五）
出刃庖丁らしく……（一四六）
自転車の……（一四六）
素うどんで……（一四六）
ハイお土産……（一四七）
パラソルを……（一四七）
写真向って……（一四七）
質流れの……（一四八）

イヤリング……（一四八）
紐つけて……（一四八）
銀行の……（一四九）
お燈明……（一四九）
騒音に……（一四九）
ベストセラー……（一五〇）
ゆたんぽの……（一五〇）
原子力……（一五〇）
棺桶に……（一五一）
下駄に鍵……（一五一）
ガス風呂の……（一五一）
門札を……（一五二）
インテリの……（一五二）
山ン中に……（一五三）
何をたく……（一五三）
嫌な隣だが……（一五三）
もげそうな……（一五三）
メリーに……（一五四）
受話器を……（一五四）
どの雨も……（一五四）
市場籠の……（一五五）
大風に……（一五五）
ヤジ馬は……（一五五）
また次へ……（一五六）
焼跡の柱……（一五六）

金

的確に……（一五八）
あけすけに……（一五八）
小遣を……（一五八）
自殺した……（一五九）
腹工合……（一五九）
われと来て……（一五九）
忘れてはいないが……（一六〇）
あきまへんやろかと……（一六〇）
善人であった……（一六一）
家出して来た……（一六一）
光陰遅々として……（一六一）
くじ一枚で……（一六二）
鼻糞の株で……（一六二）
株少し持って……（一六二）
課長いくら……（一六三）
やっと借れたのに……（一六三）
金使こた……（一六三）
買いました……（一六四）

趣味

直された癖で……（一六六）
記念碑を……（一六六）
お父さん……（一六六）
こけし皆……（一六七）
書道展……（一六七）
ハンマーより……（一六七）

草月流……(一六八)
順番に……(一六八)
よし来たと……(一六八)
名人の踊……(一六九)
御亭主の……(一六九)
わたくしの趣味は……(一六九)
たまに見た……(一七〇)
眼が覚めりゃ……(一七〇)
泥沼へ……(一七〇)
ロカビリー……(一七一)
黒帯の猛者も……(一七二)
始球式……(一七二)
フラフープ……(一七三)

旅・佛・神

僕の旅……(一七四)
宿の下駄……(一七四)
見送りの……(一七四)
聊はどれも……(一七五)
陽炎へ……(一七五)
平和と見たり……(一七五)
汽車の戸は……(一七六)
邪教か知らんが……(一七六)
大阪だ……(一七六)
我れは山の子……(一七六)
又かいな……(一七七)
大阪は……(一七七)
裏街も……(一七七)
二枚づつ……(一七七)
富士遠く……(一七八)
家族湯へ……(一七八)
踏切は……(一七九)
通る人なくとも……(一七九)
バンガロー……(一七九)
混乱の世へ……(一八〇)
シグナルは……(一八〇)
眺望がよすぎ……(一八一)
住吉さん……(一八一)
八百年の……(一八一)
神も仏も……(一八二)
折伏に……(一八二)
掌へのる……(一八二)
お燈明消えた……(一八三)
御無沙汰の……(一八三)
極楽で……(一八三)

動物・植物

そんなに見るなィと……(一八六)
見て貰う気を……(一八六)
立話長うて……(一八六)
境内の……(一八七)
春の雪……(一八七)
稲妻へ……(一八七)

まだ雨が……（一八七）
バケツとは……（一八八）
教室の窓へ……（一八八）
檻の鶴……（一八八）
飛んでも……（一八九）
動物園みな……（一八九）
冬陽背に……（一八九）
近づけば……（一八九）
なめくじが……（一九〇）
巻物の様に……（一九〇）
勝手口猫が来……（一九〇）
集団の威力……（一九一）
青草に……（一九一）
三月を……（一九一）
余っ程の……（一九一）
銀行の……（一九二）
こぼれては咲き……（一九二）
竜舌蘭……（一九二）

雑

車庫のため……（一九四）
順序不同と……（一九四）
手ぶらとは……（一九四）
じゃあ僕も……（一九四）
浪曲的……（一九五）
御援助の……（一九五）
恩愛にそむく……（一九六）
それも一理と……（一九六）
生きてゆくための……（一九六）
定刻に行けば……（一九七）
平凡の凡を……（一九七）
本心を……（一九七）
頼りにしてまっせと……（一九七）
悪例になると……（一九八）
二丁目に住んで……（一九八）
断ると言って……（一九九）
空壜を……（一九九）
べんちゃらやないでと…（一九九）
生れ変りますと……（二〇〇）
働きもせずに……（二〇〇）
次々と……（二〇一）
寒けたつものに……（二〇一）
禿げるのは……（二〇一）
禿げてても……（二〇二）
今度こそ……（二〇二）
禿げかけていますと……（二〇二）
信心をせよと……（二〇三）
ながぴくと思てか……（二〇三）
看護婦に……（二〇四）
胸病めば……（二〇四）
大病の……（二〇四）
人間に……（二〇五）

石の床……（二〇五）
順々に……（二〇六）
どの党も……（二〇六）
ローソクの……（二〇六）
轢死には……（二〇七）
新聞が……（二〇七）
スムースにやったと……（二〇七）
俗名をとどめて……（二〇八）
ビジネスのように……（二〇八）
盲人大会……（二〇八）
嘘ついて……（二〇九）
菜の花の……（二〇九）
立呑みで……（二〇九）
歳は歳だけの……（二一〇）
姓名学……（二一〇）
順番を……（二一〇）
影法師……（二一一）
今さっき……（二一一）
霧の街……（二一一）

「新川柳鑑賞」奥付・価二五〇円・昭和三十四年七月一日印刷・昭和三十四年七月十日発行・著者・麻生路郎・発行所・大阪市住吉区万代西五丁目二五・川柳雑誌社

麻生路郎★主宰（大正十三年創刊）

川柳の雑誌

本誌は斯界の最高峰の柳誌、内容の充実と誌代の低廉は本誌の誇りとするところ。現柳壇へ幾多の名家を送り出した本誌は貴方が柳壇への登竜門として選むべき最良のものである。即刻申込まれたし。

深く研究を続けたい人々のためには川柳不朽洞会へ入会の便宜がある。

誌代一部六〇円　送料四円
半ヵ年三八四円　〒共
一ヵ年　七二〇円　〒社負担
（切手代用可）

入門も・
奥義も
「川柳雑誌」から

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話　大阪 ㉗ 六〇八一
振替口座　大阪　七五〇五〇